

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第497集

たて
館Ⅱ 遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

2006

岩手県二戸地方振興局土木部
(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第497集
館II遺跡発掘調査報告書

頁	行	部	正
2	14	日本測地系	世界測地系
抄錄		(北緯・東経は日本測地形による)	(北緯・東経は世界測地系による)

館Ⅱ 遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査



御旧領之内福岡通絵図（部分）元文四年

（盛岡市中央公民館蔵）



岩手県管轄陸奥国二戸郡御山村（部分）年代不明

(岩手県立図書館蔵)

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県上づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その上地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業に関連して平成17年度に発掘調査された二戸市館II遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、中世後期に属すると考えられる館跡に伴う複数の平坦地（曲輪）、堀が検出され、中世の陶磁器破片や茶臼などの遺物が出土しました。浄法寺地区には数多くの中世城館跡が存在していますが、調査が行われているものは少なく、今回の調査成果は中世における当地区の歴史を知るための貴重な資料となると思われます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました二戸地方振興局土木部、二戸市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、厚く感謝の意を表します。

平成18年11月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 武田 牧雄

例　　言

1. 本報告書は岩手県二戸市淨法寺町御山館1番地に所在する館Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本発掘調査は、主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 岩手県遺跡データベース登録の遺跡コードはJ-E 37-0075、調査時の遺跡略号はTT II-05である。
4. 調査開始当初の調査対象面積（当初）は3,740m²、調査実施面積（実績）は4,730m²である。
5. 発掘調査の期間、担当者は次のとおりである。

野外調査	平成17年5月19日～平成17年9月8日	丸山直美、千葉正彦
室内整理	平成17年11月1日～平成18年3月31日	丸山直美、千葉正彦
6. 出土遺物の鑑定、保存処理は次のの方々および機関に依頼した。

石器の石材石質鑑定	矢内丰三、柳沢忠昭（花崗岩研究会）
鉄製品の保存処理	赤沼英男（岩手県立博物館）
7. 基準点測量および航空写真撮影は次の機関に委託した。

基準点測量	（社）下斗木測量設計
地形測量・航空写真撮影	（株）シン技術コンサル
8. 野外調査・室内整理・報告書作成にあたり、次の方々ならびに機関から指導・助言・協力をいたいたいた。(敬称略)

山口巖、柴田知一（二戸市教育委員会）、室野秀文（盛岡市遺跡の学び館）、似内啓邦（盛岡市中央公民館）、青木宗準（岩手県立大学茶道部指導顧問・裏千家茶道正教授）、大西市造（株式会社丸久小山園）、菅野文夫（岩手大学）、鈴木聰（二戸市役所）、二戸市教育委員会、盛岡市中央公民館、岩手県立図書館
--
9. 本書の執筆・編集・校正は丸山・千葉が行い、文末にそれぞれ名前を記した。
10. 本書では国土地理院発行の次の地形図を使用した。

1/25,000地形図	淨法寺、陸奥荒屋、駒ヶ嶺、福庭岱
1/50,000地形図	淨法寺、荒屋、一戸、葛巻、田子、三戸
11. 調査で得られた出土遺物および調査に係る諸記録は岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。
12. 調査成果の一部については、現地説明会資料、平成17年度遺跡報告会発表資料および「平成17年度発掘調査報告書」（岩文振調報第490集）等において公表しているが、本書の記載内容と異なる場合は本書の記載内容が優先する。

目 次

I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の環境	2
1. 遺跡の位置と環境	2
2. 地形的環境	3
3. 地質的環境と基本層序	3
4. 周辺の遺跡	5
5. 発掘調査以外で得た知見	6
III. 調査と整理の方法	7
1. 野外調査の経過	7
2. 野外調査の方法	8
3. 室内整理の経過と方法	9
4. 掲載の方法	10
IV. 検出遺構と出土遺物	11
1. 縄文時代の検出遺構	11
2. 古代の検出遺構	43
3. 中世の検出遺構	46
4. 時期不明の検出遺構	78
V. 出土遺物	87
1. 縄文土器	87
2. 土師器・須恵器	87
3. 陶磁器	87
4. 土製品	87
5. 石器・石製品	87
6. 鉄製品	88
7. 古銭	88
8. 自然遺物	88
VI. まとめと考察	97
1. 縄文時代	97
2. 中世	103
報告書抄録	161

図版目次

第1図 岩手県全図	1	第12図 25~28号土坑	24
第2図 地形分類図と地質縦断図	2	第13図 29~32号土坑	26
第3図 周辺の遺跡分布図（中世）	4	第14図 33~35・39号土坑	28
第4図 清法寺町の縄文遺跡	6	第15図 40~42号土坑	30
第5図 1号炉跡	12	第16図 1~3号陥し穴状遺構	31
第6図 1~3・5号土坑	13	第17図 4号土坑・4~6号陥し穴状遺構	32
第7図 6~9号土坑	14	第18図 7~9号陥し穴状遺構	34
第8図 10~11・22号土坑	16	第19図 10~11・13~15号陥し穴状遺構	36
第9図 12~15号土坑	18	第20図 16~19号陥し穴状遺構	38
第10図 16~19号土坑	20	第21図 36号土坑・20・21号陥し穴状遺構	40
第11図 20・21・23・24号土坑	22	第22図 37~38号土坑・22・23号陥し穴状遺構	42

第23回	1・2号堅穴住居跡(1)	44	第47回	3・4号堅穴状遺構	78
第24回	1・2号堅穴住居跡(2)	45	第48回	5・6号堅穴状遺構	79
第25回	3号堅穴住居跡	46	第49回	7号堅穴状遺構	80
第26回	1号焼上遺構	47	第50回	1号平坦地柱穴状小ビット	80
第27回	1・3号半平坦地・1・2号切岸状遺構	48	第51回	2号平坦地柱穴状小ビット(1)	81
第28回	1・2号半平坦地・1号切岸状遺構	50	第52回	2号平坦地柱穴状小ビット(2)	83
第29回	2・3号半平坦地・2号切岸状遺構	52	第53回	3号平坦地柱穴状小ビット	83
第30回	4号平坦地	53	第54回	4号平坦地柱穴状小ビット	85
第31回	5・6号平坦地	54	第55回	1号墓坑(獸骨出土)	86
第32回	1・3号堀跡・1号大溝跡	56	第56回	茶臼の各計測部位	88
第33回	1・2号堀跡	58	第57回	縄文土器・土師器	91
第34回	2・3号堀跡・1号土塁	60	第58回	土器類・須恵器・陶磁器・土製品・石器	92
第35回	1・3号堀跡	61	第59回	石器・石製品	93
第36回	1号大溝跡	62	第60回	銅製品・吉鉢	94
第37回	2号大溝跡	64	第61回	岩手県内出土茶臼集成図	95
第38回	1号門跡?	65	第62回	縫し穴状遺構形態分類図	98
第39回	1号掘立柱建物跡	66	第63回	縫し穴状遺構配置図	98
第40回	1・2号堅穴建物跡	68	第64回	岩手県北部における縫し穴状遺構集成図	101
第41回	3・4号堅穴建物跡	69	第65回	浄法寺氏系図	104
第42回	5号堅穴建物跡	70	第66回	二戸郡・二戸市における中世城館分布図	109
第43回	6・7号堅穴建物跡	72	第67回	周辺の縫穴状遺構張り図	111
第44回	8・9号堅穴建物跡	74	第68回	館II遺跡虎口・連結路想定図	113
第45回	1号堅穴状遺構(1)	76	第69回	館II遺跡張り変遷想定図(中世)	116
第46回	1号堅穴状遺構(2)・ 2号堅穴状遺構	77	館II遺跡(陣場・中館)・不動館張り図	118	

表 目 次

第1表	周辺の遺跡(中世)	4	第11表	土製品観察表	90
第2表	浄法寺町の縄文遺跡	6	第12表	石器・石製品観察表	90
第3表	1号平坦地柱穴状小ビット計測表	80	第13表	茶臼観察表	90
第4表	2号平坦地柱穴状小ビット計測表(1)	82	第14表	銅製品観察表	90
第5表	3号平坦地柱穴状小ビット計測表	83	第15表	古鉢観察表	90
第6表	2号平坦地柱穴状小ビット計測表(2)	84	第16表	その他の観察表(動物遺存体)	90
第7表	4号平坦地柱穴状小ビット計測表	85	第17表	土坑計測値一覧	100
第8表	縄文土器観察表	89	第18表	縫し穴状遺構計測値一覧	100
第9表	土師器・須恵器観察表	89	第19表	三戸郡・二戸市における中世の遺跡・館跡	107
第10表	陶磁器観察表	89			

写真図版目次

写真図版1	空中写真	120	写真図版22	4~6号平坦地	141
写真図版2	1号炉跡・1・2号土坑	121	写真図版23	1~3号堀跡・1・2号大溝跡	142
写真図版3	3・5~8号土坑	122	写真図版24	2・3号堀跡・遺物出土状況	143
写真図版4	9~12号土坑	123	写真図版25	1号人清跡	144
写真図版5	13~16号土坑	124	写真図版26	2号大溝跡・1号土坑	145
写真図版6	17~20号土坑	125	写真図版27	1号掘立柱建物跡	146
写真図版7	21~24号土坑	126	写真図版28	1・2号堅穴建物跡	147
写真図版8	25~28号土坑	127	写真図版29	3・4号堅穴建物跡	148
写真図版9	29~32号土坑	128	写真図版30	5号堅穴建物跡	149
写真図版10	33~36号土坑	129	写真図版31	6号堅穴建物跡	150
写真図版11	37~40・42号土坑	130	写真図版32	7号堅穴建物跡	151
写真図版12	41号土坑・1~3号縫し穴状遺構	131	写真図版33	8号堅穴建物跡	152
写真図版13	4~7号縫し穴状遺構(4号土坑)	132	写真図版34	9号堅穴建物跡	153
写真図版14	8~11号縫し穴状遺構	133	写真図版35	1~4号堅穴状遺構	154
写真図版15	12~15号縫し穴状遺構	134	写真図版36	2~7号堅穴状遺構	155
写真図版16	16~19号縫し穴状遺構	135	写真図版37	1号墓坑(獸骨出土)	156
写真図版17	20~23号縫し穴状遺構	136	写真図版38	出土遺物1	157
写真図版18	1・2号堅穴住居跡	137	写真図版39	出土遺物2	158
写真図版19	2・3号堅穴住居跡・1号焼土遺構	138	写真図版40	出土遺物3	159
写真図版20	1号平坦地・1号切岸状遺構	139	写真図版41	出土遺物4	160
写真図版21	2・3号平坦地・2号切岸状遺構	140			

I. 調査に至る経過

館II遺跡は、「主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業」工事に伴い、事業計画区間に存することから発掘調査を行うことになったものである。

主要地方道二戸五日市線は二戸市南西部に位置し、二戸市と八幡平市を結ぶ道路であり、その機能は東北縦貫自動車道八戸線の並行路線としての代替可能な幹線道路である。事業対象区域である「浄法寺工区」においては、浄法寺の中心地に位置しており、車道の幅員が狭い上に歩道がなく、さらに見通しの悪いカーブが多いことから、危険な状態となっている。そのような中、安全・安心に暮らせる地域の実現を目指して平成8年に「新交流ネットワーク道路整備事業」により事業着手したものであるが、平成16年度に新たに「緊急地方道路整備事業」の採択となり早期完成を目指すものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局土木部から平成16年7月21日付け二地士第298号により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた県教育委員会では、平成16年7月26日と同年8月2日に試掘調査を実施し、工事に着手するには館II遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成16年8月5日付け教生第661号により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は県教育委員会と協議し、平成17年度に財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結して発掘調査を実施することとなった。
(二戸地方振興局土木部)



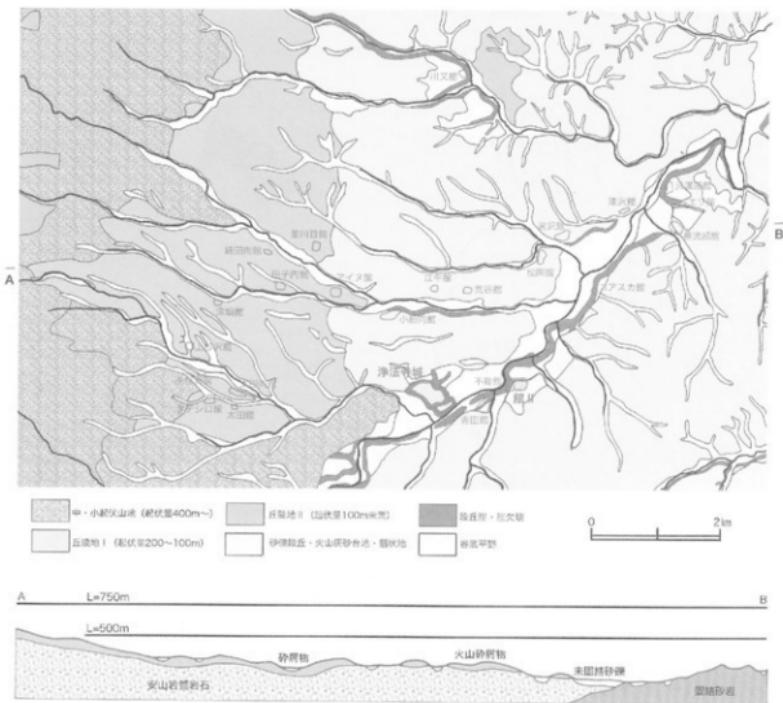
第1図 岩手県全図

II. 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と環境

館Ⅱ遺跡は岩手県北部の二戸市淨法寺町御山館（調査時点では二戸郡淨法寺町大字御山字館）地内に所在する。現在の二戸市は、平成18年1月に二戸市と二戸郡淨法寺町が合併する形で成立した。平成17年度の統計によれば、市域の総面積は420.31 km²である。二戸市は岩手県北部に位置し、西の八幡平市、南の一戸町、東の九戸村・輕米町と境を接し、北は県境を挟んで青森県三戸町・田子町・南部町と接する。遺跡の所在する二戸市淨法寺町〔以下、単に「淨法寺町」と略す〕は二戸市の西部、合併前の旧・淨法寺町部分にあたり、人口5,122人、面積179.7 km²を占める。旧・淨法寺町は明治22年に淨法寺、駒ヶ嶺、大清水、漆沢、御山の5村合併の後、昭和15年に町制施行により成立した。これらの旧村名は大字として残っており、二戸市と合併した現在でも一部地名に名残を残している。

館Ⅱ遺跡は、旧淨法寺町役場から東約1km、安比川右岸の海拔214～222mの丘陵上にある。その位置は国土地理院発行の地形図1/25,000「淨法寺」N K-54-18-15-2図幅に含まれており、北緯40°11'5"、東経141°9'57"付近〔日本測地系〕である。遺跡は、小河川によって開削された自然



第2図 地形分類図と地質縦断図

地形の谷により東西双方を両された丘陵縁辺部に広がっている。安比川との比高は32~39mである。現況では大部分が山林・原野であり、緩斜面の一部は開墾されて畠地となっている。また、館II遺跡の所在する御山地区には、聖武天皇により陸奥へ遣わされた仏僧行基が神龜5(728)年に仏堂を建てたことが縁起とされる天台宗の古刹・八葉山天台寺がある。

2. 地形的環境

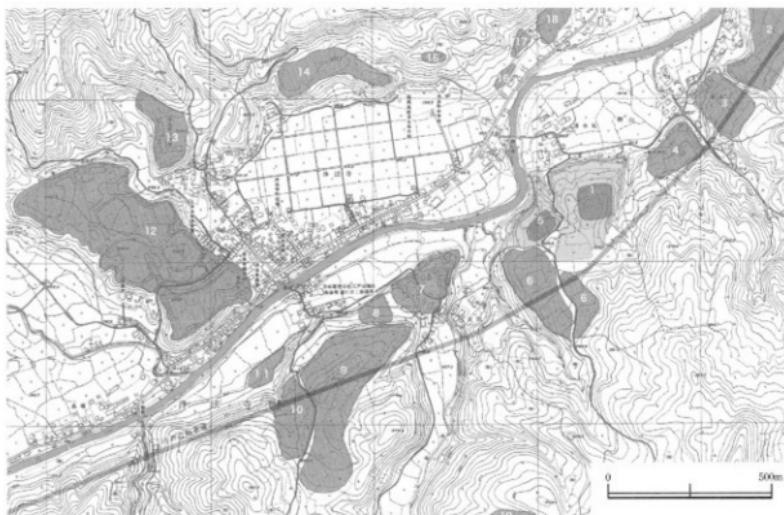
浄法寺町の大部分は山地・丘陵地で占められている(第2図)。安比川より西側は、稲庭岳(1,078m)を頂点とする中・小起伏山地(起伏量400m以下)、それに続く丘陵地(起伏量200m以下)が広く分布しており、東に向かって高度を下げている。稲庭岳は火成岩により構成される火山であるが、風化浸食によりその原型を殆ど残していない。一方、安比川の東・南側も様相は同じであり、西岳(1,018m)や七時雨山(1,060m)から続く丘陵地によって占められている。八幡平市に源流を持つ安比川が浄法寺町の中央を蛇行しつつ北東に流れ、東西双方から小河川が山地・丘陵を下刻しつつ安比川へと流れ込んでいる。安比川およびその支流の流域には谷底平野や台地(段丘)が形成されている。高位から砂礫段丘I・火山灰砂台地・砂礫段丘II・砂礫段丘IIIの「台地」各面、扇状地・谷底平野の「低地」が分布しているが、その分布は断続的かつ狭小であり発達は良好ではない(図ではこれらの台地が狭小であるため、台地各面と扇状地を一括して示した)。浄法寺の中心部は、安比川沿いの狭い谷底平野に形成されている。第2図に示したとおり、本遺跡を含めた浄法寺の城館の多くは、平野を一望に見通せる高位の砂礫段丘面に立地する点で共通している(註1)。

館II遺跡の周辺は台地に分類され、安比川の右岸段丘縁辺部の中位段丘面にあたる。遺跡の載る台地は東西両側および中央を自然の谷筋によって画されている。西側は町道に沿って流れる沢により狭い谷地形となっており、東側でもやはり幅50mほどの谷地形が区画となっている。これらの谷はいずれも堰として利用されているものと考えられる。また中央にも沢が入って谷地形が見られるが、後述のとおり、この沢は堀(1号堀)に改変されていた。地元の古老によれば、台地東側を「陣場」、西側を「中館」と呼び習わしていたという。館II遺跡西隣に接する不動館は「お不動様」と呼ばれており、進跡台帳上では二つの遺跡に分けられるが、三つの館が並列的に配されている様相が垣間見える。なお現在では、東流する安比川が本遺跡西隣に隣接する不動館の載る段丘に突き当たり、それを侵食しつつ一旦北へと流れを変えている。そのため、不動館は安比川により北~西部を抉り取られた状態となっており、往時の姿を留めてはいない。

註1) 岩手県1979「土地分類基本調査」による。

3. 地質的環境と基本層序

浄法寺の表層地質は第2図の地質縦断図に示すとおりである(註1)。東西の山稜部分は更新世の凝灰岩質岩石や固結砂岩を基底とし、その上位に完新世の火山碎屑物や安山岩質岩石が載っている。安比川およびそれに流れ込む小河川の下刻・堆積作用により細かな谷底地形が形成されて未固結の砂礫や碎屑物が堆積している。館II遺跡の所在する御山地区付近は、更新世の固結砂岩体の分布域にあたり、地質的には比較的古い様相を示している地域である。二戸市・輕米町・九戸村などの県北内陸部では、ローム質火山灰・浮石凝灰岩・スコリア質火山灰などの火山碎屑物が層をなして堆積している。これらの起源は十和田系の火山噴出物であり、一般的には上位から、十和田a火山灰・十和田b火山



第3図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代	種別	遺像・遺物など	備考
1	船Ⅲ	縄文・古代・中世	城壁跡	曲輪、壁、堅穴建物跡、堅立柱建物跡、土塁、箱し穴 等	報告書記
2	飛鳥台地I	縄文～近世	集落跡	堅穴住居跡、堅穴建物跡、土塁、箱し穴 他	岩手県縄文120号
3	安北内I	縄文・古代	集落跡	箱し穴、縄文土器	岩手県縄文106号
4	船I	縄文	散布地	縄文土器	
5	不動原	縄文・中世	城壁跡	曲輪、二重堀、土塁、縄文土器	
6	大久保I	縄文・中世	集落跡	箱し穴、縄文土器 他	岩手県縄文90集
7	古田館	古代・中世	城壁跡	曲輪、板、瓦忠器	岩手県土調査中
8	桂平I	古代	散布地	土師器	
9	桂平II	縄文	集落跡	堅穴住居跡、土塁、箱し穴 他	岩手県縄文130集
10	沢久保I	縄文～近世	集落跡	堅穴住居跡、土塁、箱し穴 他	岩手県縄文109集
11	大湊	縄文	散布地	縄文土器	
12	淨法寺城	中世	城壁跡	曲輪、板、側立柱建物跡、堅穴建物跡、青磁・白磁 他	浄法寺町教委1998など
13	上野野	古代	集落跡	土師器	埋蔵
14	小池	古代	集落跡	土師器	旧「小池Ⅰ」
15	小物塚	不明	塚		
16	岩塚Ⅲ	縄文	散布地	縄文土器	
17	岩塚IV	縄文	散布地	縄文土器	
18	岩塚V	縄文・古代	散布地	縄文土器、土師器	
19	大久保Ⅱ	縄文	散在地	縄文土器	
安北内E	縄文	散在地	縄文土器	安北内Iと同じ?	
大久保Ⅲ	縄文	散布地	縄文土器	位置不明(台帳記載のみ)	
大久保Ⅳ	縄文	散布地	縄文土器	位置不明(台帳記載のみ)	

灰、中掘浮石、南部浮石、二ノ倉火山灰、八戸火山灰、大不動浮石流凝灰岩という層序が確認されている。二ノ倉よりも上位が完新世に堆積した火山灰である。これらのうち、本遺跡で観察されるのは南部浮石と二ノ倉火山灰（推定）、八戸火山灰である（註2）。南部浮石は黄褐色を呈する径5mm程の浮石粒からなり、県北部では「ゴロタ」と呼ばれる。旧二戸市内では南部浮石が場合によっては1mを超えるように厚い層をなしているが、浄法寺町では純粹な南部浮石層は確認できない。本遺跡の場合も、ゴロタは層をなしておらず、Ⅲ層（黒色土）中に疎らに混入する形で存在している。一方、二ノ

倉火山灰は明褐色を呈し、赤褐色バミス粒を含む。本遺跡では明確な層として認識できないが、Ⅲ層とⅣ層の間に見られる橙色バミス粒が、二ノ倉火山灰相当ではないかと思われる。八戸火山灰は更新世のローム質火山灰であり、噴出時期は14C年代では10,000～13,000年B.P.と推定されている。本遺跡の場合、八戸火山灰は土質・色調の違いから上下2層に分かれている。上層は黄褐色～褐色を呈しており、その上位は土壤化して黒褐色化している。一方、下層は白色～乳白色を呈するローム層であるが、上層に比して粘性・しまりに欠けており、水分を含むと脆く崩壊しやすい。

調査区域では中世の普請の影響で地点により堆積様相が異なる。調査区西半部（1・2号堀跡以西）においては、普請により大規模な地形改変が行われた結果、Ⅱ・Ⅲ層が失われている。そのため、南東側の平坦地奥側では表土直下でⅣ・V層が露出し、平坦面先端（段際）付近では表土直下で普請により盛られたV層が確認できる。一方、1号堀跡以東は現況で段差が確認できたが、普請の影響は思いの外少なかったようで、Ⅱ層以下の土層が良好に残存している。調査区内の模式的な層序は次のとおりである。

I層 表土・耕作土。

II層 中世館普請に伴う盛り土、整地土層。Ⅲ～VI層起源の混合土。

III層 10YR2/1 黒色～10YR3/2 黒褐色シルト。白色バミス（「南部浮石」To-Nb相当）を1～3%ほど含む。主に調査区東側で残存している。遺構検出面。微妙な差異（色調、混入物の多寡）により上位（Ⅲa層）・下位（Ⅲb層）に細分可能である。下位には7.5YR7/6 橙色バミス層（「二ノ倉火山灰」To-Nk相当？）が断続的に存在している。

IV層 10YR3/3 喰褐色～4/4 褐色シルト。漸移層。遺構検出面。

V層 10YR7/6 黄褐色ローム。「八戸火山灰」To-H層（上層）。遺構検出面。

VI層 2.5Y8/2 灰白色ローム。浮石流凝灰岩。「八戸火山灰」To-H層（下層）。層厚不明。削剥部分においては遺構検出面。

註1) 岩手県教委「岩手県遺跡情報検索システム」（平成16年版）のデータによる。また第3図は同システムで検索した画像データをもとに一部改変したものである。

註2) 内閣総理及び二戸市教育委員会山口氏のご教示による。テフラ分析は実施していない。

4. 周辺の遺跡

浄法寺町では平成17年時点では、縄文時代から近世までの総数429箇所の遺跡が登録されている（註1）。本遺跡の周辺にも複数の遺跡が存在しており（第3図・第65図）、町道を挟んで西隣に隣接して不動館跡、西約0.5kmに古田館跡、同じく西約1.2kmには浄法寺城跡が存在する。館跡以外でも東北縦貫自動車道八戸線に閑連して発掘調査が行われた浄法寺町内の遺跡群で中世の遺構が検出されている。駒ヶ嶺地区の五庵II遺跡（第65図133：以下、図版No省略）では、西向きの尾根上に立地する、中世～近世の「堅穴住居跡」（=堅穴建物跡）20棟、住居跡状遺構2棟、掘立柱建物跡1棟が纏まって検出された。遺跡の西側には駒ヶ嶺館跡があり、館に閑連する遺跡（館の一部か）と思われる。中世の堅穴建物跡は、駒ヶ嶺地区の五庵I遺跡（134）で1棟、本遺跡に近い御山地区の飛鳥台地I遺跡（111）で3棟、それぞれ検出されている。中世以外の遺跡については、当遺跡周辺の台地上に縄文時代～古代の遺跡群が存在しており、広沖遺跡、飛鳥台地I遺跡、安比内I遺跡、大久保I遺跡、桂平遺跡、沼久保遺跡などについて東北自動車道八戸線建設に際して当センターが発掘調査を実施している（第4図）。これら縄文・古代の遺跡との関わりについては、後述の第VI章で考察することとする。

5. 発掘調査以外で得た知見



第4図 淫法寺町の縄文遺跡

第2表 淫法寺町の縄文遺跡

*調査済の遺跡のみ

No.	遺跡名	標高	時期	縄穴状遺構	他の発生遺跡など
1	広津	198 - 204m	初期～中葉（大洞B～C式）	A・B	土壌（？）
2	飛鳥台地I	200 - 230m	初期	◎・B・C	堅穴住居跡（B式期）、土壌
3	安比内I	215 - 219m	中葉（C 1式）	◎	土壌少量
4	船II	209 - 221m	中葉（C 2式）	◎・C	土壌（草木？）
5	大久保I	237 - 246m	中葉（C 2式）	A	土壌少量
6	船久保（1）	238 - 245m	後葉なし（前・後葉）	A・B・◎	
7	沼久保（1）	230 - 245m	初期～末葉	◎・C	土壌少量
8	溝上I	233 - 264m	（後葉期）	◎	
9	溝上II	238 - 248m	（後葉期）～晩期松脂	◎	土壌少量
10	死闘II	245 - 257m	残葉末（～後葉）	なし	土壌少量
11	五葉III	237 - 249m	残葉末（～後葉）	A	堅穴住居跡（A？式期？）
12	五葉I	240 - 251m	中葉（C 1～C 2式）	◎・B・◎	堅穴住居跡（C 2式期）、土壌
13	田余内I	250 - 266m	前～中葉	◎・C	土壌少量
14	船ノ本平Ⅲ	263 - 282m	中葉（C 2式）	◎・B・C	土壌少量
15	上野跡	300 - 315m	初期～末葉（B～A？式）	なし	堅穴住居跡（A式期を含む各葉）、土壌、獨立住居跡跡
16	野瀬集落	350 - 360m	中葉（C 1式）	なし	堅穴住居跡（C 1式）、土壌、土壌少量

（縄穴状遺構のアルファベット記号はA,(3)の形態分類と対応）

5. 発掘調査以外で得た知見

本遺跡の館跡は、その存在について発掘調査が実施されるまで知られていなかった。館II遺跡は「遺跡登録台帳」（県教育委員会）によると「古代の散布地」となっており、かつその遺跡範囲は丘陵頂部平坦面（「陣場」部分）を括っている。平成16年度、館II遺跡が県道改修事業の路線隣接地となり、試掘調査が行われた際、沢状の落ち込み部分が堀ではないかと判断され、初めて館跡の可能性

が示唆されるに至った。この時点まで、本遺跡が全体として一つの館跡であるとは認識されていなかったのである。本遺跡は文献史料に全く登場していない館跡であり、館主や館の存続時期等、推測する根拠がない。そこで、周辺住民からの聞き取り、現地踏査、絵図・地籍図の判読、背景となる中世北奥の政治状況の把握など、広範な情報を収集して情報の不足を補うことを目指した。

調査区を含めた本遺跡の縄張りを把握すべく、調査字盤に踏査を行った。また、調査終了時に盛岡市教育委員会の室野秀文氏に現地指導を依頼し、不動館を含めた3つの館全体を踏査しつつ、縄張りの具体についてご指導いただいた。

III. 調査と整理の方法

1. 野外調査の経過

平成17年5月19日（木）、調査機材を搬入、現場の設営を行い、調査を開始した。現況で調査区東側付近は沢状の溝地となっており、堀であると認識できた。ただし、自然の沢地形に殆ど手を加えずに堀として代用している場合、確認調査のみで可、との指示を受けており、作業の工程上、取り急ぎ確認が必要であった。そこで窪み部分にトレンチを設定して掘り下げた。法面は上方で傾斜が緩いものの、次第に急傾斜に角度が変わっており、人為的に改変されていることが判明。遺構、堀であることが確認された。この窪み部分は現在でも上方から水が伏流しており、掘削すると湧水してくる。この水を処理しないことには、堀の検査は難しい状態であった。一方、高位の平坦面についてはトレンチを設定して掘り下げたが、表土は意外に浅く、南側（斜面上方寄り）では表土直下でV層（白色ローム）が露出した。表土直下が館の曲輪面・遺構検出面と認識し、人力による表土除去を開始した。24日（火）、降雨による作業中止を利用して、遺跡（城館）全体の踏査、縄張り図の作成を試みた。調査区のある「中館」から東へ広がる「陣場」一帯を踏査した結果、陣場の丘陵頂部には比較的広い緩斜面が広がっており主郭的な場所と思われること、「主郭」の周囲には帶曲輪・土塁・堀切・犬走？・桥形？と推測される痕跡が見られることなど、館II遺跡が明らかに中世城館であることを再確認した。

6月8日（木）、1号堀の底面までトレンチを入れた。堀は予想よりも深く、人手では危険なため、重機により段階的に掘り下げ、中央付近の埋土様相を確認した。同日、県教育委員会生涯学習文化課（以後、生文課と略記する）・二戸地方振興局土木部の立会の下、現地協議が行われた。当初の調査範囲外にあたる、堀より東側部分が（帶）曲輪である可能性が生じたため、範囲を拡張して調査を行うか否か、について協議するものであった。その結果、当該部分の調査が必要として堀以東の990m²を調査範囲に繰り入れ、調査面積は4,730m²となった。22日（水）、1号堀跡の北端にトレンチを入れて、堀の延長方向を確認した。その結果、1号堀跡はやや北西へ屈曲しつつ、段丘崖へ抜けていることが判明した。覆土の断面を見ると、表土直下で八戸火山灰下層の白色土がよく堆積していた。この覆土様相が自然堆積なのか、人為的な埋め戻し行為の所産であるか、判然としなかった。30日（木）、堀中央部に残していた土垣ベルトの断面記録を試み、重機を使用してトレンチ状に埋土を掘削した。しかし、湧水によって水分を含んで軟弱化した土層ベルトは、たちまち崩落し始めた。危険な状況だったため、湧水の様子を窺ってから精査することとした。

しかし、7月に入ると犬吠不順が続いた。1号堀跡付近は土壌（八戸火山灰下層）の性格上滑りや

2. 野外調査の方法

すい上、ただでさえ崩れやすい堀埋土がさらに脆弱になってしまったため、1号堀跡の精査はいよいよ難渋した。この時期、やむを得ず1号堀跡の精査を中断し、2号平坦地南西側の柱穴群（のちの1号掘立柱建物跡を構成）、堀以東の表土除去および検出作業を優先して進めた。後者区域では、自然堆積の黒色土（Ⅲ層）が残存しており、この黒色土上面が曲輪としての使用面と判断し、検出を行った。しかし結果的に、柱穴等は検出されなかつたが、1号堀跡の東側で堀に平行する溝状のプランを検出した。精査の結果、深さ30~40cmほどと、堀と呼ぶほどには深くなかった（1号大溝跡）。一方、2号平坦地南西側では掘立柱建物跡を構成すると見られる柱穴状小ピットが多数検出された。これら柱穴群の精査は天候不順のためここでも難航し、降雨の度に精査途中および完掘後の柱穴が地山の砂で埋没、その都度再掘削が繰り返された。この一連の作業の中で消失、或は埋没により柱穴の見落としが生じた可能性も否めない。

幾分天候が回復した13日（水）以降、重機による堀埋土掘削を本格的に行なった。堀の上層ベルトはメインベルト部分のみ残して、他の部分は重機で掘削した。ベルト崩壊の危険性があったため、掘削直後に十層断面の写真撮影・実測を取り急ぎ行い、ベルトを除去して、難渋した1号堀跡をようやく完掘した。なお、堀完掘後に湧水によって脆弱となった堀法面が崩壊した。

8月20日（土）午前、現地説明会を開催した（参加者44名）。午後、5・6号平坦地部分のⅢ層を除去し、縄文時代土坑の検出を開始した。29日（月）、生文課の立会の下、調査終了確認が行われた。その結果、東側調査区における縄文土坑の精査の進行状況から見て、調査終了を当初予定31日から翌月8日まで延長することになった。30日（火）、調査区の航空写真を撮影するとともに、調査時点での現況地形測量を行なった。

9月1日（木）、他遺跡の調査開始に伴って千葉が離脱し、小山内文化財専門員が調査支援する体制となった。以降、曲輪整地層の断ち割り、縄文土坑の精査を進めた。結果的に東側調査区では上坑・陥し穴状遺構10基が検出された。8日（木）、作業を終了し、機材を搬出して調査終了した。

2. 野外調査の方法

＜調査体制＞ 調査員2名、作業員16名の体制である。作業員の中には、かつて当センターが実施した調査や地元教育委員会の調査に参加した経験者もいる。

＜グリッドの設定＞ 調査区は丘陵縁辺の緩斜面部にあたり、北東方向への向斜を示している。しかし、その傾斜は緩いものであり、傾斜に沿ったグリッド設定までは必要ないと考えて、調査区に日本測地系にもとづく平面直角座標系に即した調査区割り（グリッド）を設定した。調査区内の任意の基点（X=20,216、Y=28,584）を調査座標原点とし、平面直角座標系に載り、この点で直交する東西・南北の軸線をそれぞれ設定した。それぞれの軸線を基点から4m刻みに分割した。各刻みには、南北方向では調査区の傾斜を考慮して斜面上方側である南から算用数字（1~28）を、東西方向へは東から順にアルファベット（A~Y）を付して、調査区を覆うように算用数字とアルファベットの組み合わせにより呼称される4m四方のグリッドを設定した（付図）。

調査時に設定した基準点は次のとおりである。

基点1 X=20,216 Y=28,584 H=222.115m 基点2 X=20,256 Y=28,584 H=215.811m

補点1 X=20,216 Y=28,552 H=214.425m 补点2 X=20,236 Y=28,552 H=214.602m

補点3 X=20,236 Y=28,584 H=218.466m 补点4 X=20,256 Y=28,616 H=215.953m

＜粗掘りと遺構検出＞ 調査区は基本的に表土が薄く、特に調査区西半部分は表土直下が遺構検出面

であった。そこで、斜面向上方側（1号曲輪～2号曲輪南半部付近）については可能な限り人力で表土を剥ぎ、斜面向下方側（2号曲輪北半～3号帶曲輪付近）は重機を用いて粗掘りを行った。造構検出は表土直下の中世整地面（II～V層面）で行い、以後、primaryな土層が残る部分は掘り下げながら順次検出を行った。造構は「黄褐色に黒」、「白色にくすんだ灰褐色」などの形で検出され、造構識別は比較的易しい。ただし、Ⅲ層が残存する東側調査区については、縄文時代の土坑が「黒に黒」状態で検出されるはずであるが難しく、V層まで掘り下げた段階でしか検出できなかった。

＜検出造構名＞ 野外調査では、検出した造構に対してその種別に応じた略号と検出順の数字を組み合わせた造構名を使用し、例えば「S I 01、S D 04、S K 20、S K T 05」などと呼称した。その後、整理段階で造構名を付け直し、それぞれ「1号竪穴住居跡、4号大溝跡、20号土坑、5号陥し穴状遺構」という形に改めている。

＜造構精査＞ 造構は種別・規模に応じた方法で精査を行った。竪穴住居跡・竪穴建物跡・竪穴状遺構は4分法により、土坑・柱穴は2分法によった。柱穴についてはプラン確認後、全体を5cm程度掘り下げて柱痕跡を確認した後、半裁した。また、堀・大溝は任意の土層ベルトを適宜残して掘り下げた。1号塙跡については、ベルト部分で埋土断面を確認した後、主に重機を用いて壁際まで掘削した。

＜実測＞ 調査区に傾斜面が多かったことから、平面測量には通常の簡易造り方測量の他に、光波トランシットによる測量を併用した。実測は主に4～6名の作業員が専従し、随時調査員が点検した。

＜記録＞ 造構埋土の記録にあたっては、「標準上色帳」に準じて土色を判別し、粘性・縮まりなどの性状、バミス・炭化物などの混入物について、肉眼観察によって記録した。粘性・しまりについては、概ね「強・やや強・中・やや弱・弱・なし」の段階に区分し、混入物は混入の様相や全体に対するおまかなか割合等を記録した。

＜写真撮影＞ 個々の造構の写真撮影は調査員が担当し、主に35mm判カメラ2台（モノクロ、カラーリバーサル）を用い、補助的にデジタルカメラ1台（400万画素）を使用した。また必要に応じて、適宜、中判カメラ1台（モノクロ）を加えて使用した。また調査終盤には、ラジコンヘリを用いて、調査区および遺跡全体の航空写真撮影を地形測量と併せて行った。

＜縄張り図の作成＞ 調査開始当初、調査員が調査区および周辺を踏査して概略図を作成した。その後、盛岡市教育委員会・室野秀文氏に現地指導を依頼して、再度の踏査と縄張りの確認を行い、縄張り図の作図を室野氏に依頼した（第69図）。

＜その他＞ 調査成果については、調査終盤の8月20日に現地説明会を開催して広く公開した（参加者44名）。また、二戸地方振興局発行の広報に調査状況の情報を提供した。

3. 室内整理の経過と方法

図面の点検・合成・遺物の洗浄・写真的整理は原則として野外調査と並行して行った。

① 遺物の処理

遺物は水洗後に全出土遺物を点検し、実測や拓本の必要なものを選択した後、造構内外にわけて登録し、註記、接合、復元の順に進めた。その後、実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。

② 造構図面

造構図面は平面図・断面図の照合、土層註記、レベル等の確認後に第二原図を作成し、その後トレース・造構図版組の順に作業を進めた。

4. 掲載の方法

① 遺構図の用例

(ア) 遺構実測図は原則として次の縮尺で掲載している。

堅穴住居跡・堅穴建物跡・堅穴状遺構・掘立柱建物跡：平面・断面 1/60

古代堅穴住居跡カマド：断面 1/30 上坑・陥し穴状遺構：平面・断面 1/40

墓坑・炉跡：平面・断面 1/30 柱穴状小ピット群：平面 1/150

平坦地（曲輪）：平面 1/300・断面 1/100 堀・大溝：平面 1/100・1/300・1/60・断面 1/60

*但し、遺構規模の関係上これに合わない図面もあるため、その都度スケールおよび縮尺を付した。

(イ) 推定線は原則として破線で表現した。これに沿わない場合は挿図中に示した。

(ウ) 土器の観察にあたっては、農林水産省農林水産技術会議事務所監修「新版標準土色帖」を使用した。

(エ) 図面中の土器は「P」、礫は「S」の略号で表記した。

(オ) 挿図中で使用したスクリーントーンの用例は下図のとおりである。それ以外のものについてはその都度挿図中に記した。

② 遺物実測図の用例

(ア) 鉄製品は 1/2、古銭は原寸、他の土器・陶磁器類、石器、石製品については 1/3 縮尺で掲載した。なお、同一図版上に異なる縮尺の遺物が混在する場合は、その都度スケールおよび縮尺を付した。

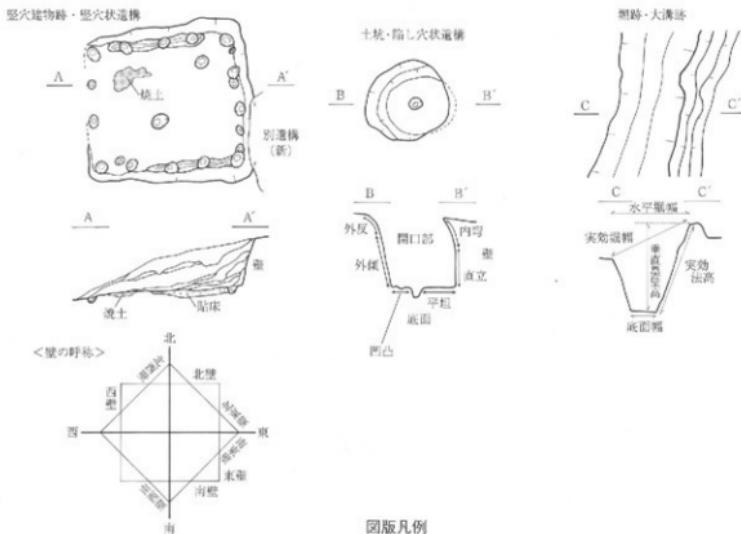
(イ) 土器の実測にあたり、口縁部もしくは底部が 1/5 以上残存する場合は努めて図上復元を試みた。

(ウ) 本文および遺物観察表の数値に冠した()は推定値を、△は残存値を示している。

③ 国土地理院発行の地形図を複製したものには、図中に国幅名と縮尺を記した。

④ 引用・参考文献は各章末に記した。

(千葉正彦)



IV. 検出遺構と出土遺物

発掘調査では縄文時代、古代、中世、時期不明の4時期の遺構・遺物が確認された。この4時期は出土遺物がきわめて少數であったため、所属時期を遺構の形態、および基本層序に認められる数種のテフラ混入物などから判断している。また、単独で検出され、時期が明確でない遺構や、後世の破壊により遺存状況が悪く、特定時期を判断できなかった遺構も存在する。各時期の遺構の種別と数量は以下の通りである。

縄文時代：炉跡1基、土坑42基（内、28基は円筒形陥し穴状遺構の可能性有り）、陥し穴状遺構23基
古代：豎穴住居跡3棟、焼土遺構1基
中世：世：《普請》平坦地6箇所（内、帶曲輪1）、切岸状遺構2箇所、空堀跡3条、大溝跡2条、土塁1箇所、門跡？1箇所
《作事》掘立柱建物跡1棟、豎穴建物跡9棟、豎穴状遺構7棟、柱穴状小ピット群595個、時期不明：墓坑（歯骨）1基
以下、時期毎に検出した遺構と遺物について述べる。

1. 縄文時代の検出遺構

縄文時代の遺構は、炉跡1基、土坑42基、溝状陥し穴状遺構23基が見つかった。このうち土坑とした42基については平面形が楕円形～円形基調のものが殆どであるが、底面中央部に小穴を持つもの、あるいは配置が一定の間隔を持って連続するものは円筒形の陥し穴状遺構である可能性が想定された。しかしながら平面形、断面形状、堆積物、底面の状況、配置のみを持って判断するには、中間的な様相のものが少なからず存在する事から、便宜上、円筒形の陥し穴状遺構の可能性が高いものであっても土坑に含めて報告することとし、第VI章（2）、および土坑計測値一覧で個々にその可能性について指摘するに留めた。また、これらの埋土中にはTo-Nk, To-Cu の可能性のある白色・橙色バミスが疎らに混入するものがあるが、テフラ年代からみて二次堆積したものと判断している。炉跡については縄文時代と考えられるものを1基掲載している。

1号炉跡（第5図、写真図版2）

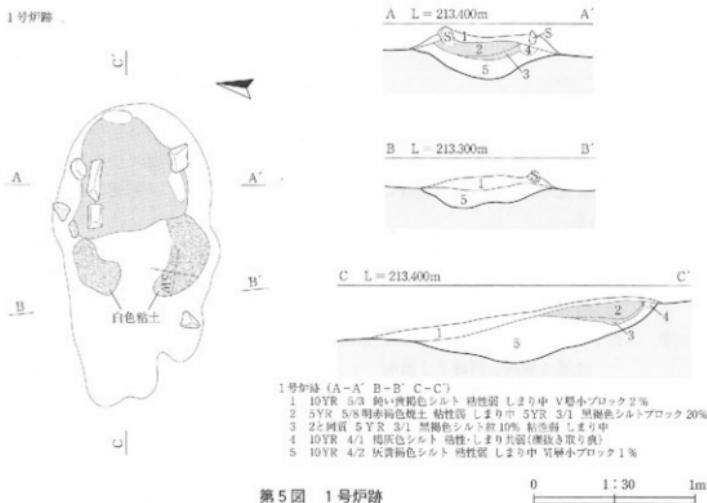
調査区西側下方、5Wグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。全体としては97×183cmの不整形円形の範囲に焼上細粒を含んだ鈍い黄褐色シルトが広がるものである。東半部において65～70cmの現地性焼土、周辺に不整な小礫・抜き取り痕が認められる。中央部では48×83cmの範囲に白色の粘土が確認されている。炉の構造は、平面形から複式炉に類するものとみられるが、明確な掘り込み部などが伴わず詳細は不明である。焼土は最も厚く形成されている部分で8.5cmを測る。

遺物（第56図、写真図版38）

埋土上位から浅鉢片と深鉢片各1点が出土しており（1・2）、いずれも晩期（大洞B C式期）に比定される特徴を有する。本遺構の時期は、出土遺物から判断して縄文時代晩期に相当するとみられる。

1号土坑（第6図、写真図版2）

1. 繩文時代の検出遺構



第5図 1号炉跡

〔位置・検出状況〕調査区南西側、5 Q グリッドに位置する。検出面はVI層である。

〔規模・形状〕開口部径 62 × 158cm、底部径 50 × 144cm の隅丸長方形を呈する。断面形はビーカー状で、壁は底面から直立して立ち上がる。深さは最深部で22cmを測る。

〔埋土〕V・VI層ブロックを含む灰黄褐色砂質シルトの混合土である。粒状～板状の炭化物が全体に10%程度混入する。人為堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

2号土坑（第6図、写真図版2）

〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、7 S グリッドに位置する。検出面はV層下位～VI層である。

〔規模・形状〕開口部径 80 × 138cm、底部径 56 × 120cm の楕円形を呈する。断面形はU字状で、壁は底面からやや外傾しながら直立気味に立ち上がる。深さは最深部で32cmを測る。

〔埋土〕5層からなり、黒色・明黄褐色シルト主体で構成される。第1層に白色バミス、第4層に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

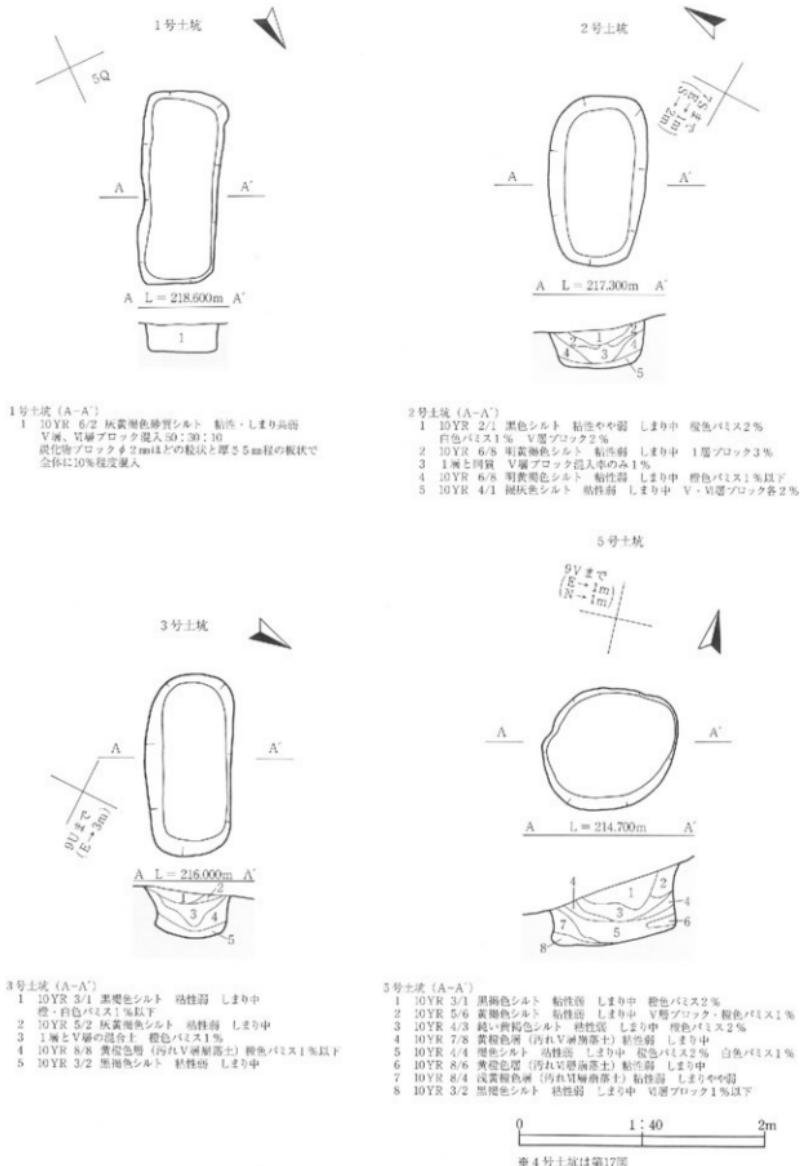
3号土坑（第6図、写真図版3）

〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、9 T グリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕開口部径 70 × 146cm、底部径 49 × 129cm の楕円形を呈する。断面形はU字状で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。深さは最深部で36cmを測る。

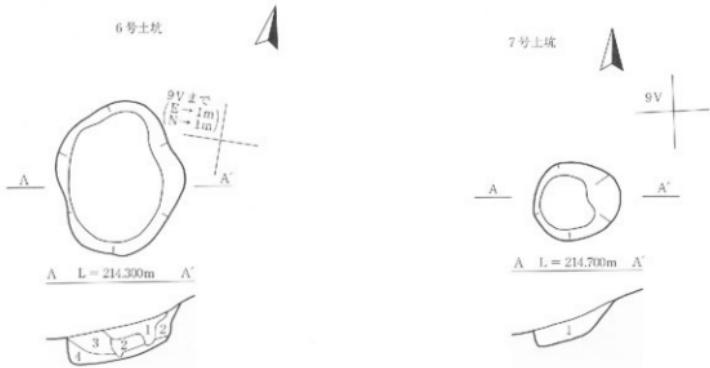
〔埋土〕5層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。第1層に白色バミス、第3・4層に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。



第6図 1~3・5号土坑

1. 純文時代の検出遺構

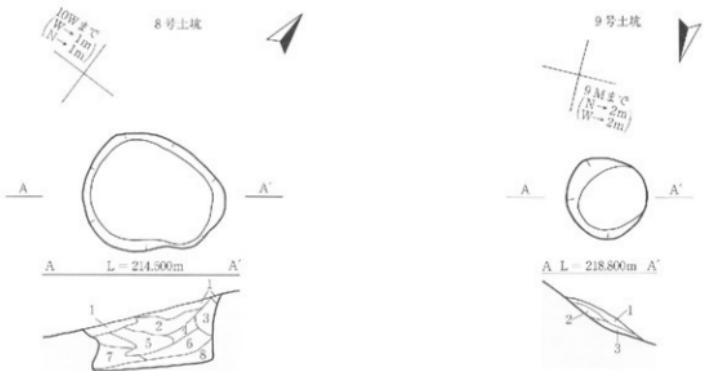


6号土坑 (A-A')

- 1 10YR 4/2 黄褐色シルト 粘性弱 しまりやや弱
- 2 10YR 3/2 黄褐色シルト 粘性弱 しまりやや弱
- 3 10YR 4/3 黄褐色シルト 粘性弱 しまりやや弱
- 4 10YR 3/2 黑褐色シルト 粘性弱 しまり中 黏膜ブロック1%以下

7号土坑 (A-A')

- 1 10YR 6/6 黄褐色シルト 粘性中 しまり強
- 2 10YR 2/3 黑褐色シルトブロック5%



8号土坑 (A-A')

- 1 10YR 4/2 黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 棕色バース1%以下
- 2 10YR 4/3 黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 棕色バース2%
- 3 10YR 4/3 黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 棕色バース1%以下
- 4 10YR 6/8 明黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 V・質硬1%
- 5 白色バース各1%以下
- 6 10YR 3/3 黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 V・質硬ブロック 棕色バース1%
- 7 10YR 7/8 食餌色層 (内孔引削面土) 粘性弱 しまり中
- 8 10YR 2/2 黑褐色シルト 粘性弱 しまり中 棕色バース1%以下

9号土坑 (A-A')

- 1 10YR 2/2 黑褐色シルト 粘性中 じまり弱 棕色バース3%
- 2 10YR 5/6 黄褐色シルトと2/2黒褐色シルトの混土7:3
粘性中 じまり弱 棕色バース3%
- 3 2層と同質 混合比3:7 粘性中 じまり弱 棕色バース3%

0 1:40 2m

第7図 6~9号土坑

4号土坑（第17図、写真図版13）

【位置・検出状況】調査区中央部西寄り、9 Tグリッドに位置する。検出面はV層である。5号陥し穴状構造と重複し、これにより切られる。

【規模・形状】開口部径 48×86cm、底部径 42×79cmの隅丸長方形を呈する。断面形はピーカー状で、残存する壁は底面から直立して立ち上がる。深さは最深部で10cmを測る。

【埋土】2層からなり、明褐色～黒褐色シルト主体で構成される。上位に橙色バミスが疎らに混入する。
【出土遺物・時期】出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

5号土坑（第6図、写真図版3）

【位置・検出状況】調査区西側、8 Vグリッドに位置する。検出面はV層である。

【規模・形状】開口部径 100×118cm、底部径 85×107cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。深さは最深部で51cmを測る。

【埋土】8層からなり、黒褐色～黄褐色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色バミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物・時期】出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

6号土坑（第7図、写真図版3）

【位置・検出状況】調査区西側、8 Vグリッドに位置する。検出面はV層である。

【規模・形状】開口部径 104×126cm、底部径 74×105cmの不整梢円形を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。深さは最深部で26cmを測る。

【埋土】4層からなり、灰黃褐色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物・時期】出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

7号土坑（第7図、写真図版3）

【位置・検出状況】調査区西側、8 Vグリッドに位置する。検出面はV層である。

【規模・形状】開口部径 64×70cm、底部径 38×43cmの円形を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で16cmを測る。

【埋土】黒褐色シルトブロックを少量含む明黄褐色シルトの單層である。

【出土遺物・時期】出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

8号土坑（第7図、写真図版3）

【位置・検出状況】調査区西側、9 Vグリッドに位置する。検出面はV層である。

【規模・形状】開口部径 94×115cm、底部径 81×99cmの不整円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。南西側は崩落の為、やや外傾する。深さは最深部で50cmを測る。

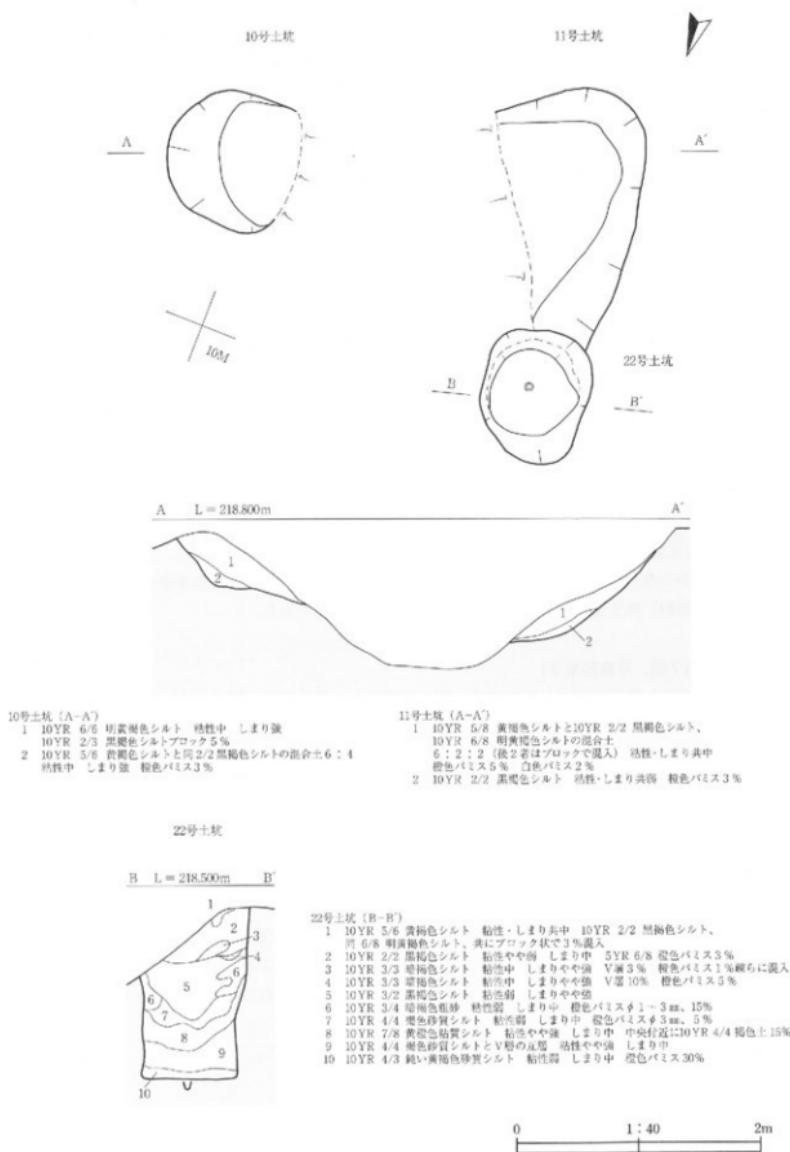
【埋土】8層からなり、灰黃褐色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物・時期】出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

9号土坑（第7図、写真図版4）

【位置・検出状況】調査区中央部南寄り、8 Lグリッドに位置する。検出面はV層である。

1. 絶文時代の検出遺構



第8図 10・11・22号土坑

〔規模・形状〕開口部径 66 × 66cm、底部径 48 × 56cm の円形を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。深さは最深部で12cmを測る。

〔埋土〕3層からなり、上位は黒褐色シルト、下位は黄褐色・黒褐色シルトの混合土主体で構成される。全体的に橙色バミスを疎らに含む。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

10号土坑（第8図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、9Lグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕開口部径 10.7 × 11cm、底部径 6.6 × 9.8cm の円形基調である。断面形は皿状で、壁は東側において外傾しながら立ち上がる。西側は3号堀跡に切られ消失している。深さは最深部で42cmを測る。

〔埋土〕2層からなり、黄褐色～明黄褐色シルト主体で構成される。人為堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

11号土坑（第8図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、9Mグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕開口部径 11.6 × 20.6cm、底部径 9.0 × 14.8cm の楕円形基調を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から丸みをもって緩やかに立ち上がる。深さは最深部で24cmを測る。

〔埋土〕2層からなり、黄褐色シルトと黒褐色シルト、明黄褐色シルトの混合土主体で構成される。人為堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

12号土坑（第9図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕調査区中央部、13Nグリッドに位置する。検出面はⅣ層である。

〔規模・形状〕開口部径 176 × 232cm、底部径 98 × 148cm の楕円形を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で26cmを測る。

〔埋土〕5層からなり、炭化物粒を少量含む黒褐色シルト主体で構成される。第2層に異地性の焼土が堆積する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

13号土坑（第9図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕調査区南東側、13Hグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位である。

〔規模・形状〕開口部径 28cm、底部径 70cm の円形を呈する。断面形はフラスコ状で、壁は底面からオーバーハングしながら立ち上がる。深さは最深部で48cmを測る。

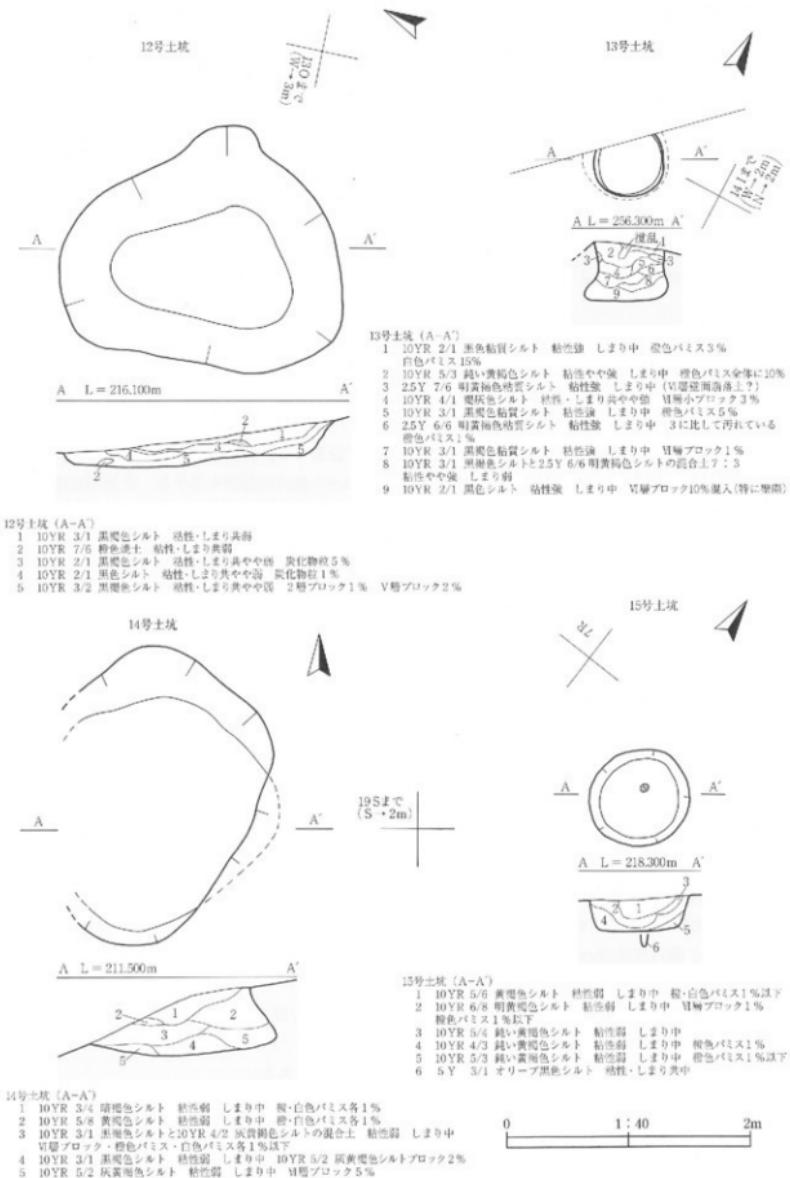
〔埋土〕9層からなり、黒色～黒褐色、鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色バミス、中位に橙色バミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

14号土坑（第9図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕調査区中央部北東寄り、19Iグリッドに位置する。検出面はⅣ層下～V層である。

1. 繁文時代の検出遺構



第9図 12~15号土坑

〔規模・形状〕開口部径 168 × 242cm、底部径 176 × 186cm の円形基調を呈する。断面形はフラスコ～皿状で、東壁のみ底面からオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で50cmを測る。

〔埋土〕5層からなり、暗褐色～黒褐色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色バミスを疎らに含む。人為堆積と考えられる。

遺物（第56図、写真図版38）

底面から縄文土器の深鉢が入れ子状に潰れた状態で2点出土している（3・4）。時期は土器から判断して晩期（大洞B C式期）に相当するものと推測される。

15号土坑（第9図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕調査区南西側、6 Qグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕開口部径 78 × 82cm、底部径 64 × 69cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立気味に立ち上がる。深さは最深部で26cmを測る。底面中央に径8cm、深さ12cmの副穴を持つ。

〔埋土〕6層からなり、黄褐色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色バミス、中～下位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。6層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

16号土坑（第10図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕調査区南西側、7 Pグリッドに位置する。検出面はVI層である。

〔規模・形状〕開口部径 82 × 88cm、底部径 72 × 74cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がる。深さは最深部で46cmを測る。底面中央に径7cm、深さ10cmの副穴を持つ。

〔埋土〕11層からなり、褐色～明黄褐色シルト主体で構成される。全体に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。11層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

17号土坑（第10図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕調査区南西側、8 Oグリッドに位置する。検出面はV層下位～VI層である。

〔規模・形状〕開口部径 72 × 86cm、底部径 62 × 66cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がる。深さは最深部で84cmを測る。

〔埋土〕8層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

18号土坑（第10図、写真図版6）

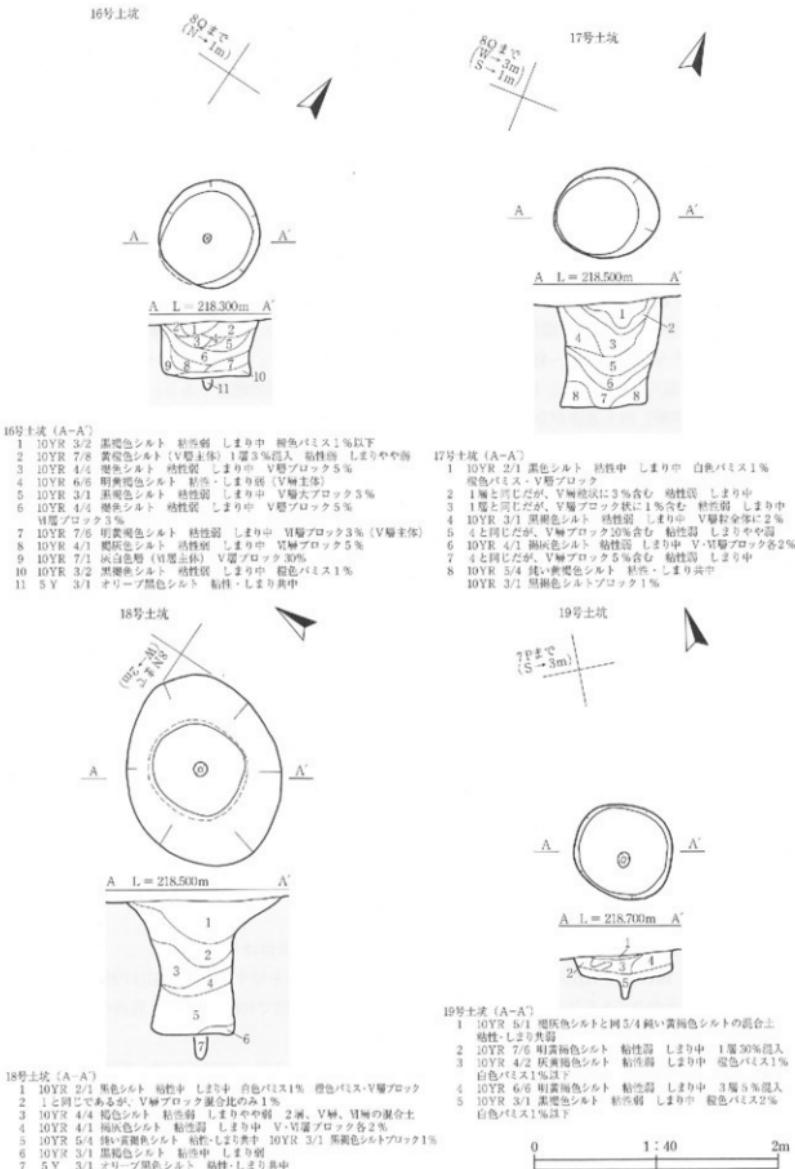
〔位置・検出状況〕調査区南西側、8 Oグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕開口部径 126 × 156cm、底部径 80 × 82cm の楕円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がり、上半に至って大きく外傾する。深さは最深部で108cmを測る。底面中央に径12cm、深さ20cmの副穴を持つ。

〔埋土〕7層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上位～中位に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。7層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

1. 繁文時代の検出遺構



第10図 16～19号土坑

19号土坑（第10図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕 調査区南西側、70グリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 76 × 80cm、底部径 68 × 72cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がる。深さは最深部で20cmを測る。底面中央に径10cm、深さ15cmの副穴を持つ。

〔埋土〕 5層からなり、明黄褐色～灰黄褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

20号土坑（第11図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部南寄り、8Nグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 80 × 94cm、底部径 60cmの楕円形を呈する。断面形は円筒状である。壁は直立して立ち上がり、南壁のみ上部で外反する。深さは最深部で106cmを測る。

〔埋土〕 6層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

21号土坑（第11図、写真図版7）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部南寄り、8Nグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕 開口部径 120 × 124cm、底部径 64 × 72cmの円形を呈する。断面形は逆台形状で、壁は外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で112cmを測る。

〔埋土〕 4層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色バミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

22号土坑（第8図、写真図版7）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部南寄り、9Mグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕 開口部径 88 × 108cm、底部径 75 × 78cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がる。深さは最深部で137cmを測る。底面中央に径7cm、深さ8cmの副穴を持つ。

〔埋土〕 10層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。全体に橙色バミスが混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

23号土坑（第11図、写真図版7）

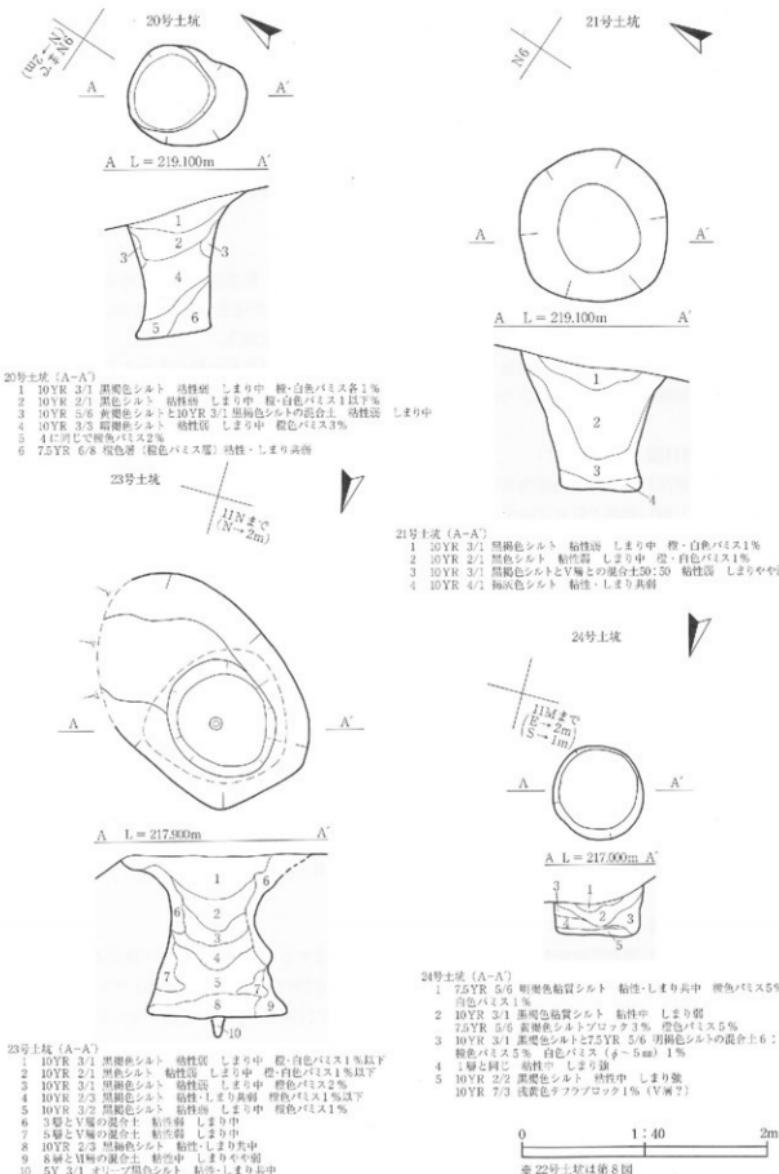
〔位置・検出状況〕 調査区中央部南寄り、10Nグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕 開口部径 141 × 200cm、底部径 106 × 114cmの円形を呈する。断面形はフラスコ状で、壁は底面からオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で129cmを測る。底面中央に径10cm、深さ18cmの副穴を持つ。

〔埋土〕 10層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上位に白色バミス、中位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。10層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

1. 繩文時代の検出遺構



第11図 20・21・23・24号土坑

24号土坑（第11図、写真図版7）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部南寄り、11Mグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕 開口部径 73×76cm、底部径 64cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がる。深さは最深部で33cmを測る。

〔埋土〕 5層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。中位～上位に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

25号土坑（第12図、写真図版8）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部南寄り、11Mグリッドに位置する。検出面はVI層である。

〔規模・形状〕 開口部径 90×109cm、底部径 72×81cmの円形を呈する。断面形はフラスコ状で、壁は弱くオーバーハングしながら立ち上がる。深さは最深部で103cmを測る。底面中央に径12cm、深さ14cmの副穴を持つ。

〔埋土〕 6層からなり、黒褐～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色バミス、中位～下位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。6層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

26号土坑（第12図、写真図版8）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、11Pグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位である。

〔規模・形状〕 開口部径 90×92cm、底部径 69×71cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は下半部で一旦崩く内傾したのち、やや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で107cmを測る。

〔埋土〕 9層からなり、黒色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位～中位に白色・橙色バミス、下位に白色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

27号土坑（第12図、写真図版8）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、11Pグリッドに位置する。検出面はIV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 98×106cm、底部径 64×69cmの楕円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がる。深さは最深部で102cmを測る。

〔埋土〕 7層からなり、黒色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色バミス、中～下位に橙色バミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

28号土坑（第12図、写真図版8）

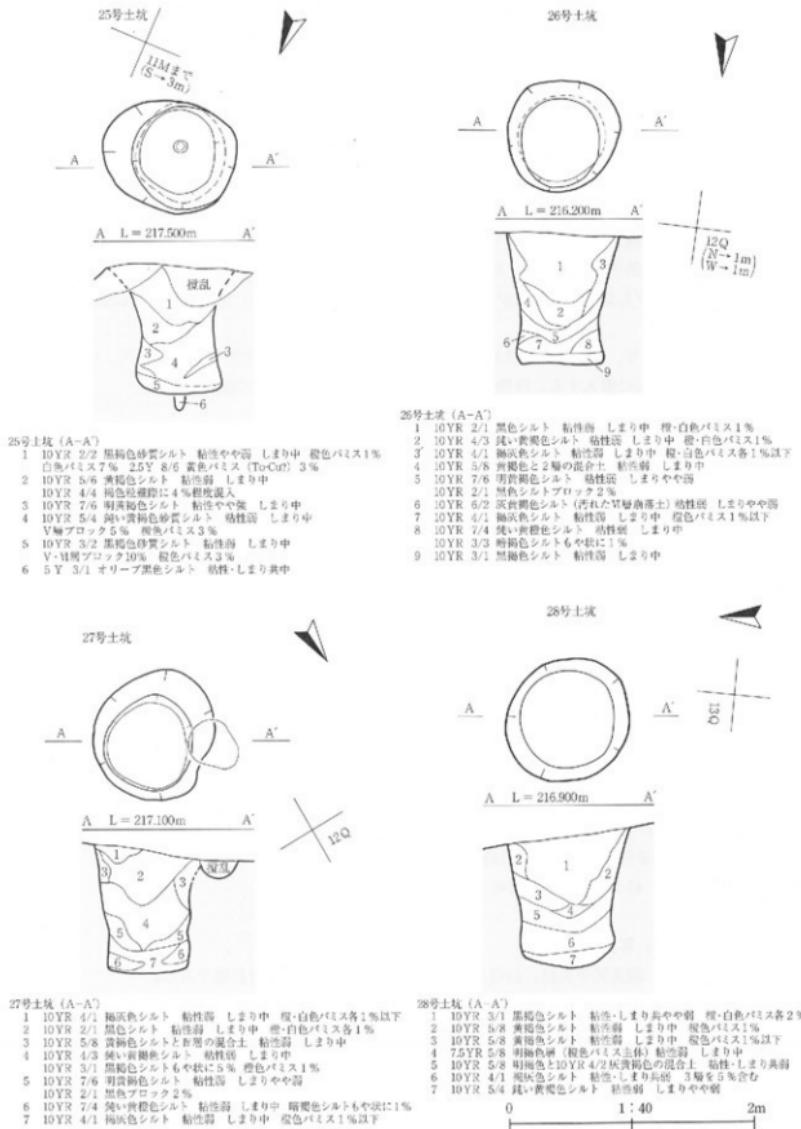
〔位置・検出状況〕 調査区中央部、13Oグリッドに位置する。検出面はIV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 97×106cm、底部径 79cmの円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は底面からやや丸みを持って立ち上がる。深さは最深部で106cmを測る。

〔埋土〕 7層からなり、黒褐～褐灰色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色バミスが疎らに混入する。第4層は橙色バミスの純層である。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

1. 繩文時代の検出遺構



第12図 25~28号土坑

29号土坑（第13図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、13Oグリッドに位置する。検出面はIV層である。東側で中世の柱穴と重複し、これにより切られる。

〔規模・形状〕 開口部径 112 × 117cm、底部径 80 × 88cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はやや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で79cmを測る。

〔埋土〕 6層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色バミス、最下位に橙色バミスが疎らに堆積する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

30号土坑（第13図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、13Pグリッドに位置する。検出面はIV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 91 × 93cm、底部径 66 × 67cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立しながら立ち上がる。深さは最深部で87cmを測る。

〔埋土〕 4層からなり、黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色バミス、中～下位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

31号土坑（第13図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 調査区北西側、13Sグリッドに位置する。検出面はIV層である。中央部で中世の柱穴と重複し、これにより切られる。

〔規模・形状〕 開口部径 90 × 97cm、底部径 72 × 78cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がる。深さは最深部で78cmを測る。

〔埋土〕 6層からなり、黒色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色バミス、最下位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

32号土坑（第13図、写真図版9）

〔位置・検出状況〕 調査区南東側、14H～Iグリッドに位置する。検出面はIV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 75 × 78cm、底部径 68 × 72cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立しながら立ち上がる。深さは最深部で73cmを測る。

〔埋土〕 14層からなり、黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

33号土坑（第14図、写真図版10）

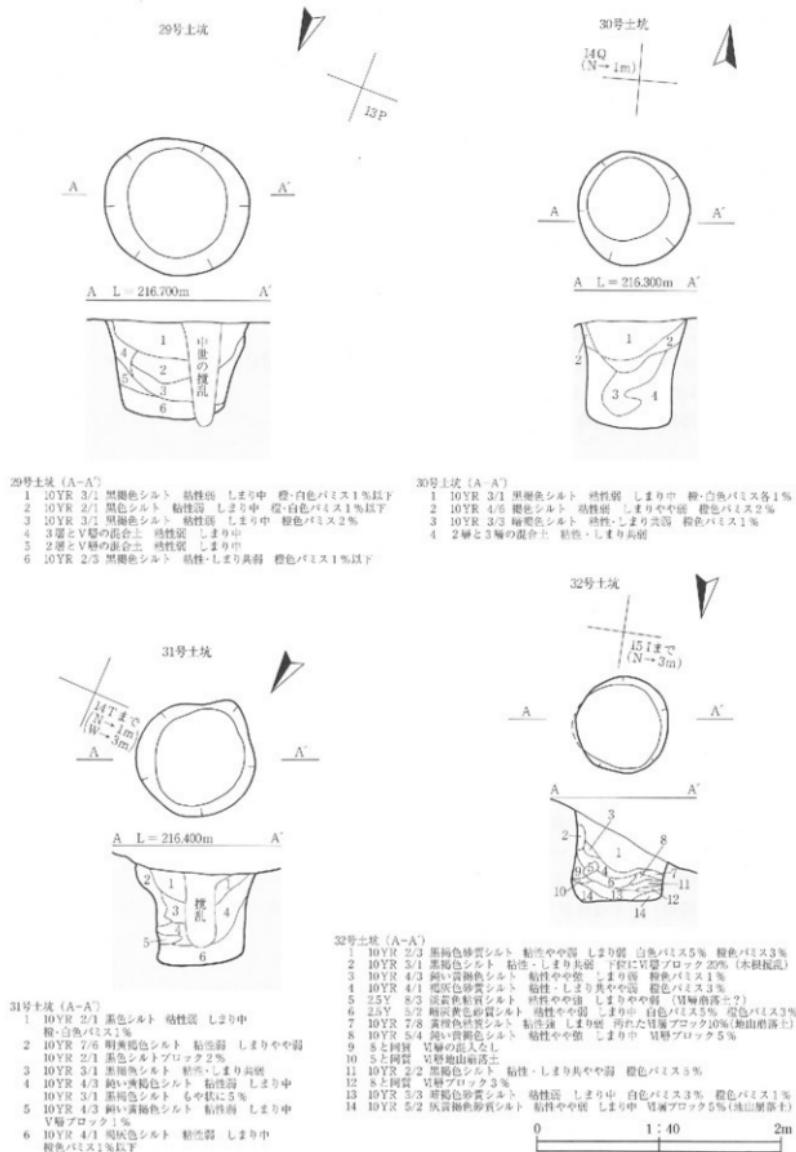
〔位置・検出状況〕 調査区南東側、15Iグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 116 × 133cm、底部径 114 × 116cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はやや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で88cmを測る。

〔埋土〕 11層からなり、黒褐～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上～中位に白色・橙色バミス、最下位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

1. 繩文時代の検出遺構



第13図 29~32号土坑

34号土坑（第14図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕 調査区南東側、16Gグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 $112 \times 120\text{cm}$ 、底部径 $66 \times 70\text{cm}$ の円形を呈する。断面形は逆台形状で、壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。深さは最深部で 114cm を測る。底面中央に径 8 cm 、深さ 12cm の副穴を持つ。

〔埋土〕 9層からなり、黒褐～灰黄褐色シルト主体で構成される。上位に白色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。9層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

35号土坑（第14図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕 調査区東側、17Gグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 $100 \times 107\text{cm}$ 、底部径 $72 \times 73\text{cm}$ の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がるが、東壁面に崩落による凹凸が見られる。深さは最深部で 118cm を測る。底面中央に径 10cm 、深さ 13cm の副穴を持つ。

〔埋土〕 7層からなり、黒色～黒褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。7層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

36号土坑（第21図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕 調査区東側、16Hグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。中央部で21号陥し穴状遺構と重複し、これにより切られる。

〔規模・形状〕 開口部径 $101 \times 123\text{cm}$ 、底部径 $80 \times 81\text{cm}$ の円形基調を呈する。断面形はフラスコ状で、壁は下半部で一旦弱く内傾し、その後外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で 100cm を測る。底面中央に径 16cm 、深さ 23cm の副穴を持つ。

〔埋土〕 9～16層の8層からなり、黒褐～黄褐色シルト主体で構成される。白色・橙色バミスを全体に疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。16層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

37号土坑（第22図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕 調査区東側、17F～Gグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。北側で22号陥し穴状遺構と重複し、これにより切られる。

〔規模・形状〕 開口部径 $114 \times 132\text{cm}$ 、底部径 $78 \times 80\text{cm}$ の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は下半部においては直立しながら立ち上がり上半部に至って外傾する。深さは最深部で 158cm を測る。

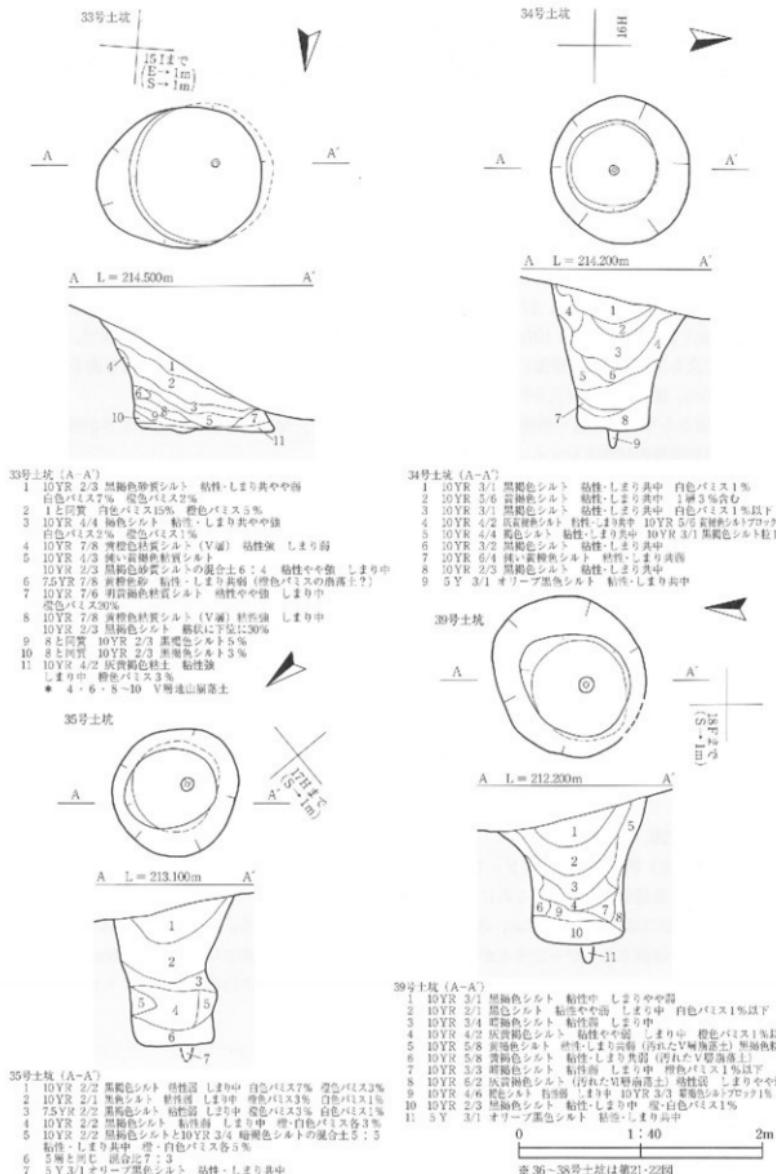
〔埋土〕 17層からなり、黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

38号土坑（第22図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕 調査区東側、18Gグリッドに位置する。検出面はIV層下～V層である。中央部で22号陥し穴状遺構とほぼ外形を同じくして重複し、これにより切られる。この為、埋土断面の記録を

1. 繩文時代の検出遺構



第14図 33～35・39号土坑

欠く。

〔規模・形状〕 開口部径 42cm、底部径 54 × 62cm の円形を呈する。断面形はラスコ状で、壁はやや

内傾しながら立ち上がる。深さは最深部で 95cm を測る。底面中央に径 7cm、深さ 14cm の副穴を持つ。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

39号土坑（第14図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕 調査区東側、18E グリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 119 × 135cm、底部径 76 × 85cm の円形を呈する。断面形はほぼ円筒状で、壁は

直立して立ち上がり、上位に至って外傾する。深さは最深部で 116cm を測る。底面中央に径 12cm、

深さ 15cm の副穴を持つ。

〔埋土〕 11 層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。11 層は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

40号土坑（第15図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕 調査区東側、18F グリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 100 × 102cm、底部径 74 × 80cm の円形を呈する。断面形はほぼ円筒状で、壁は下半部で一旦弱く内傾し、その後やや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で 113cm を測る。

〔埋土〕 6 層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。全体に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

41号土坑（第15図、写真図版12）

〔位置・検出状況〕 調査区東側、18F グリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 95 × 99cm、底部径 55 × 57cm の円形を呈する。断面形は逆台形状で、壁はやや外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で 105cm を測る。底面中央に径 12cm、深さ 14cm の副穴を持つ。

〔埋土〕 8 層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色バミス、中～下位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。8 层は副穴埋土である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

42号土坑（第15図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部北東寄り、19J グリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 108 × 121cm、底部径 67 × 81cm の楕円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がる。深さは最深部で 116cm を測る。降雨による影響で遺構断面が崩落し、埋土の記録を欠く。

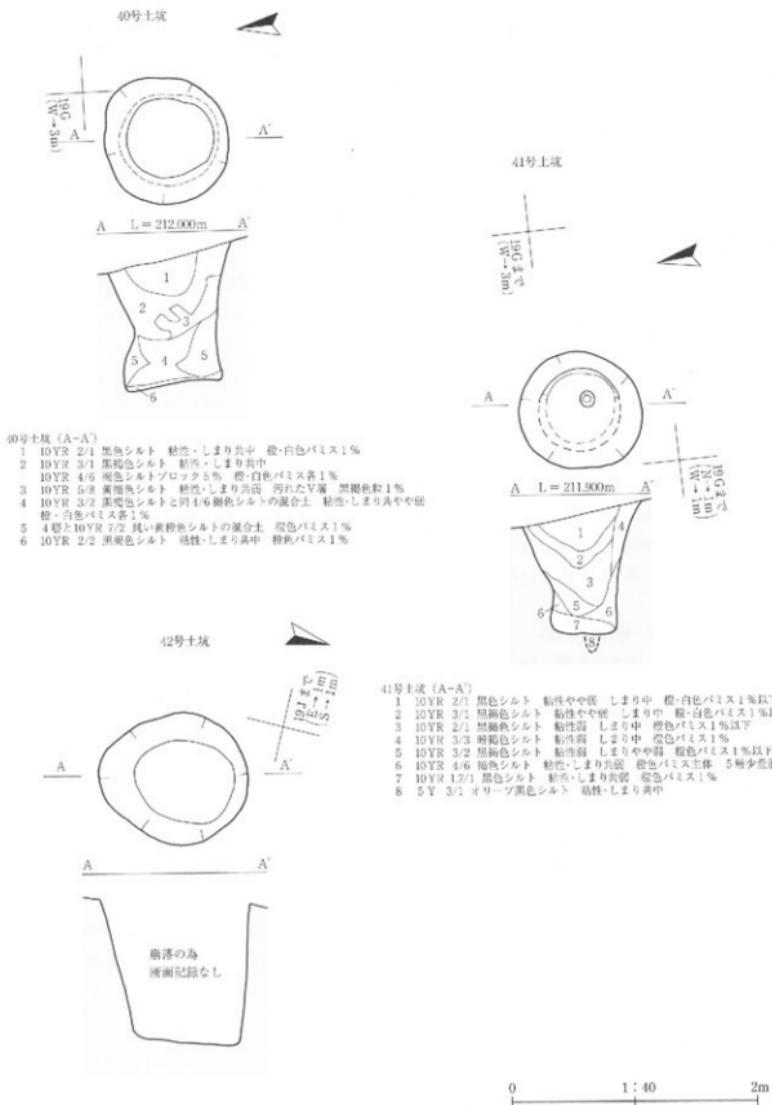
〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

1号陥し穴状遺構（第16図、写真図版12）

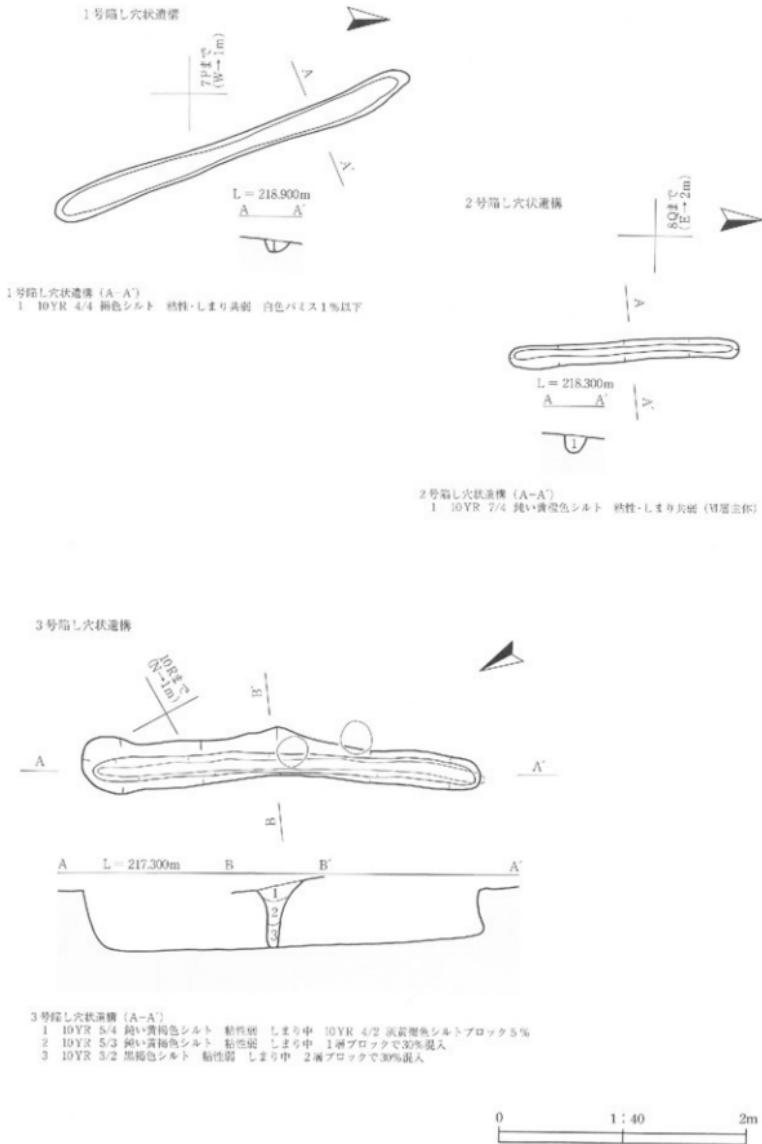
〔位置・検出状況〕 調査区南側、6～7O グリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 22 × 30.5cm、底部径 16 × 28.9cm、深さ 10cm を測る。平面形は溝形を呈し、長

1. 織文時代の検出遺物

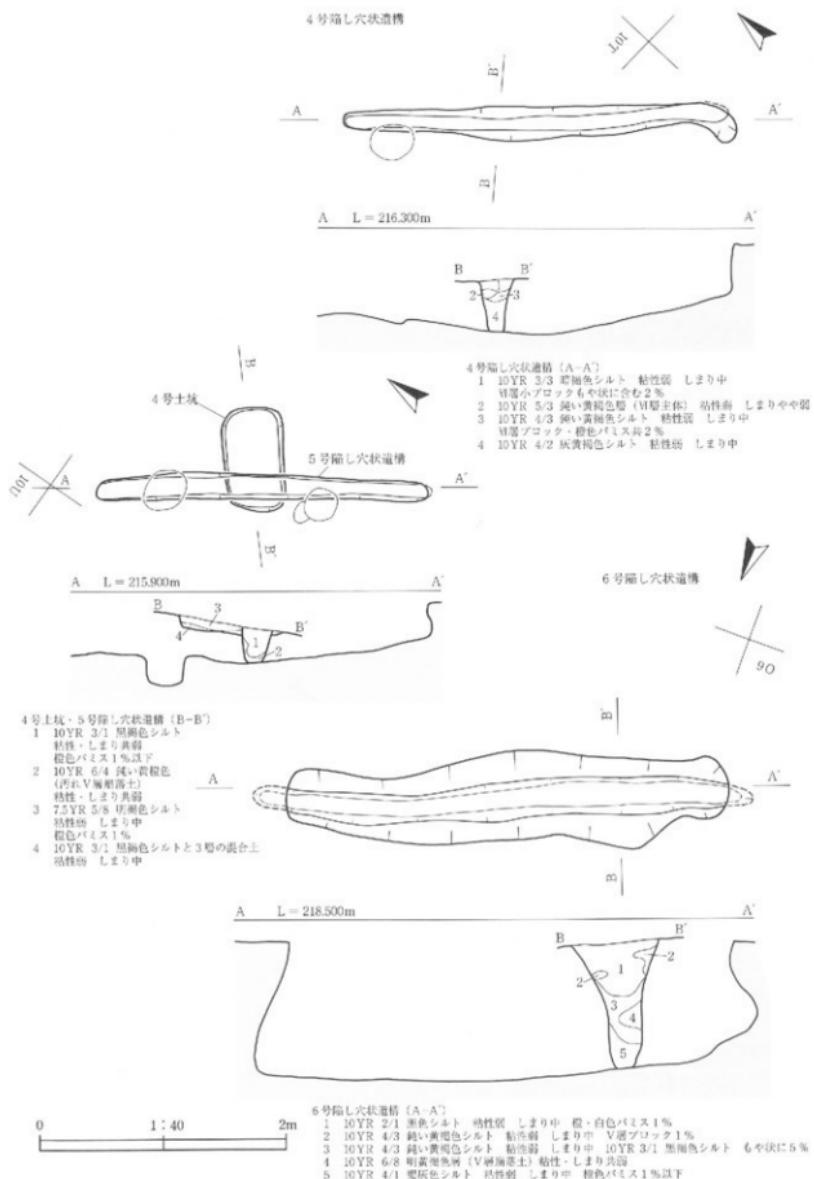


第15図 40~42号土坑



第16図 1~3号縫し穴状遺構

1. 繩文時代の検出遺構



第17図 4号土坑・4～6号縫し穴状遺構

軸方向はN-22°-Wである。削平により殆ど底面の痕跡をとどめる程度で、壁の立ち上がりなど詳細は不明である。

〔埋土〕白色バミスを疎らに含む褐色シルトの单層である。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

2号陥し穴状遺構（第16図、写真図版12）

〔位置・検出状況〕調査区南西側、7~8 Qグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕開口部径16×18.5cm、底部径6×17.5cm・深さ15cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-2°-Wである。削平により殆ど底面の痕跡をとどめる程度で、壁の立ち上がりなど詳細は不明である。

〔埋土〕鈍い黄橙色シルトの单層である。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

3号陥し穴状遺構（第16図、写真図版12）

〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、9 Rグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕開口部径38×322cm、底部径8×312cm・深さ53cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-30°-Eである。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がり開口部に至って外傾するU字状である。長軸の壁は南側が内湾、北側が外傾して立ち上がる。底部は北側に低く傾斜気味であるが、ほぼ平坦である。

〔埋土〕3層からなる。鈍い黄褐～黒褐色シルト主体で構成され、上位に灰黄褐色シルトブロックが少量混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

4号陥し穴状遺構（第17図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕調査区中央部西寄り、9~10 Tグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕開口部径28×317cm、底部径9×308cm・深さ42cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-44°-Wである。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がるU字状である。長軸の壁は北側が削平により殆ど残存しないが、底部中央でやや低く窪んだ後、南側は直立して立ち上がる。

〔埋土〕4層からなる。黒褐～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。3層に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

5号陥し穴状遺構（第17図、写真図版13）

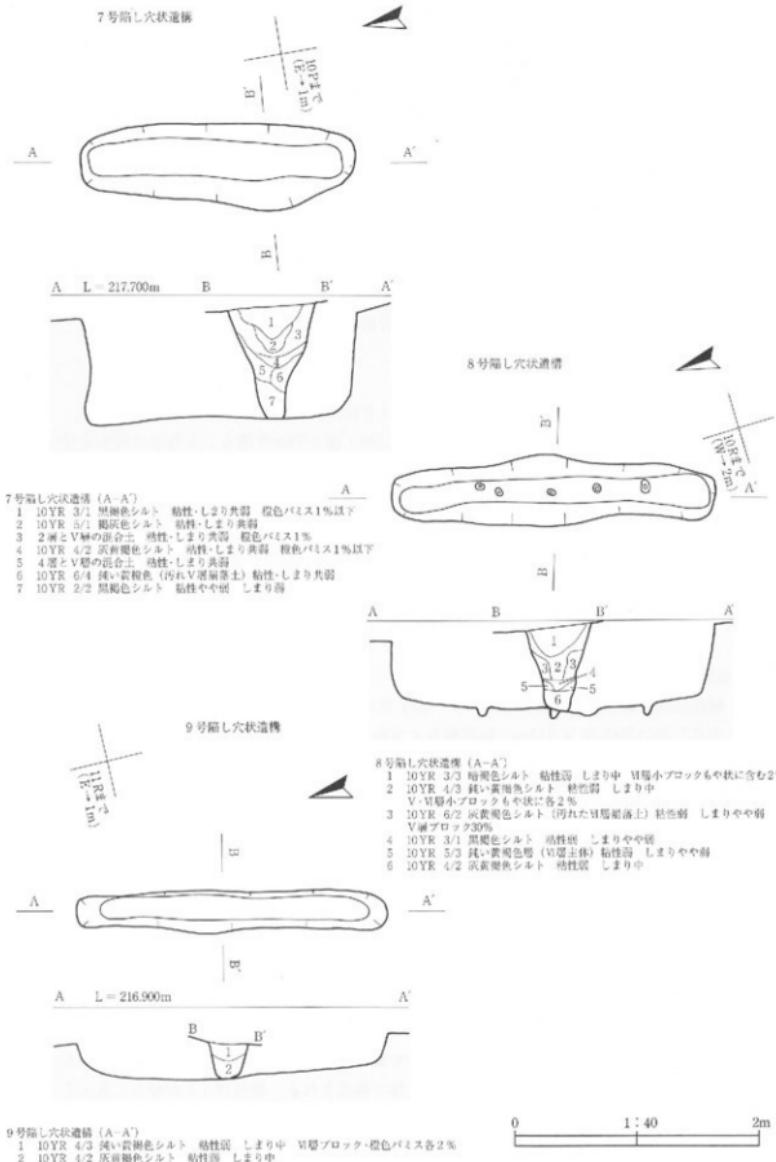
〔位置・検出状況〕調査区北西側、9 Tグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕開口部径22×266cm、底部径13×270cm・深さ28cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-35°-Wである。短軸の壁は底面から直線的に立ち上がるU字状である。長軸の壁は北側が削平により殆ど残存しないが、底部中央でやや低く窪んだ後、南側は内湾して立ち上がる。

〔埋土〕2層からなり、黒褐～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

1. 純文時代の検出遺構



第18図 7～9号陥し穴状遺構

6号陥し穴状遺構（第17図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部南寄り、9Nグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位～Ⅳ層である。

〔規模・形状〕 開口部径 73×355cm、底部径 18×401cm・深さ102cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-70°-Eである。短軸の壁は底部から外傾しながら立ち上がり開口部に至るY字状である。長軸の壁は東西共に内湾するフ拉斯コ形を呈し、底部はほぼ平坦である。

〔埋土〕 5層からなる。黒色～鈍い黄褐色シルト主体で構成され、上位に白色バミス、下位に橙色バミスが疊らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

7号陥し穴状遺構（第18図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、9～10Pグリッドに位置する。検出面はⅢ層下位～Ⅳ層である。

〔規模・形状〕 開口部径 70×225cm、底部径 29×206cm・深さ91cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-9°-Eである。短軸の壁は底部から外傾しながら立ち上がるV字状である。長軸の壁はほぼ直立して立ち上がるるもので、底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 7層からなる。黒褐色～灰黄褐色シルト主体で構成され、上位～中位に橙色バミスが疊らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

8号陥し穴状遺構（第18図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、10Qグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層である。

〔規模・形状〕 開口部径 58×265cm、底部径 20×253cm・深さ69cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-16°-Eである。短軸の壁は底面から外傾して立ち上がり開口部に至るV字状である。長軸の壁は南北共に直立して立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。底面から径8cm、深さ8～10cmほどの小穴が5基並列して検出されている。

〔埋土〕 6層からなる。暗褐色～鈍い黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

9号陥し穴状遺構（第18図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部西寄り、10Rグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。

〔規模・形状〕 開口部径 35×252cm、底部径 19×218cm・深さ27cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-14°-Eである。短軸の断面形は底面から外傾して立ち上がり開口部に至って外傾するU字状である。長軸の壁は南北共に外傾して立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 2層からなる。鈍い黄褐色～灰黄褐色シルト主体で構成され、上位に橙色バミスを僅かに含む。自然堆積の様相を呈する。

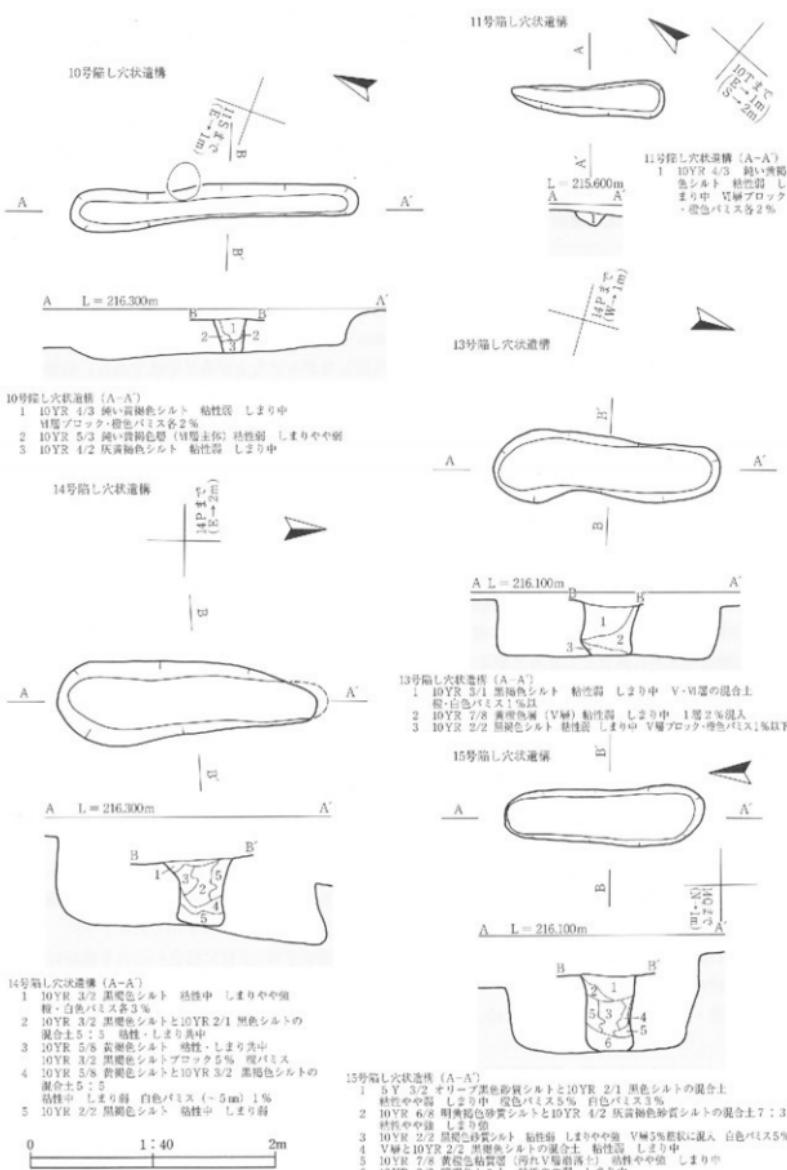
〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

10号陥し穴状遺構（第19図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部西寄り、10～11Sグリッドに位置する。検出面はⅤ層である。

〔規模・形状〕 開口部径 27×234cm、底部径 13×217cm・深さ27cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-23°-Wである。短軸の壁は底面から直立して立ち上がるU字状である。長軸の壁は北

1. 繩文時代の検出遺構



第19図 10・11・13～15号陥し穴状遺構

側が削平により殆ど残存しないが、南側は直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 3層からなる。鈍い黄褐色～灰黄褐色シルト主体で構成され、上位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

11号陥し穴状遺構（第19図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部西寄り、10Tグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 23 × 124cm、底部径 14 × 120cm・深さ10cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-38°-Wである。削平により殆ど底面の痕跡をとどめる程度で、壁の立ち上がりなど詳細は不明である。

〔埋土〕 橙色バミスを疎らに含む、鈍い黄褐色シルトの単層である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

12号陥し穴状遺構（写真図版15）

〔位置・検出状況〕 調査区北西側、10Uグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 11 × 120cm、深さ9cmを測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はN-23°-Wである。削平により殆ど底面の痕跡をとどめる程度で、壁の立ち上がりなど詳細は不明である。

〔埋土〕 橙色バミスを疎らに含む、鈍い黄褐色シルトの単層である。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

13号陥し穴状遺構（第19図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、13～14Uグリッドに位置する。検出面はIV層下～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 47 × 184cm、底部径 35 × 172cm・深さ41cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-14°-Eである。短軸の壁は底面から直立して立ち上がる開口部に至って外傾するU字状である。長軸の壁は南北共にはほぼ直立して立ち上がるるもので、底部はほぼ平坦である。

〔埋土〕 3層からなる。黒褐色～黄橙色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色バミス、下位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

14号陥し穴状遺構（第19図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕 調査区中央北寄り、13～14Pグリッドに位置する。検出面はIV層下～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 58 × 210cm、底部径 37 × 210cm・深さ52cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-1°-Wである。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がり開口部に至って外傾するY字状である。長軸の壁は北側が内溝するフラスコ形、南側が直立して立ち上がるもので、底面は北側に向かってやや低く傾斜する。

〔埋土〕 5層からなる。黒褐色シルト主体で構成され、上位～中位に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

15号陥し穴状遺構（第19図、写真図版15）

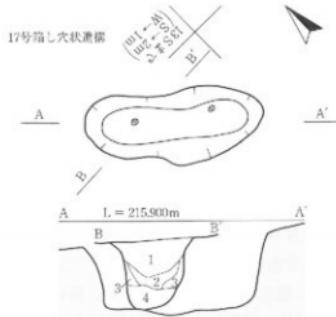
1. 縄文時代の検出遺構

16号陥し穴状遺構



16号陥し穴状遺構 (A-A')

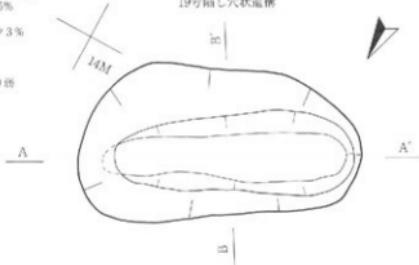
- 1 10YR 2/3 黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや強 濃色バニス1%
- 2 10YR 7/2 細い葉状魚鱗状1mm±3%
- 3 5Y 3/2 オリーブ色砂質シルト 粘性やや弱 しまり中
- 4 7.5YR 2/2 黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや強 V層ブロック3%
- 5 10YR 3/2 黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 V層ブロック15%
- 6 10YR 2/1 黒褐色質シルト 粘性・しまり共やや強
- 7 2.5YR 4/2 リード色砂質シルト 粘性・しまり共やや強
- 8 10YR 3/1 4/1 ブラウンシルト 粘性・しまり共やや強
- 9 5YR 7/6 明前褐色砂質シルト (V層) と
- 10 5YR 3/2 オリーブ色砂質シルトの混合土 粘性やや弱 しまり弱
- 11 10YR 3/2 黑褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中



17号陥し穴状遺構 (A-A')

- 1 10YR 3/1 黄褐色シルト 粘性・しまり共弱
- 2 1層とV層ブロックの混合土 粘性・しまり共弱
- 3 10YR 5/8 黄褐色シルト 粘性・しまり共弱 (汚れV層崩落土)
- 4 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性・しまり共弱 V・隣層ブロック1%

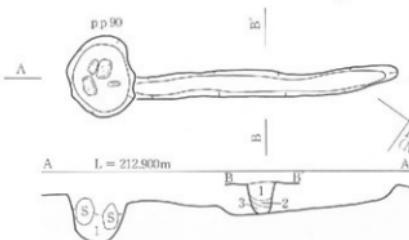
19号陥し穴状遺構



18号陥し穴状遺構 (A-A')

- 1 10YR 5/8 黄褐色シルト 粘性弱 しまり強
- 2 10YR 5/3 細い黄褐色シルトブロックと橙・白色バニス各1%
- 3 10YR 4/2 灰青褐色シルト 粘性弱 しまり強
- 4 10YR 6/4 細い黄褐色シルト 粘性弱 しまりやや強

18号陥し穴状遺構



19号陥し穴状遺構 (A-A')

- 1 10YR 3/1 黑褐色シルト 粘性弱 しまり中 塵・白色バニス1%以下
- 2 10YR 3/1 黑褐色シルト 粘性弱 しまり中 V層ブロック・褐色バニス2%
- 3 10YR 5/8 黄褐色土 (汚れV層崩落土) 粘性弱 しまり弱
- 4 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性・しまり共弱 濃色バニス1%以下
- 5 10YR 8/6 黄褐色土 (汚れV層崩落土) 粘性弱 しまり弱
- 6 4層とV・切迹の混合土 粘性中 しまりやや弱

1 10YR 3/1 黑褐色シルト 粘性弱 しまり中

0 1:40 2m

第20図 16～19号陥し穴状遺構

〔位置・検出状況〕 調査区中央北寄り、13～14Pグリッドに位置する。検出面はIV層下～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 44 × 162cm、底部径 33 × 152cm・深さ 60cm を測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向は N-0° - E である。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がる U字状である。長軸の断面形は南北両側共に僅かに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 6 層からなる。暗褐色～黒褐色シルト主体で構成され、上位～中位に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

16号陥し穴状遺構（第20図、写真図版16）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部北寄り、13Qグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 55 × 169cm、底部径 30 × 155cm・深さ 76cm を測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向は N-32° - W である。短軸の壁は底面から直立気味に立ち上がる U字状である。長軸の断面形はほぼ直立して立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 10 層からなる。黒色～黒褐色シルト主体で構成される。上位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

17号陥し穴状遺構（第20図、写真図版16）

〔位置・検出状況〕 調査区北西側、13Rグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 58 × 145cm、底部径 25 × 119cm・深さ 58cm を測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向は N-48° - W である。短軸の断面形は底面から丸みを持って立ち上がる U字状である。長軸の断面形は両端部共にやや外傾して立ち上がるもので、底面は僅かに凹凸が認められるがほぼ平坦である。

〔埋土〕 4 層からなり、黒褐色～黄褐色シルト主体で構成される。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

18号陥し穴状遺構（第20図、写真図版16）

〔位置・検出状況〕 調査区北側、17Pグリッドに位置する。検出面はV層である。

〔規模・形状〕 開口部径 21 × 216cm、底部径 12 × 205cm・深さ 26cm を測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向は N-53° - E である。短軸の壁は底部から直立気味に立ち上がる U字状である。長軸の壁は削平により不明である。底面は中央部付近でやや深く掘り込まれ、小規模な段状をなす。

〔埋土〕 3 層からなる。黄褐色～灰黄褐色シルト主体で構成され、上位に白色バミスを僅かに含む。自然堆積の様相を呈する。

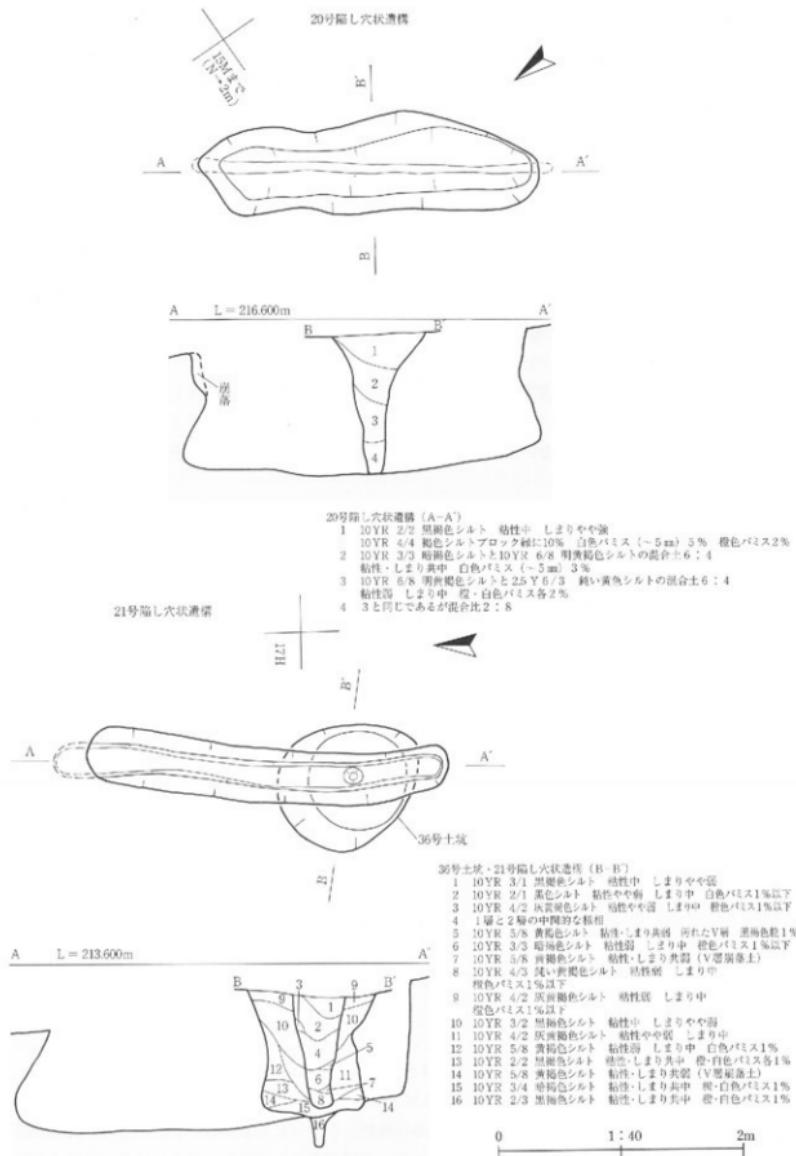
〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

19号陥し穴状遺構（第20図、写真図版16）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、13～14Mグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 119 × 227cm、底部径 35 × 204cm・深さ 87cm を測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向は N-61° - E である。短軸の壁は底部から外傾しながら立ち上がる V字状である。長軸の断面形は東側が底面付近で小さく内湾するフ拉斯コ形、西側が直立して立ち上がるもので、底部は西側

1. 純文時代の検出遺構



第21図 36号土坑・20・21号窯し穴状遺構

に低く傾斜する。

〔埋土〕 6層からなる。暗褐～黒褐色シルト主体で構成される。上位に白色・橙色バミス、中位に橙色バミスを疎らに含む。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

20号陥し穴状遺構（第21図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部、14Mグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 77 × 274cm、底部径 8 × 290cm・深さ114cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-36° - Eである。短軸の壁は底面から外傾しながら立ち上がり開口部に至って開くY字状である。長軸の壁は両端共に内湾するフ拉斯コ状を呈するもので、底面は中央部で緩やかに窪むが、ほぼ平坦である。

〔埋土〕 4層からなる。黒褐～明黄褐色シルト主体で構成され、全体に白色・橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

21号陥し穴状遺構（第21図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕 調査区中央東寄り、16～17IIグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 42 × 294cm、底部径 16 × 316cm・深さ89cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-1° - Eである。短軸の壁は底部から直立気味に立ち上がり開口部に至るU字状である。長軸の壁は北側が内湾するフ拉斯コ形、南側が直立して立ち上がるもので、底面は北側にやや低く傾斜する。

〔埋土〕 8層からなる。黒色～黒褐色シルト主体で構成され、上位に白色バミス、中位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

22号陥し穴状遺構（第22図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕 調査区東側、18F～Gグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 62 × 337cm、底部径 18 × 338cm・深さ141cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-90° - Wである。短軸の壁は底面から外傾して立ち上がるV字状である。長軸の壁は東側が内湾するフ拉斯コ形、西側が直立して立ち上がるもので、底面は西側に低く傾斜する。

〔埋土〕 7層からなる。暗褐～黒褐色シルト主体で構成され、上位に白色・橙色バミス、下位に橙色バミスが疎らに混入する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

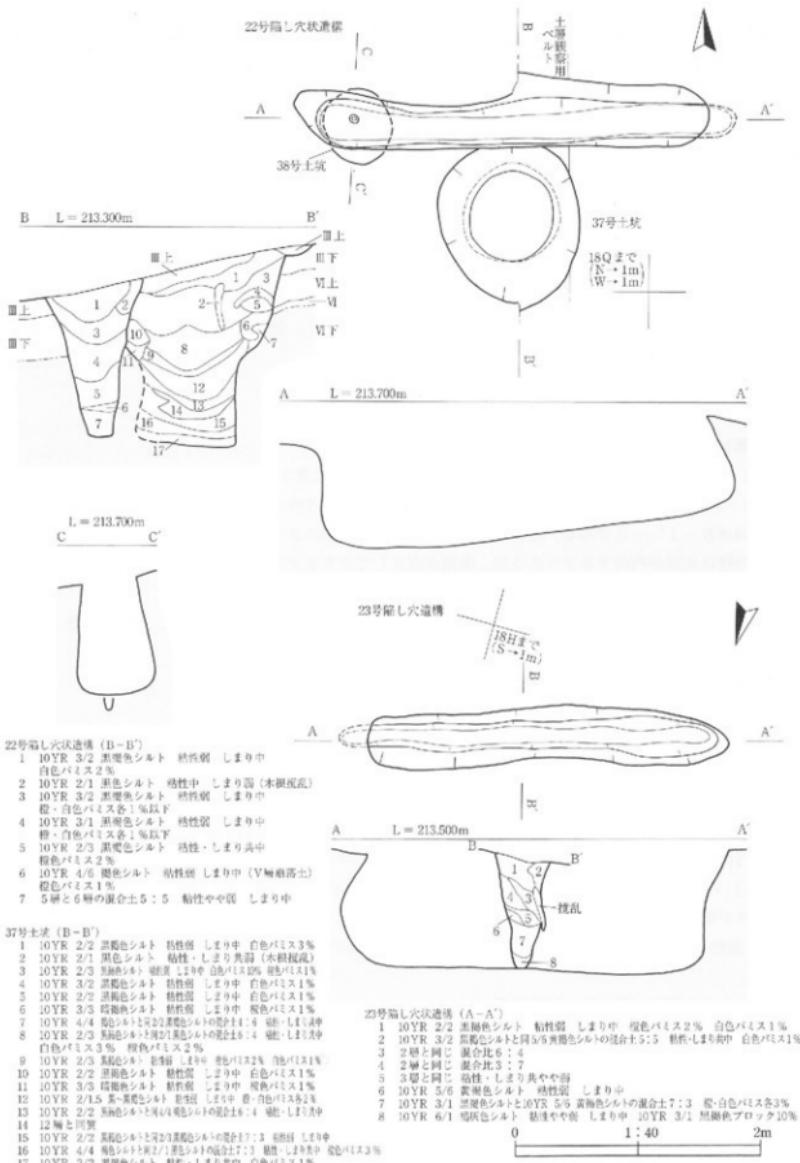
23号陥し穴状遺構（第22図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕 調査区南東側、18G～Hグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。

〔規模・形状〕 開口部径 41 × 293cm、底部径 13 × 300cm・深さ94cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-74° - Eである。短軸の断面形は底部から外傾しながら立ち上がるV字状である。長軸の壁は東側が内湾するフ拉斯コ形、西側が外傾して開くもので、底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 8層からなる。黒褐～黄褐色シルト主体で構成され、全体に白色・橙色バミスが疎らに混入

1. 繁文時代の検出遺構



第22図 37・38号土坑・22・23号陥し穴状遺構

する。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

2. 古代の検出遺構

古代の遺構としては、調査区中央部2～3号平坦地を中心に3棟の竪穴住居跡と焼土跡1基を検出した。遺物が殆ど出土せず、残存状態も悪い事から時期の特定が困難であったが、1号竪穴住居跡のカマド相当部から床面にかけて土師器の壊片、甕片が出土していること、および南東隅にカマドを持つことなどから、これらをもって古代の遺構と判断した。焼上遺構については竪穴住居跡と占地を同じくし近接すること、中世の建物跡に炉や焼上の痕跡が全くみられないこと、周囲の削平状況などから判断して竪穴住居跡のカマド残存部である可能性が最も高いと判断し、古代の遺構に含めて報告するものである。

1号竪穴住居跡（第23・24図、写真図版18）

〔位置・重複関係〕9～10O～Qグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層で、中世の普請である2号平坦地整地盛土下の褐色土上面（To-h相当面）で不整な暗褐色の方形プランとして確認したものである。東半部で2号竪穴住居跡と重複し、これを切る。

〔規模・平面形〕削平により、斜面上方の南東辺以外は失われている。残存する南東辺は推定値で670cmを測る。平面形は貼床の範囲から推定して隅丸方形を呈するものと思われる。

〔埋土〕3層に細分され、黒褐色シルトを主体として構成される。

〔壁〕残存する南東壁部分で8cmを測る。

〔床面〕床面はほぼ平坦でしる。黒褐色シルトとV層ブロックの混合土によって貼床が施される。また、南東辺に沿って幅20cm前後、深さ10cm前後の焼溝が認められる。

〔カマド〕東隅に構築されている。カマド本体は削平により失われており、84×103cmの範囲で暗赤褐色の梢円形プランと、48×64cm・厚さ4cmの不整な暗褐色の焼土範囲が確認されるのみである。

〔柱穴・ピット〕南隅に開口部径64×75cm・深さ37cmの円形を呈する土坑が1基検出されている。

遺物（第56図、写真図版38）

カマド相当部から土師器壊片1点、カマド掘り方～貼床相当部から土師器甕片1点、埋土から土師器甕片が2点出土している。器種は壺、甕で構成される。16の壺の製作に際してはロクロが使用され、底部切り離し技法は静止糸切りによる。17～19は甕で、体部はナデもしくはケズリ調整される。出土遺物から本遺構は平安時代に属するものと推察される。

2号竪穴住居跡（第23・24図、写真図版18・19）

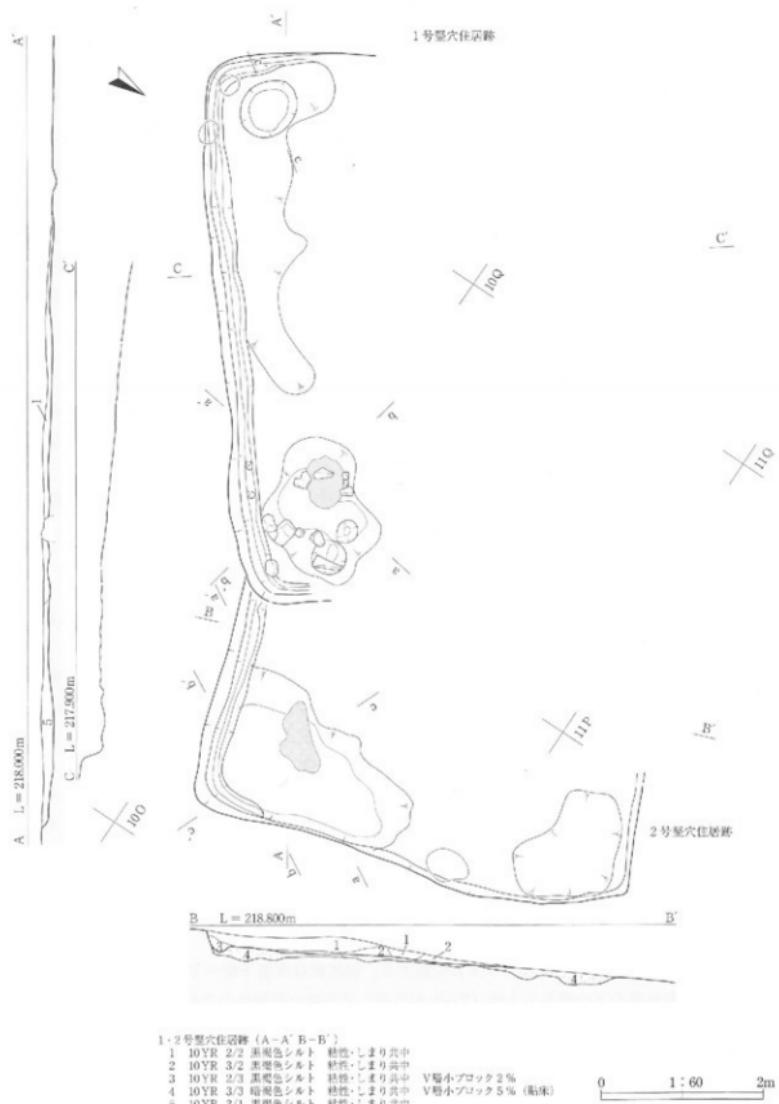
〔位置・重複関係〕9～11O～Qグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層で中世の普請である2号平坦地の整地盛土下の褐色土上面（To-h相当面）で不整な暗褐色の方形プランとして確認したものである。西半部で1号竪穴住居跡と重複し、これにより切られる。

〔規模・平面形〕削平により、斜面上方の南辺以外は殆ど失われている。残存する東辺は544cm、南辺は残存値で256cmを測る。平面形は貼床の範囲から推定して隅丸方形を呈するものと思われる。

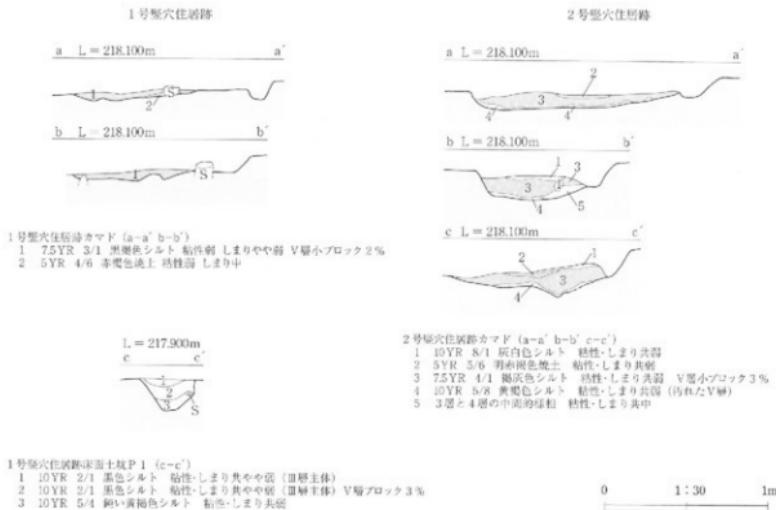
〔埋土〕3層に細分され、黒褐色シルトを主体として構成される。

〔壁〕最も残存する南壁部分で13cmを測る。

2. 古代の検山道橋



第23図 1・2号型穴住居跡(1)



第24図 1・2号堅穴住居跡(2)

〔床面〕 床面は北西側にやや低く傾斜するが、全体としてはほぼ平坦である。黒褐色シルトとV層ブロックの混合土によって貼床が施される。

〔カマド〕 南東隅に構築されている。カマド本体は削平により失われており、94×124cmの不整な暗褐色の楕円形プランと、40×87cm・14cmの不整な暗赤褐色焼土の範囲が確認されたのみである。

遺物

出土遺物はなく詳細は不明であるが、1号堅穴住居跡との重複関係・平面形状等から判断して本遺構は平安時代に属するものと推察される。

3号堅穴住居跡 (第25図、写真図版19)

〔位置・重複関係〕 13~14 O~Qグリッドに位置する。検出面はIV層下位~V層で中世の普請である2号平坦地の整地盛土下の褐色土上面 (To-h相当面) で不整な暗褐色の方形プランとして確認したものである。床面中央部で15・16号陥り穴状遺構と重複し、これらを切る。

〔規模・平面形〕 削平によって斜面上方の南辺以外は失われている。残存する南辺は356cmを測る。平面形は貼床の範囲から推定して隅丸方形を呈するものと思われる。

〔埋土・貼床〕 埋土は削平により殆ど残存せず、僅かに貼床痕跡を留めるのみである。貼床埋土はV層ブロックを少量含む、鈍い黄褐色シルトの単層で構成される。

〔壁〕 残存する南壁部分で8cmを測る。

〔カマド〕 南東隅に構築されている。カマド本体は削平により失われており、49×110cmの範囲で不整な暗褐色シルトと、20×34cm・7cmの不整な暗赤褐色焼土の範囲が確認されたのみである。

3. 中世の検出遺構

遺物

出土遺物はなく詳細は不明であるが、平面形状・カマドの存在等から判断して本遺構は平安時代に属するものと推察される。

1号焼土遺構（第26図、写真図版19）

調査区北西側、13Rグリッドに位置する。検出面はIV層下位～V層である。72×89cm・11cmの現地性焼土、それを囲むように 216×350cm の不整規円形の範囲に灰黄褐色シルトを含んだ黒褐色土が広がるものである。周囲から住居跡と認定できるような柱穴プラン、および硬化面等は確認していないが、他の竪穴住居跡と占地を同じくする点や、焼上が形成される点、明確な掘り方を持つことなどから、上部を削平された古代の住居跡のカマドの残存部である可能性が高い。出土遺物等はなく、詳細は不明である

3. 中世の検出遺構

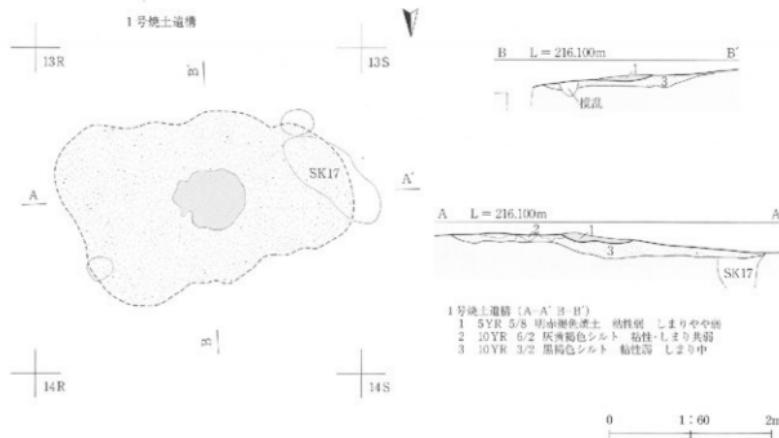
中世における館II遺跡の概要

縄張り（第69図）

館II遺跡は、蛇行しながら北東流する安比川右岸の沖積地に対して張り出す北向きの丘陵上に立地し、標高は214～222mを測る。館跡は、丘陵尾根の先端部を利用してくれた山城で、東西両側は谷地形を利用し、南端は尾根を横断する堀で区画防御する構えとなっており、全体の規模は東西約



第25図 3号竪穴住居跡



第26図 1号焼土遺構

250m、南北約300mの範囲に及ぶ。曲輪と堀を含めた面積は約75,000m²である。縄張りは東西2つの曲輪で構成され、今回の調査区は東側曲輪の北西隅？西側曲輪の北半部緩斜面上にかかる。本遺跡と谷を隔てた西側には同じく中世山城「不動館」があり、西側を安比川の断崖と接し、東～南側を二重の堀で区切った内部に狭い平坦地と腰曲輪を持つ。地元では、これを含めて東側から「陣場」、「中館」、「御不動様」と呼び習わされている（写真図版1）。

註) 堀、土壠に囲まれた城域内には、北から南方向に緩く傾斜する尾根の自然地形を利用して人工的に造られた平坦地が数段確認でき、断面からは普請（切り盛り）の痕跡を認める事ができる。本報告書では便宜上、このように堀・土壠によって防衛された平坦地のことを「郭・山輪」、自輪内部の斜面上に形成された階段状の平場を「平坦地」と呼称して両者を区別した。

検出された遺構について

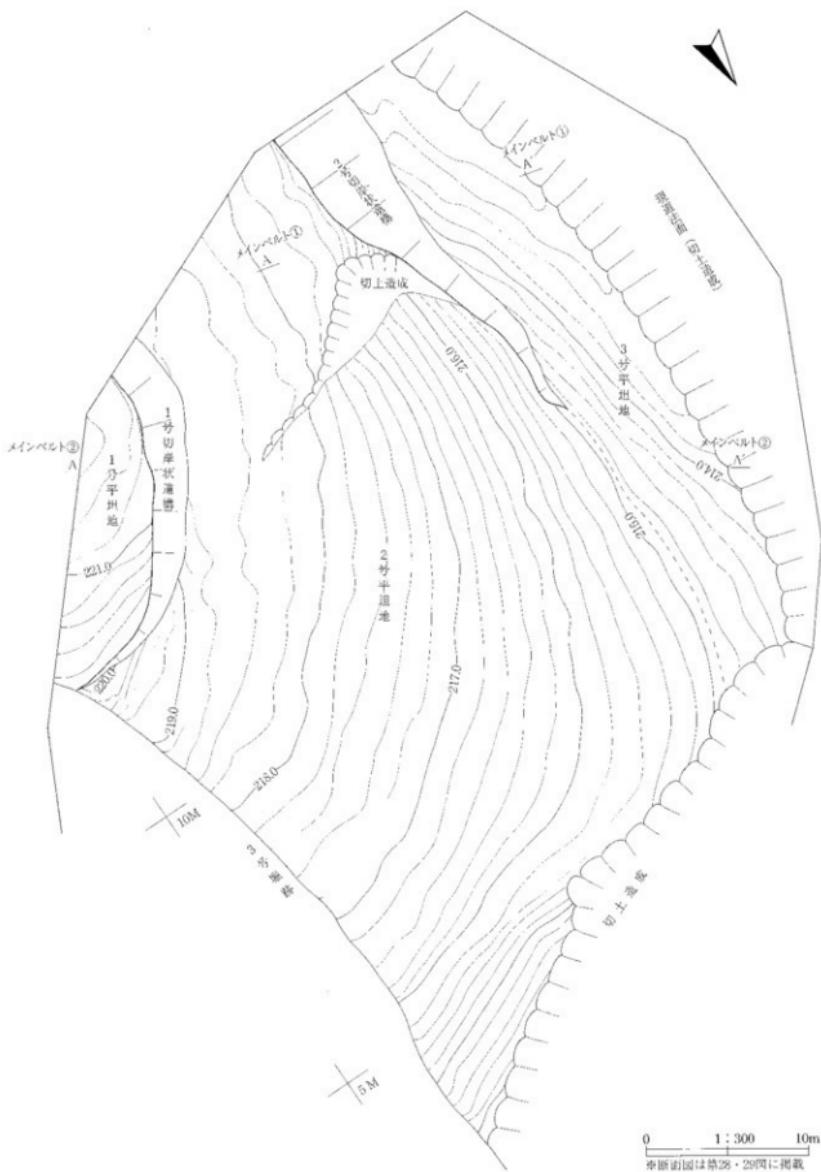
今回検出された遺構は、普請の跡として平坦地6箇所（内、帯山輪1）、切岸状遺構2箇所、堀跡3条、大溝跡2条、土壠1箇所、門跡？1箇所があり、作事の跡として掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡9棟、竪穴状遺構7棟、柱穴状土坑574個、獸骨の出土した墓坑1基がある。このうち獸骨が出土した墓坑については近現代の可能性があるが、まとめて本節で扱うこととする。

1号平坦地（第27・28図、写真図版20）

【位置・検出状況】調査区南側、4O～P、5N～O、6M～O、7M～Nグリッド、北向きの緩斜面に位置する。南西側は調査区域外にかかる腰曲輪、北東側は3号堀跡で限られ、南東側は上位の平坦地によって囲されている。現況は原野で、標高220.2～221.6mである。

【規模・形態・機能】南東～北西4.0m、北東～南西19.8m、面積約61.8m²で、北西方向に張り出す狭い半円形状である。館跡の縄張りから、高位面から2番目の平坦地と判断される。

【普請・作事】尾根斜面を切上して、平坦地を造っている。平坦面における作事の痕跡としては柱穴



第27図 1～3号平坦地・1・2号切岸状遺構

状小土坑が3個確認されている。整地層は、平坦地の調査範囲ほぼ全面におよび、端部に厚く施されている。厚さは最大107cmほどである。

〔埋土〕 調査範囲ほぼ全域で整地層が確認されており、盛土整地層としてV・VI層地山ブロックを含む鈍い黄橙～灰黄褐色シルトが堆積する。III層は旧表土である。

遺物（第60図、写真図版41）

II層盛土中より占銭（52：嘉祐通寶）が1点出土している事から、普請の時期は中世と考えられる。

2号平坦地（第27～29図、写真図版21）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部2～16M～Uグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は3号平坦地、東側は4号縁跡で限られる。現況は畑地で、標高215～220mである。本平坦地の南西側を除いて北西側、および北側縁辺部は現代の切土造成により、普請時の現況が失われている。このため、当該区域においては作事痕跡の残存状況も不良である。

〔規模・形態・機能〕 南東～北西22.0m、北東～南西36.0m、面積約1,301.2m²で、南西側に張り出す半月状である。館跡の縄張りから、高位面から3番目の平坦地と判断された。

〔普請・作事〕 尾根斜面を切土して、平坦面を造っている。平坦地における作事の痕跡としては掘立柱建物跡1棟、堅穴建物跡5棟、堅穴状遺構2棟、柱穴状小ピット469個が確認されたが、切土造成された区域（6～8Q～Tグリッド付近）では、周囲と比較して遺構密度が疎である。整地層は残存する範囲で、平坦地の西側を中心とする南北約146m、東西約6.8mに及ぶ。盛上平坦地の縁辺部を主体として施され、厚さは最大104cmを測る。本平坦地の北側縁辺部は、切土造成時に広範囲に普請時現況が失われ、遺構の一部が破壊・消失している。このため当該区域においては盛土整地層も確認できていない。

〔埋土〕 西側で整地層が確認されており、盛上整地層としてV・VI層地山ブロックを多量に含む鈍い黄橙～灰黄褐色シルトが堆積する。

遺物（第60図、写真図版41）

II層盛土中より占銭（53：嘉定通寶？）が1点出土したことから、普請の時期は中世と考えられる。

3号平坦地（帯曲輪）（第27・29図、写真図版21）

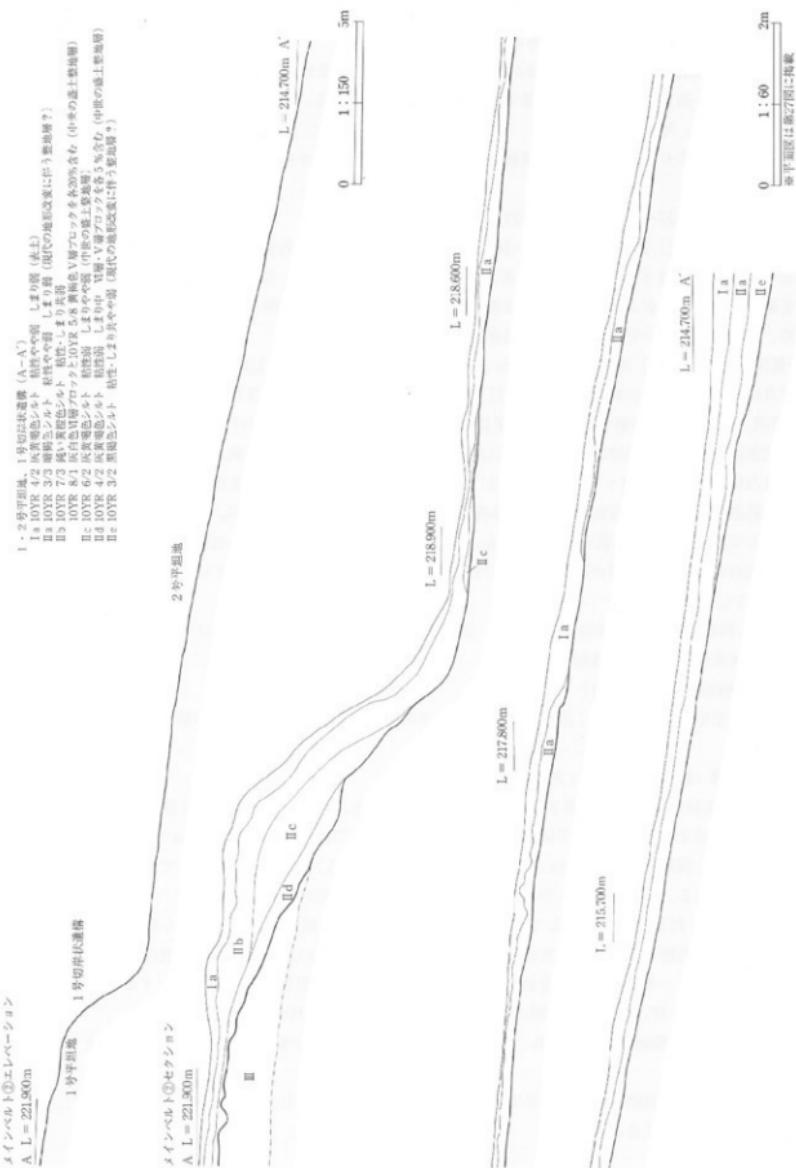
〔位置・検出状況〕 調査区西側2～13U～Wグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は自然の沢、東側は2号切岸状遺構で限られている。現況は畑地で、標高213.2～215mである。

〔規模・形態・機能〕 東～西6.0m、南～北23.5m、面積約145.1m²（範囲不明瞭）で、西側に狭く張り出す帯状である。館跡の縄張りから、高位面から4番目の平坦地と判断された。

〔普請・作事〕 尾根斜面を切土して、平坦面を造っている。平坦地における作事の痕跡としては堅穴状遺構4棟、門跡？1箇所、柱穴状小ピット5個が確認されている。西側端部は現道を通す際に切土造成されており、普請時の現況を留めていない。整地層は、平坦地の西側を中心とする南北104m、東西7.2mおよび、平坦地の端部に施されている。厚さは最大90cmほどである。

〔埋土〕 平坦地で整地層が確認され、暗褐～灰黄褐色シルト主体で構成される。III層は旧表土である。遺物

出土遺物がなく時期など詳細は不明であるが、他の平坦地から出土した遺物の時期から推測して中世の遺構と考えられる。



第28図 1・2号平坦地・1号切岸状構造

4号平坦地（第30図、写真図版22）

【位置・検出状況】調査区北側14～19 N～Uグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は3号堀跡、東側は自然の谷で限られ、南側は東西方向に尾根を寸断する堀によって画されている。現況は畑地で、標高212.4～213.8mである。

【規模・形態・機能】南東～北西11.5m、北東～南西32.5m、面積約217.8m²で、北側に張り出す半円状を呈するものと推測される。館跡の縄張りから、高位面から5番目の平坦地と判断された。

【普請・作事】尾根の先端を切土して、平坦面を造っている。平坦地における作事の痕跡としては、竪穴建物跡4棟、竪穴状遺構1棟、柱穴状小ピット89個が確認されている。本平坦地の縁辺部は調査区域外へかかるており、調査範囲内で盛土整地の痕跡は認められていない。

遺物

出土遺物がなく時期など詳細は不明であるが、他の平坦地から出土した遺物の時期から推測して中世の遺構と考えられる。

5号平坦地（第31図、写真図版22）

【位置・検出状況】調査区南東側、14～16 F～Hグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は1号大溝跡、東側は自然の谷で限られ、南側は上位の平坦地（調査区域外）によって画されている。現況は原野で、標高210.4～213mである。

【規模・形態・機能】東西10.3m、南北13.0m、面積約56.5m²で、北側に狭く張り出し、その後東方へ帯状に巡る。館跡の縄張りから、高位面から4番目の平坦地と判断された。

【普請・作事】尾根斜面を切土して、平坦面を造っている。盛土整地の痕跡は認められなかった。

遺物（第60図、写真図版41）

I層表土中より古銭（54：寛永通寶）が1点出土している事から、普請の時期は中世と考えられる。

6号平坦地（第31図、写真図版22）

【位置・検出状況】調査区東側17～20 E～Hグリッド付近、北向きの緩斜面に位置する。西側は1号大溝跡、東側は自然の谷で限られ、南側は5号平坦地によって画されている。現況は原野で、標高214.4～215.8mである。

【規模・形態・機能】東西15.5m、南北10.2m、面積約106.8m²で、北側に狭く張り出し、その後東方へ帯状に巡る。館跡の縄張りから、高位面から5番目の平坦地と判断された。

【普請・作事】尾根斜面を切土して、平坦面を造っている。盛土整地の痕跡は認められなかった。

遺物

出土遺物がなく時期など詳細は不明であるが、他の平坦地から出土した遺物の時期から推測して中世の遺構と考えられる。

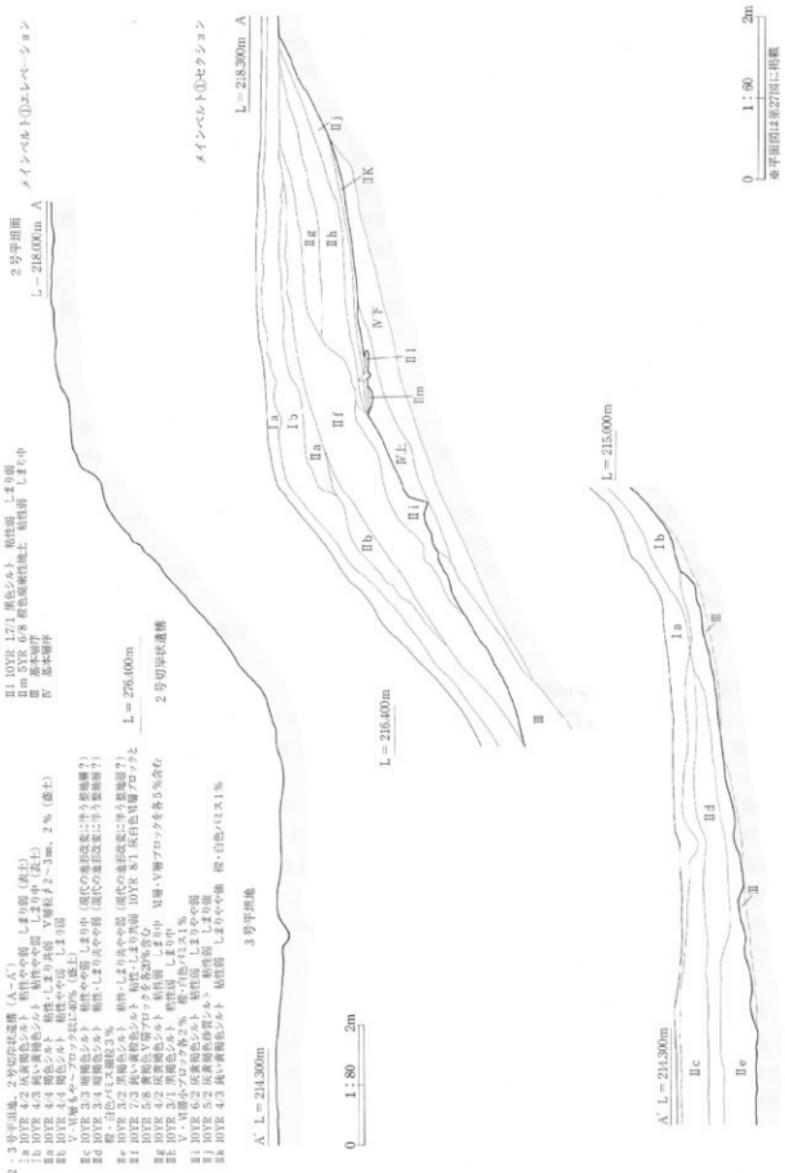
1号切岸状遺構（第27・28図、写真図版20）

調査区南西侧4～7 M～Pグリッド付近、1号平坦地と2号平坦地の間の斜面である。調査地内での実効法高はおよそ3.8m、垂直壁面高は約3.2mを測る。普請は山側上位が1号平坦地の整地盛土、谷側下位は掘削して傾斜をとり、法面の角度は現状の上位で38°、下位で35°前後である。

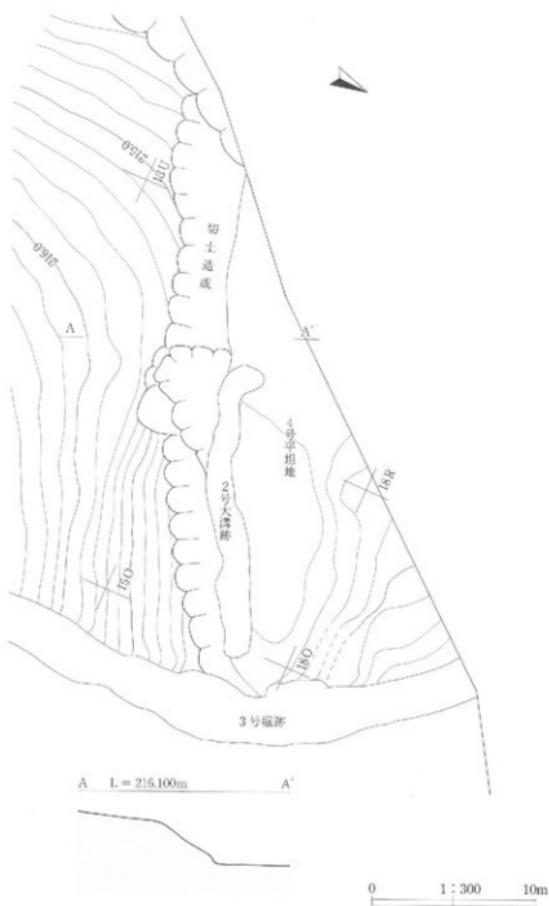
遺物（第58・59図、写真図版39・40）

I層表土中から石鉢片2点、敲磨器1点、茶臼（上臼、下臼各1点）が出土している。本遺構の時

3. 中世の検出遺構

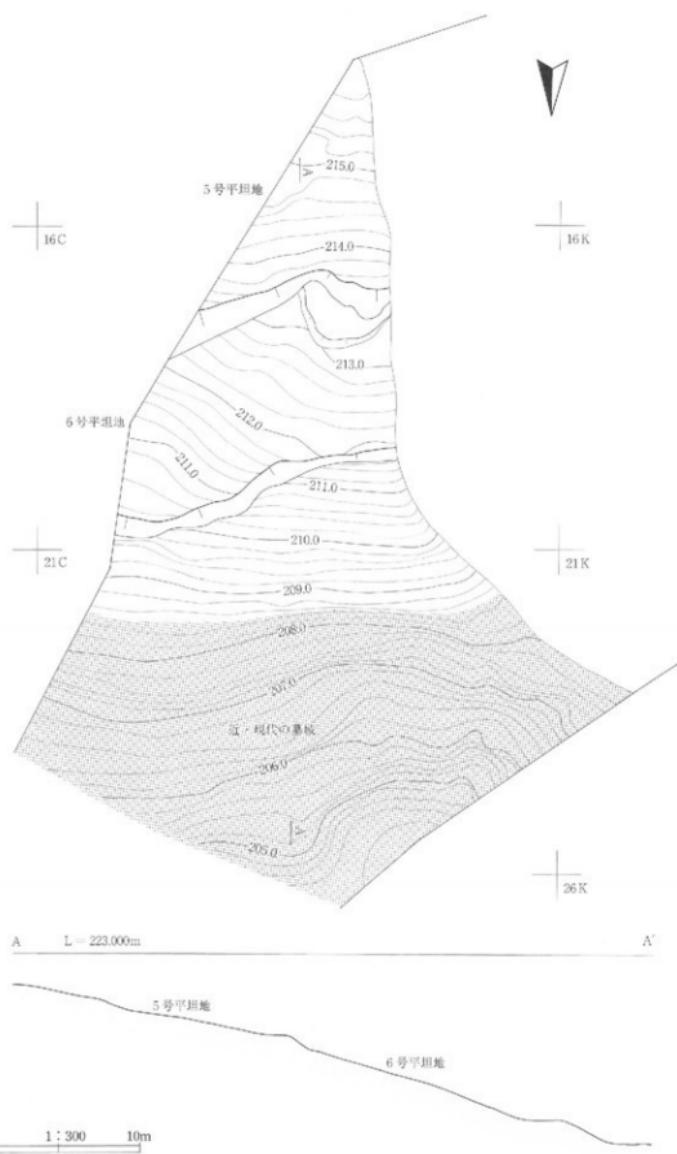


第29図 2・3号平坦地・2号切岸状遺構



第30図 4号平坦地

3. 中世の検出遺構



第31図 5・6号平坦地

期はこれらの出土遺物から推定して中世と考えられる。

2号切岸状遺構（第27・29図、写真図版21）

調査区南西側2～7 T・Uグリッド付近、2号平坦地と3号平坦地の間の斜面である。調査地内の実効法高はおよそ5.9m、垂直差高は約3.45mを測る。普請は山側上位が2号平坦地の整地盛土、谷側下位は削平して傾斜をとり、法面の角度は現状の上位で53°、下位で49°前後である。

（丸山直美）

1号堀跡（第32・33・35図、写真図版23）

〔位置・検出状況〕 調査区中央部の12H～22Mグリッドに位置する。2・4号平坦地の東側にあり、同平坦地と5・6号平坦地とを区画する。当堀跡付近は現況でも埋没しきらず、緩く壅んだ状態であり、堀跡として認識できた。中央付近の19J～19K付近は西側の畑へ登る小路となっており、当該部分は人為的に削平されている。また南半部の西寄り部分は平坦に整地されて、通路状となっていた。壅みの底では斜面上方から少量ながら常に湧水しており、ごく小規模な沢となっていた。

〔重複関係〕 2号堀跡と重複しているが、平面で新旧関係を把握できなかった。また、埋土断面でも直接的に截り合い関係は示されていない。位置関係から見て2号堀跡と同時期存在する可能性は低く、他の堀との配置、繩張りの検討から、間接的ではあるが当堀跡がより古い可能性が高いと推測される。

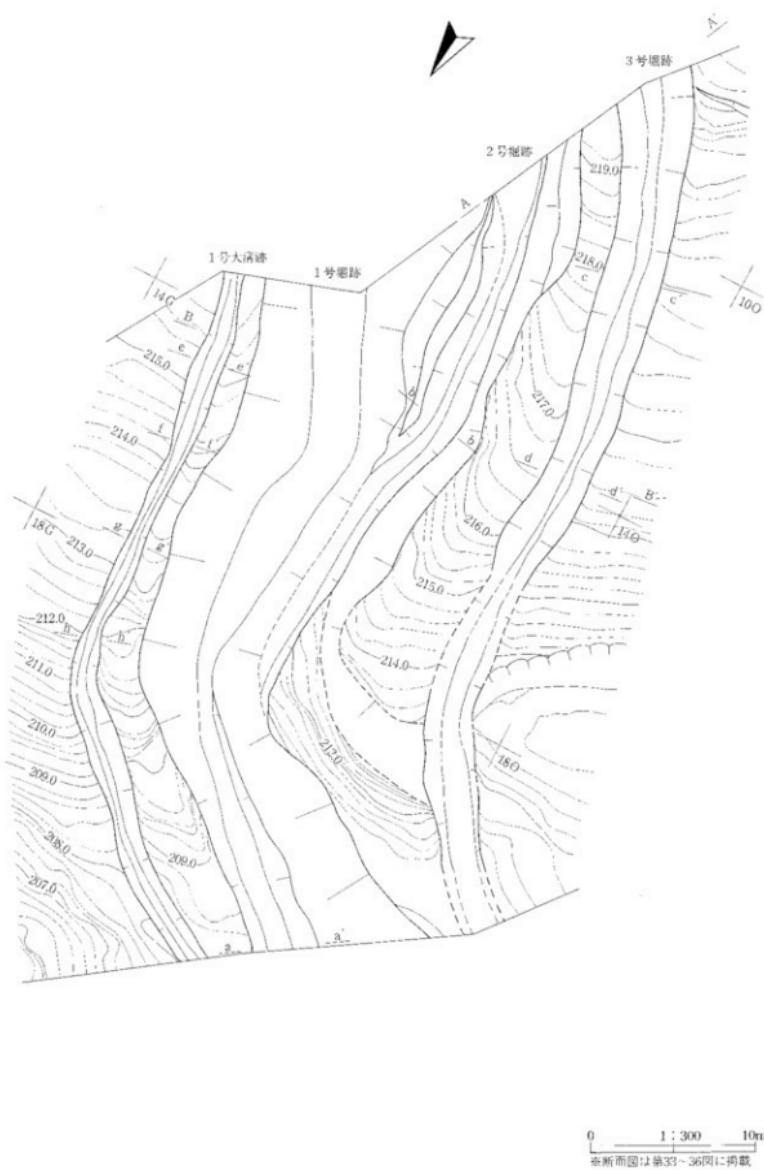
〔規模・形態・方向〕 調査区内で「く」字形に屈曲している。2号平坦部と5・6号平坦地を区切る南半部分ではほぼ南北に走るが、19I～18Jグリッド付近で方向を変えて、4号平坦地を区切る北半部分は北東～南西方向へ延びている。当堀跡の南北両端とともに調査区外へと続いており、調査区外でも現況で当堀跡の延長部分が確認できる。南側（斜面上方）ではさらに上段の曲輪とおもわれる平坦面を区画して、現況で確認できる折形様の屈曲部へと続いている。北側については、丘陵先端部へと向かっているが、崖面へと突き抜けているのか、現況では確認できなかった。検出部分の規模は、長さ43.5m、実効堀幅10.4m（最大）、実効法高4.6m（最大）である。法面は、屈曲部以南では上位がV層、中～下位がVI層、屈曲部以北では最上位がV層、上～中位がVI層、下位はVII層（砂礫層）、に相当している。実測図に即せば、断面形状はやや漏斗状に上方が開いたもので、一般的な堀の形態分類に即せば、「箱堀」に相当するものと判断される。但し、精査過程において湧水により底面を明確に把握できなかった嫌いがあり、屈曲部以北がやや底面幅が狭く築研堀に近い形態となっている。また法面に相当するVI層上が脆く崩れやすい性状を踏まえると、はじめ築研堀だったものが崩落・補修を繰り返して箱堀状となった可能性もある。

〔普請〕 当堀跡部分はもともと沢筋だったと思われ、その地形を生かして堀を構築している。すなわち、縁辺部～法面中位までは傾斜が比較的緩やかで、自然地形の壅みを生かして大幅な普請は行っていないものと思われる。しかし、法面下位については、傾斜角が変わり、著しく急角度となる。普請により八戸火山灰層（V～VII層）を掘削した所産と思われる。

〔付属施設〕 上橋部分や橋脚と思われるピットは検出されていない。

〔埋土〕 上位にはI層（現表土・盛り土・旧表土層）およびIII層系黒褐色土が堆積している。前者は人為堆積層で、当堀跡が埋没しない深い壅みだったものを、ある程度まで整地したものである（それでも現状で壅みを認識できる程度までしか埋まっていない）。中～下位の埋土は、VI層起源の白色ロームが多量に混入する黒褐色土である。断面A～A'で見ると、特に西寄り部分に白色土が纏まって堆積している。また、北端部の断面a～a'では、表土直下まで白色土が堆積している。これらの白色土

3. 中世の検出遺構



第32図 1～3号堀跡・1号大溝跡

自体はVI層の崩落によるものであろうが、特にA-A'断面の堆積様相はやや特殊であり、斜面上方に人為的な埋め戻しが行われている可能性を否定しきれない。なお、新期と思われる2号堀跡が機能していた時期には、当堀跡は6~8層付近まで埋没し陥み状となっており、2号堀跡廃絶後に5層以上が堆積したと思われる。

〔時期〕出土遺物を欠いており、直截的に時期決定する根拠が薄い。但し当堀跡が中世城館に付随する施設であることは確実であることから、他の遺構の年代観から見て中世後期16世紀代と思われる。

2号堀跡（第32~35図、写真図版23・24）

〔位置・検出状況〕調査区中央部の10K~18Kグリッドに位置し、ほぼ2号平坦地の東側を画する。屈曲部以南の1号堀跡に並行しているが、現状では完全に埋没しており、かつ通路状に整地されていたため、当堀跡の存在を全く認識できなかった。1号堀跡の検出作業中に、VI層白色土の筋に区切られたくすんだ褐色土の帯状プランとして検出し、トレーナーを入れた結果、白色土の筋は堤職の先端部分で、当該プランが堀であることが判明した。

〔重複関係〕16Kグリッド以北で1号堀跡と重複しており、19Kグリッド以北では延長部分の有無を確認できなかった。新旧関係を直截的には把握できなかったが、1号堀跡で述べたように、おそらく当堀跡はより新しいものと推測される。

〔規模・形態・方向〕検出部分では、長さ37m、実効堀幅3.6m、実効法高2.2mである（断面A-A'を参照）。1号堀跡との間に、地山（VI層）をそのまま掘り残した累壁状の高まりがある。断面形は逆台形の箱型を呈している。当堀跡南端はさらに調査区外へ延びており、現状でははっきりしないが堀痕跡を辿ることができる。上述のとおり、1号堀跡との間に累壁が認められるが、15Kグリッド以北では崩落によるものが消失している。

〔当諸〕VI層を箱型に掘削しており、法面・底面ともにVI層相当である。

〔付属施設〕検出されていない。

〔埋土〕くすんだ色調の、褐色・灰黄褐色・黒褐色土が細かな層をなして堆積、下位では地山系の土が互層している。堆積様相から見ると、16~17層以下については地山崩落による自然堆積と思われる。当堀跡廃絶後、2つの堀（1号堀跡はこの時点である程度まで埋没）は同時に埋没したと思われる。

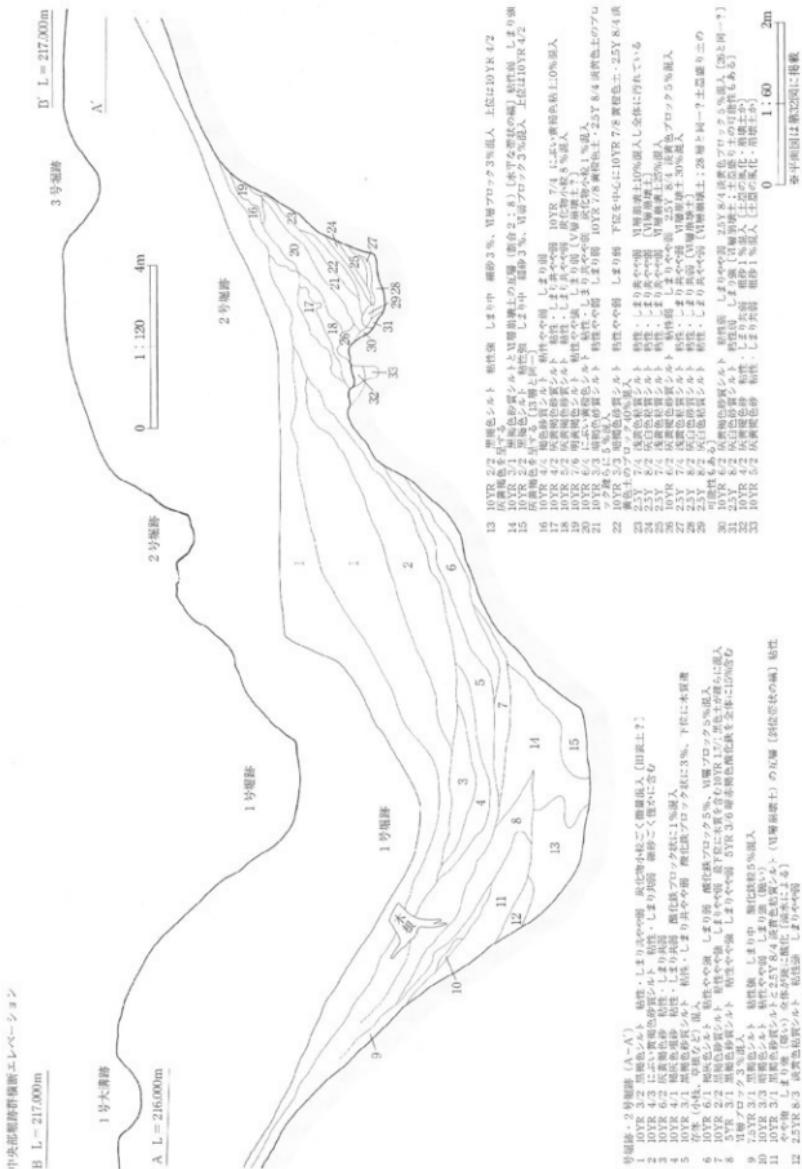
〔時期〕出土遺物がなく、時期判断の根拠を欠いているが、1号堀跡同様に中世後期16世紀代と思われる。

3号堀跡（第32・34・35図、写真図版23・24）

〔位置・検出状況〕8L~19Nグリッドに位置する。2号・4号平坦地の東側を緩く蛇行しながら南北に走り、区画している。調査開始当初の試掘トレーナーで一部を検出しており、表土除去後、V層面で調査区を縦断する帶状に延びる黒色土のプランとして把握した。

〔重複関係〕北半部では3・4・5・6号竪穴建物跡と重複して、法面および埋土を截されている。また南半部では9・10・11・22・23・24（・25）号土坑と重複してこれらを截っている。なお、直截の截り合い関係ではないが、当堀跡の東側縁辺に隣接して1号土坑が構築されていたと推測される。

〔規模・形態・方向〕2号平坦面の東側縁辺部に沿って、逆「S」字にごく緩く曲がりながら南~北へ延びている。南半部では1号堀跡とは同じ輪線をとっているが、はっきりした屈曲部分ではなく、北半部では緩くカーブするものの1号堀跡と接近している。調査区内で完結せず、南北両側は調査区外へ続いている。調査区外では、当堀跡の痕跡を明確には把握できない。なお、当堀跡と1号堀跡と



第33図 1・2号堀跡

の間に2~5mほどの間隔があるが、当該部分には柱穴が全くない。この部分に土壘が壘に沿った形で築かれていたようであるが、南端付近を除いてその痕跡は捉えられなかった。土壘断面A-A'を見ると、断面形は逆台形の箱型状である。検出部分では、長さ52m、堀幅5.9m、法高3.2mであり、上塙先端を基点とした場合は実効堀幅7.6m、実効法高4.2mを測る。

〔普請〕上層断面で確認できるところでは、Ⅲ層面から掘り込んでおり、法面はⅢ~Ⅵ層土、底面はV~VI層土に相当している。

〔付属施設〕検出されていない。

〔埋土〕断面を参照すると、下位の堆積土と上~中位のそれとでは様相が異なる。下位は東西両側（1号土壘、2号平坦地）から流れ込んでいる自然堆積の崩落土である。一方、上~中位の堆積土は東側からのみ流入しており、かつ黒褐色・暗褐色・にぶい黄褐色上が厚みある層ごとに流入し、グラデーションをなしている（断面A-A'の4~8層）。これら上~中位の堆積土は、人為的埋め戻しによるものと考えられる。

〔時期〕出土遺物を欠くが、館全体の年代観から、中世後期16世紀に属するものと思われる。

1号大溝跡（第32・36図、写真図版23・25）

〔位置・検出状況〕13H~22Kグリッドに位置し、5・6号平坦地の西側縁辺を区切る。

〔重複関係〕13・36号土坑、23号陥入穴状遺構と僅かに重複して、これらを截る。

〔規模・形態・方向〕ほぼ1号堀跡に沿っている。「く」字状に屈曲しつつ、調査区を南北縱断している。検出部分は長さ45m、実効堀幅1.7m、実効法高1.0mである。断面形は地点によって異なり、南側ではやや皿状、屈曲部付近は逆三角形、北側では逆台形ぎみ、をそれぞれ呈している。底面は傾斜に沿っているわけではなく、やや平坦ぎみな面が階段状に連続した形である。1号堀跡との間には、1.5~3mほどの間隔がある。2号堀跡と3号堀跡との間と同様、当該部分に土壘が存在した可能性も考えたが、痕跡を確認できなかった。なお、南端付近で、法面傾斜に対して直交ぎみの、長さ10cmほどのごく浅い溝状跡みが複数検出された。当大溝跡掘削の際の工具痕でと思われる。

〔普請〕Ⅲ層面から掘り込んでおり、法面はⅢ~V層、底面はほぼV層に相当する。

〔付属施設〕検出されていない。

〔埋土〕橙色バミス（To-Nk）を含む黒色~墨褐色が主体で、概ね自然堆積の様相を示している。

〔時期〕出土遺物を欠くが、館全体の年代観から、中世後期16世紀に属するものと思われる。

2号大溝跡（第37図、写真図版23・26）

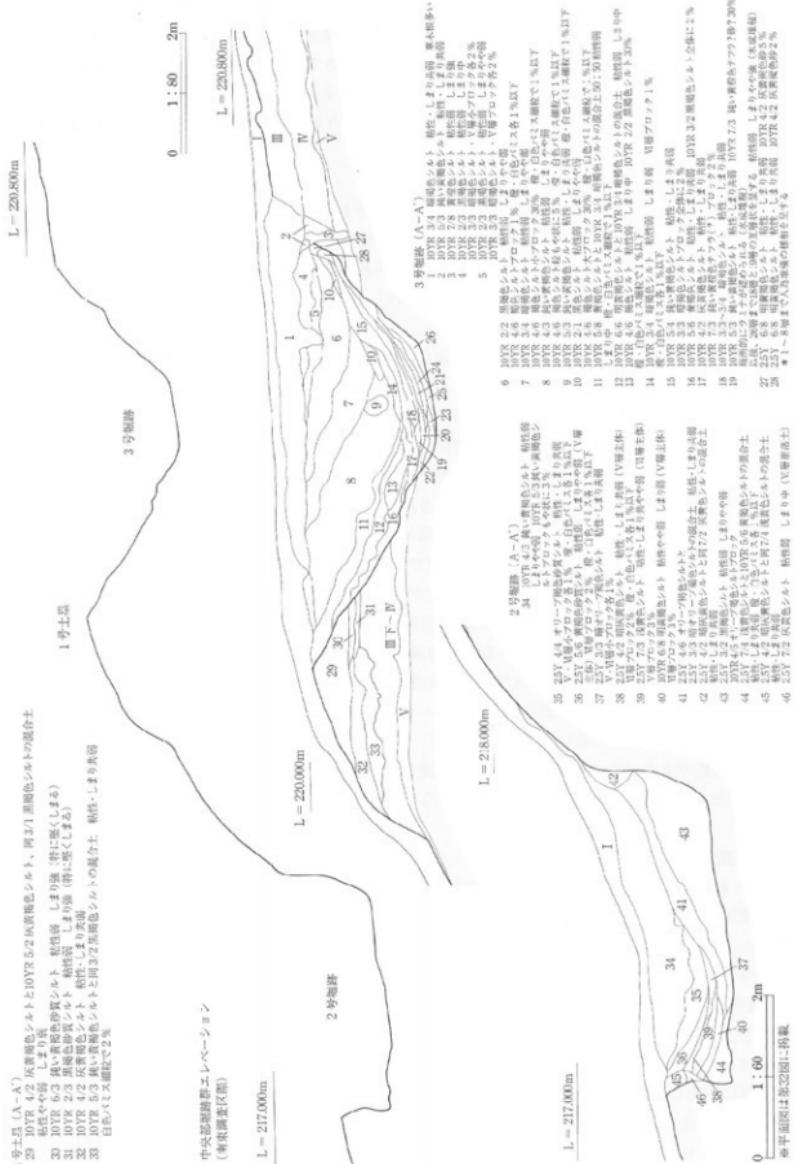
〔位置・検出状況〕調査区北側の15N~17Rグリッド、2・4号平坦地を区画している。当大溝跡周辺は現況では4号平坦地縁辺にあたるが、2号平坦地縁辺部が後世の擾乱により削剥されていることから、本来は2号平坦地の北側にあった可能性がある。当堀跡自体も削剥により底面付近しか残っていない。4号平坦地の表土を除去した際に、V層面で黒褐色の帶状プランとして検出した。

〔重複関係〕東側の17O~16Pグリッド付近では柱穴群によって截られている。

〔規模・形態・方向〕長さ18m、実効堀幅1.7mだが、上述のとおり底面付近しかなく、残存する深さ20cmほどである。本来の形状は不明であるが、残存部はやや蛇行しつつ北東~南西に延び、西端部では鉤状に屈曲している。

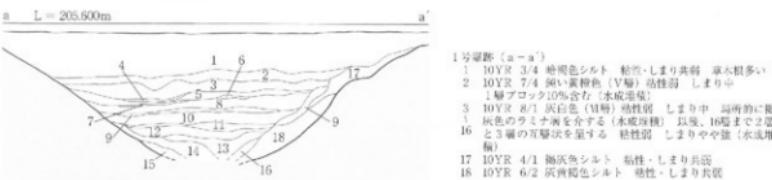
〔普請〕V層土を掘り込んでいる。掘り込み面は不明である。

〔付属施設〕検出されていない。



第34図 2・3号掘跡・1号土器

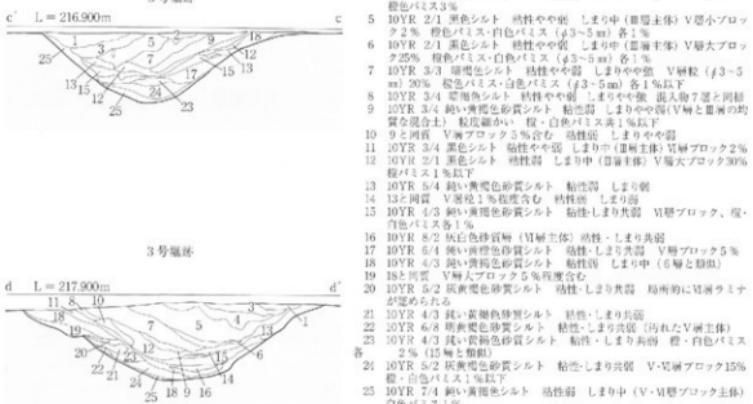
1号縦跡



2号縦跡



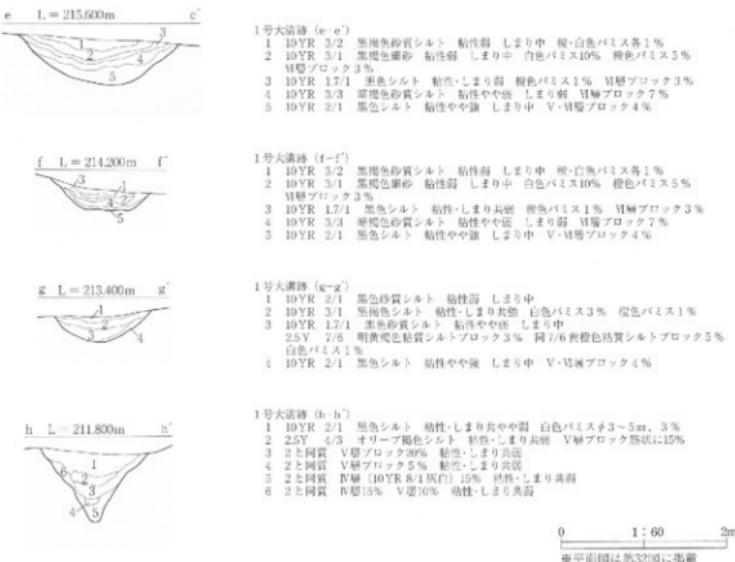
3号縦跡



0 1:60 2m

第35図 1～3号縦跡

3. 中世の検出遺構



第36図 1号大溝跡

〔埋土〕 確認できた埋土は、地山（V層）ブロックを含む黒褐色土である。

〔時期〕 出土遺物を欠くが、館全体の年代観から、中世後期16世紀に属するものと思われる。

1号土壙（第34図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕 9 Lグリッドでごく一部分を検出した。2号堀跡と3号堀跡の間にあり、表土直下で黑色土の高まりとして確認された。

〔重複関係〕 確認できた部分では、他の遺構とは重複していない。

〔規模・形態・方向〕 平面として検出できた残存部分は、9 Lグリッド付近のみである。表土除去の際、当該部分で黒色土の高まりを確認し、断面で土壙痕跡と認定した。断面で確認できる先端部分から堀底までの深さ（垂直累積高）は約2.0m、土壙積み土の底面幅3.8mである。

〔普請〕 当上堀はⅢ層下位面に構築されており、にぶい黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土が版塗様となっている。黒褐色土は堅く締まっているが、その他は全般的にしまり弱く、突き固めた様子がない。これら構築土はⅢ～V層起源であり、東に隣接する3号堀跡の掘り上げ土である可能性が高い。

〔付属施設〕 検出されていない。

〔埋土〕 埋土は薄く、現表土層に被覆されるのみである。

〔時期〕 3号堀跡と同時期に存在したものと捉えられ、中世後期16世紀に属すると思われる。

（千葉正彦）

1号門跡？（第38図）

【位置・検出状況】調査区西側、3 U・Vグリッドに位置する。現況で3号平坦地の南西側で確認され、奥の山林につづく下り緩斜面に位置している。

【重複関係】1号竪穴状遺構と重複し、これを切る。

【規模】径 61×80cm・深さ 67.2cm (pp4)、径 57×76cm・深さ 79.5cm (pp5) の柱穴が計2個確認されたもので、後に門跡の可能性を想定したものである。2個の柱穴はほぼ東西方向に位置しており、柱穴間の距離は130cmほどを測る。

【性格】広範囲な調査を行っていないため、詳細は不明であるが、本遺構の位置する3号平坦地（帶山輪）はほどなく南側の調査区外に至って一旦緩やかに下り、その後再び緩やかな上り勾配となり奥の平坦地へつなぐ。この付近は西側の虎口であったと推定できる地点からやや北側に登った地点にあたり、冠木門などの門柱が建っていた可能性が考えられる。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡が1棟検出されている。2号平坦地の南西縁辺部に位置するもので、館跡に伴うと考えられるものである。平面図に付してある1尺の寸法は30.3cmとして計算した。また、個別の柱穴規模は表に記載した。柱穴の深さは斜面下位に位置する浅いもので10cmに満たないものがあり、柱穴排列も不足するものが多いことから削平により消失したものが少なからず存在すると考えられ、本来は下層などの付属施設を伴う可能性がある。

1号掘立柱建物跡（第39図、写真図版27）

【位置・検出状況】調査区南西側、2号平坦地の3～7 p～sグリッドにかけて位置する。検出面はV～VI層で、暗褐色～黒褐色の円形プランとして検出した。

【平面形式】梁間4間、桁行7間の長方形プランを呈すと考えられる。梁行 6.8m (22.4尺)、桁行 14.0 m (46.2尺) で、面積は952m² (約288.5坪) である。使用した柱穴は29個である。

【建物方位】桁行の方向はN-31°～Eである。

【柱間寸法】梁桁の柱間は170cm (5.61尺) である。桁桁の柱間は200cm (6.6尺)、220cm (7.26尺) を多用する。

【付属施設】なし

遺物（写真図版41）

自然遺物としてpp433から、動物遺存体（貝殻）が出土している。時期決定できるような遺物は出土していないが、埋土の状況などから判断して中世後期に属するものと考えられる。

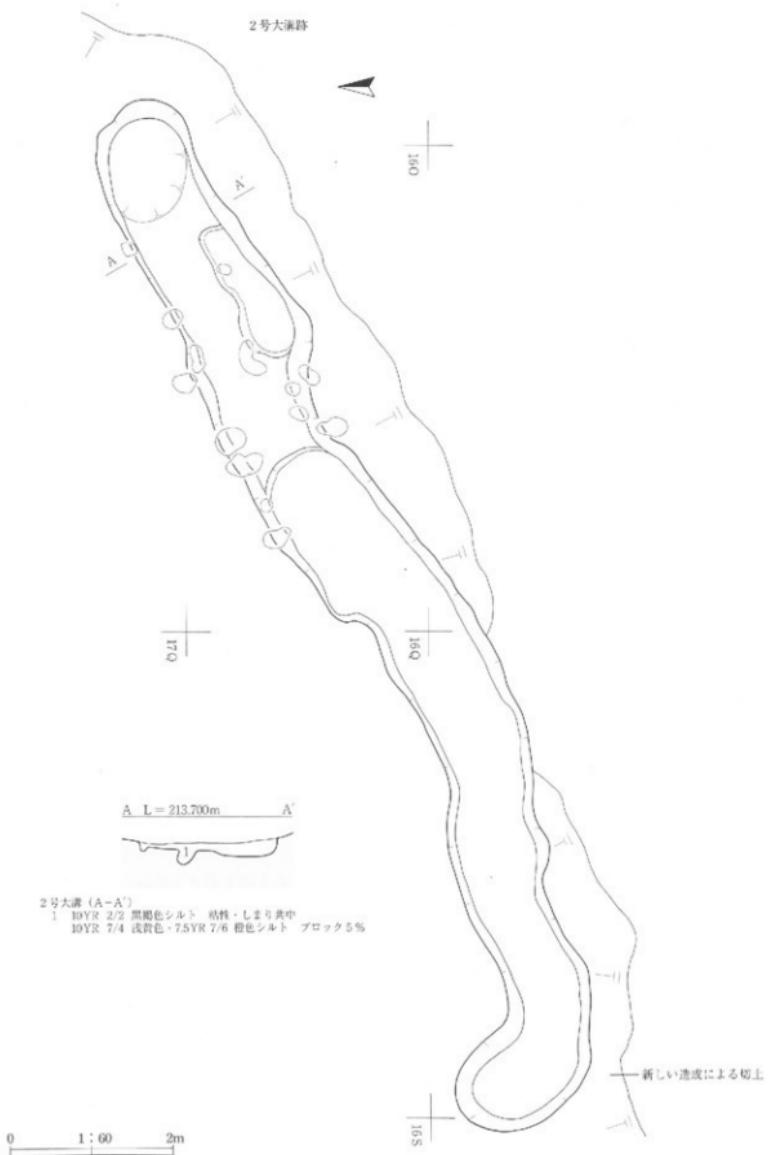
竪穴建物跡

竪穴建物跡としたものは地面を方形に掘り窪めて床とした建物跡のうち、床面に規則的な柱配置を持つものを扱った。ただし、2号・6号・8号は柱穴をもつもののやや不規則であり、竪穴状遺構に分類されるべきものとも考えられるが、便宜上こちらに含めて報告する。

竪穴建物跡は2・4号平坦地縁辺部を中心として9棟が検出されている。うち4棟は3号堀跡の埋め立て跡地に造られており、縄張り変更後に構築されたものである事が判明した。

1号竪穴建物跡（第40図、写真図版28）

3. 中段の検出遺構



第37図 2号大溝跡

〔位置・検出状況〕 調査区北西側、12～13S グリッドに位置する。V層下～VI層上面で黒褐色のプランとして検出した。2号平坦地の北側縁辺部に位置する。北側は削平を受け、残存状況は不良である。

〔重複関係〕 北側隅において31号土坑と重複し、これを切る。

〔規模・平面形〕 南東辺3.2m、南西辺2.8m、北東辺3.1mの方形を呈する。南西・北東辺は残存値である。斜面下位にあたる北西側では壁・床を確認できていない。

〔埋土・堆積状況〕 7層からなり、V層地山ブロックを疎らに含む黒～暗褐色シルト主体で構成される。〔壁・床面〕 V～VI層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南東側で36cmあり、外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、しまりは特にない。また、中央部を主体として黒褐色～暗褐色シルトによる貼床が施されるが、硬化面は特に認められない。

〔柱穴〕 壁際を巡るように pp1～pp12の12個を検出した。削平により、北西辺の柱穴のみ未検出である。規模は径13.5～(38)cm、深さ23.3～78.6cmを測る。

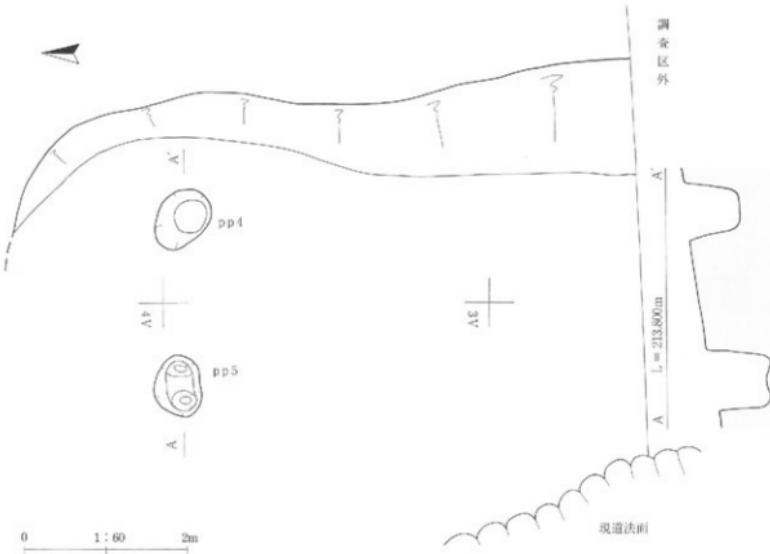
2号竪穴建物跡（第40図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕 調査区北西側、13T グリッドに位置する。V層下位～VI層上面で鈍い黄褐色～暗褐色のプランとして検出した。2号平坦地の北側縁辺部に位置する。南側を除く殆どは現代の地形変更時の掘削により失われ、残存状況は不良である。

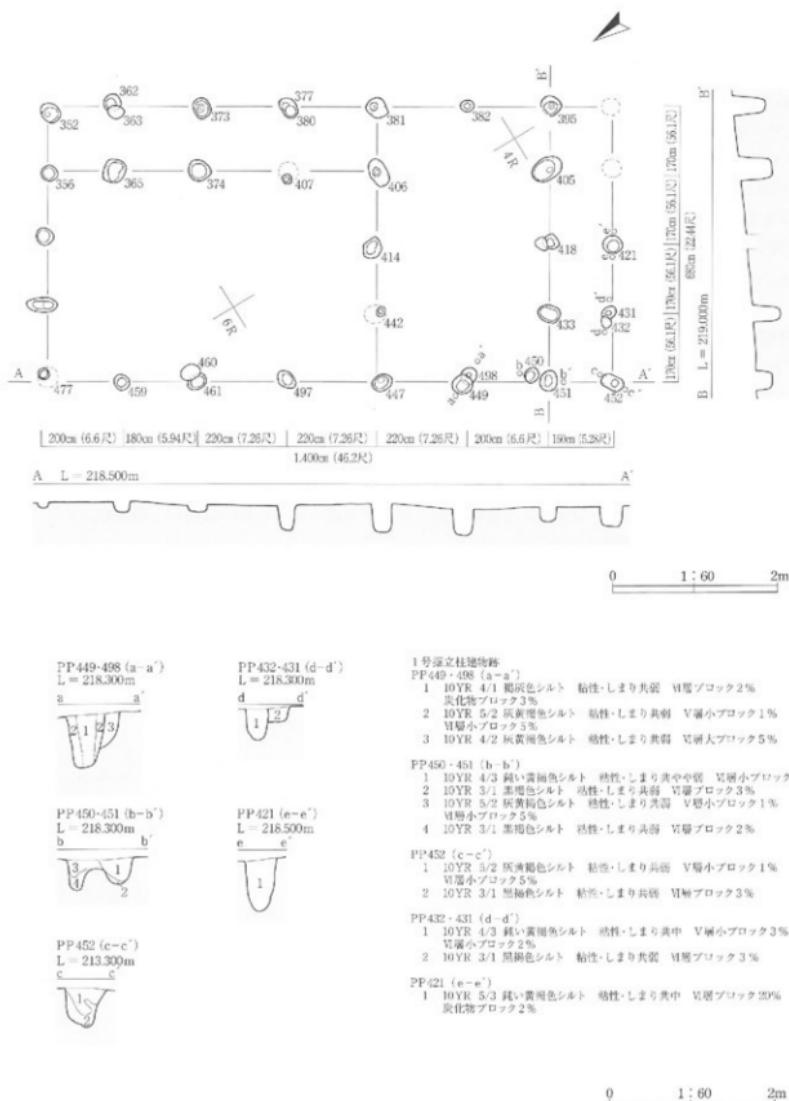
〔規模・平面形〕 南辺は残存値で4.15mを測る。平面形は残存部から推定して方形基調を呈すると思われる。

〔埋土・堆積状況〕 3層からなり、V・VI層地山ブロックを疎らに含む鈍い黄褐色～暗褐色シルトを主体とする。3層は貼床埋土である。

〔壁・床面〕 V・VI層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で22cmあり、ほぼ直立して



第38図 1号門跡？



第39図 1号掘立柱建物跡

立ち上がる。床面は検出した範囲ではほぼ平坦で全体的に貼床が施されるが、特に縫まりはない。

〔柱穴〕壁際に沿って pp1～pp4 の 4 個を検出した。柱穴の規模は径 13～34cm、深さ 15.2～81cm を測る。

3 号竪穴建物跡（第41図、写真図版29）

〔位置・検出状況〕調査区中央部北寄り、15～16 M～N グリッドに位置する。3号堀跡精査中に、堀幅をやや上回る鈍い黄橙色シルトのプランとして検出した。2号平坦地の北側縁辺部に位置する。

〔重複関係〕3号堀跡を人為的に埋戻した跡地に造られている。3号堀跡と南北辺の長さをほぼ同じくして重複し、これを切る。また南半部で 4号竪穴建物跡と重複し、これを切る。

〔規模・平面形〕東辺 2.0m、西辺 1.98m、南辺 2.26m、北辺 2.6m の方形を呈する。

〔埋土・堆積状況〕13層からなり、V・VI層地山ブロックを疎らに含む鈍い黄橙～暗褐色シルト主体で構成される。自然堆積と思われる。

〔壁・床面〕上位は 3号堀跡埋戻し土、下位は V・VI 層を掘り込みそれぞれ壁・床としている。残存する壁高は東側で 48cm、西側で 30cm、南側（西寄り）41.8cm、北側で 3.4cm あり、それぞれ外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で中央部に 3号堀跡埋戻しの際の貼床が施されるが、特に縫まりは認められない。

〔柱穴〕pp1～pp7 の 7 個を検出した。柱穴の規模は径 13.5～42cm、深さ 9.5～58.6cm を測る。

4 号竪穴建物跡（第41図、写真図版29）

〔位置・検出状況〕調査区中央部北寄り、15～16 M～N グリッドに位置する。3号堀跡精査中に、堀幅をやや上回る鈍い黄橙色シルトのプランとして検出した。2号平坦地の北側縁辺部に位置する。

〔重複関係〕3号堀跡を人為的に埋戻した跡地に造られている。3号堀跡と南北辺をほぼ同じくして重複し、これを切る。また北半部において 3号竪穴建物跡と重複し、これにより切られる。

〔規模・平面形〕規模が判明するのは南辺のみで、2.53m を測る。全体の形状としては方形基調を呈する。東辺、西辺は 3号竪穴建物跡とはほぼプランを同じくして重複しているため不明である。斜面下位にあたる北辺は 3号竪穴建物跡に切られ、失われている。

〔埋土・堆積状況〕埋土については断面の記録を欠き、詳細は不明である。当遺構が 3号堀跡埋戻し後に掘削されていることから、大きくは 3号堀跡埋土と同様、V・VI層地山ブロックを疎らに含む鈍い黄褐～灰黄褐色系の堆積土であったと推測される。

〔壁・床面〕上位は 3号堀跡埋戻し土、下位は V・VI 層を掘り込みそれぞれ壁・床としている。残存する壁高は東側で 70.4cm、西側で 31.4cm、南側で 87.8cm あり、それぞれ外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、中央部に 3号堀跡埋戻しの際の貼床が施される。縫まりは特に認められない。

〔柱穴〕pp8～pp9 の 2 個を検出した。柱穴の規模は径 25～37.5cm、深さ 29～35cm を測る。

5 号竪穴建物跡（第42図、写真図版30）

〔位置・検出状況〕調査区中央部北寄り、16～17 M～N グリッドに位置する。3号堀跡精査中に、堀プランを切る黒褐色シルトの円形プランとして検出した。2号平坦地の北側縁辺部に位置する。

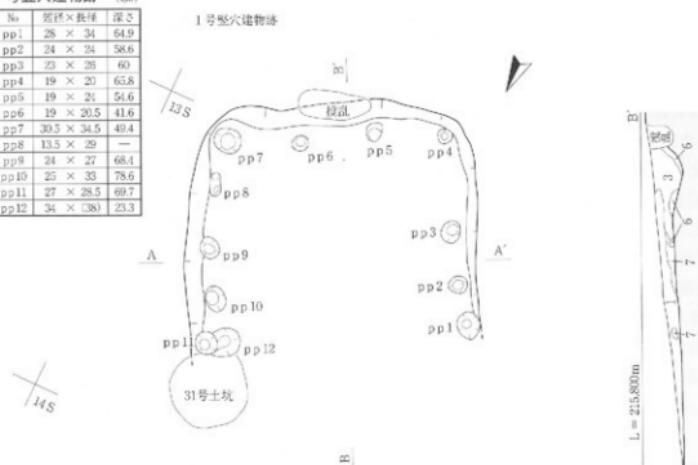
〔重複関係〕3号堀跡を人為的に埋戻した跡地に造られている。また、新規の造成により（新規の普請の際か、現代の切土造成によるものか不明）遺構の北西側が切られ、失われている。

〔規模・平面形〕東辺 4.95m、西辺 4.0m、南辺 3.73m、北辺 2.18m の方形を呈する。北辺と西辺の値

3. 中世の検出遺構

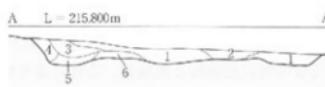
1号竪穴建物跡 (cm)

No.	直径×長径	深さ
pp1	28 × 34	64.9
pp2	24 × 24	58.6
pp3	23 × 25	60
pp4	19 × 20	65.8
pp5	19 × 21	54.6
pp6	19 × 20.5	41.6
pp7	30.5 × 34.5	49.4
pp8	13.5 × 29	—
pp9	24 × 27	68.4
pp10	25 × 33	78.6
pp11	27 × 28.5	69.7
pp12	34 × 38	23.3



1号竪穴建物跡 (A-A' B-B')

- 1 10YR 3/1 黒褐色シルトと10YR 3/3 始鶴色シルトの
混合土 粘性弱 しまり中
- 2 10YR 4/1 鶴色土と1層との混合土 粘性弱
しまり中
- 3 10YR 3/1 始鶴色シルトと10YR 4/4 墓色シルトの
混合土 粘性弱 しまり中 硬化バク1%以下
- 4 3層とV層の混合土 粘性弱 しまり中
- 5 10YR 3/1 始鶴色シルト 粘性・しまり共弱 V層ブロック2%
- 6 10YR 3/1 黑褐色シルトとV層ブロックの混合土
粘性弱 しまりやや弱
- 7 10YR 2/1 黑色シルト 粘性中 しまりやや弱



2号竪穴建物跡



2号竪穴建物跡 (cm)

No.	直径×長径	深さ
PP1	28 × 34	82
PP2	20 × 30	15.2
PP3	16 × 17.5	51.6
PP4	13 × 13	45.8

- 2号竪穴建物跡 (A-A')
- 1 10YR 4/3 細い黄褐色シルト 粘性・しまり共弱
 - 2 10YR 3/3 始鶴色シルト 粘性・しまり共弱 V層ブロック1%
程・白色バク1%以下
 - 3 10YR 4/2 始鶴色シルト 粘性・しまり共弱 V層ブロック2%

第40図 1・2号竪穴建物跡

は残存値である。

〔埋土・堆積状況〕 23層からなり、V・VI層地山ブロックを含む黒褐～灰黄褐色シルト主体で構成される。17層までは自然堆積と思われる。18～23層は本遺構の貼床埋土にあたり、3号堀跡の人为埋戻し層である。

〔壁・床面〕 上位は3号堀跡埋戻し土、下位はV・VI層を掘り込みそれぞれ壁・床としている。残存する壁高は東側で100cm、西側で42cm、南側で71cm、北側で26cmあり、外傾する。床面はほぼ平坦で、縮まりは特に認められない。また、pp11～12間に幅5～11cm、深さ1～8cmの縫溝が短く巡る。

〔柱穴〕 壁際に沿ってpp1～pp14の14個を検出した。柱穴の規模は径19～36cm、深さ25～65cm前後を示す。

6号堅穴建物跡（第43図、写真図版31）

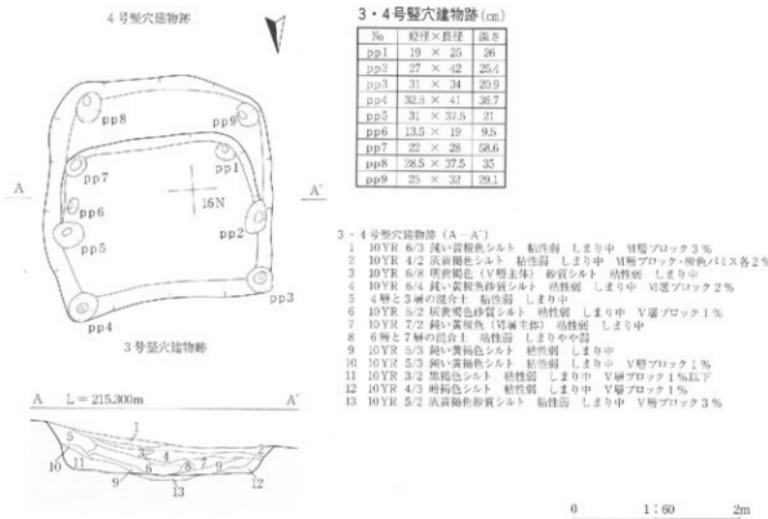
〔位置・検出状況〕 調査区北側、17～18Nグリッドに位置する。3号堀跡壁面精査時に、堅穴建物跡の西側壁面および壁溝を確認、遺構と認定したものである。4号平坦地の南東隅に位置する。

〔重複関係〕 東半部で3号堀跡と重複、これを切る。3号堀跡を人为的に埋戻した跡地に造られる。

〔規模・平面形〕 南辺2.82m、西辺3.4mの方形を呈する。西辺の値は残存値である。斜面下位にあたる北辺・および東辺は、遺構と認定する判断が遅れたために失ってしまった。

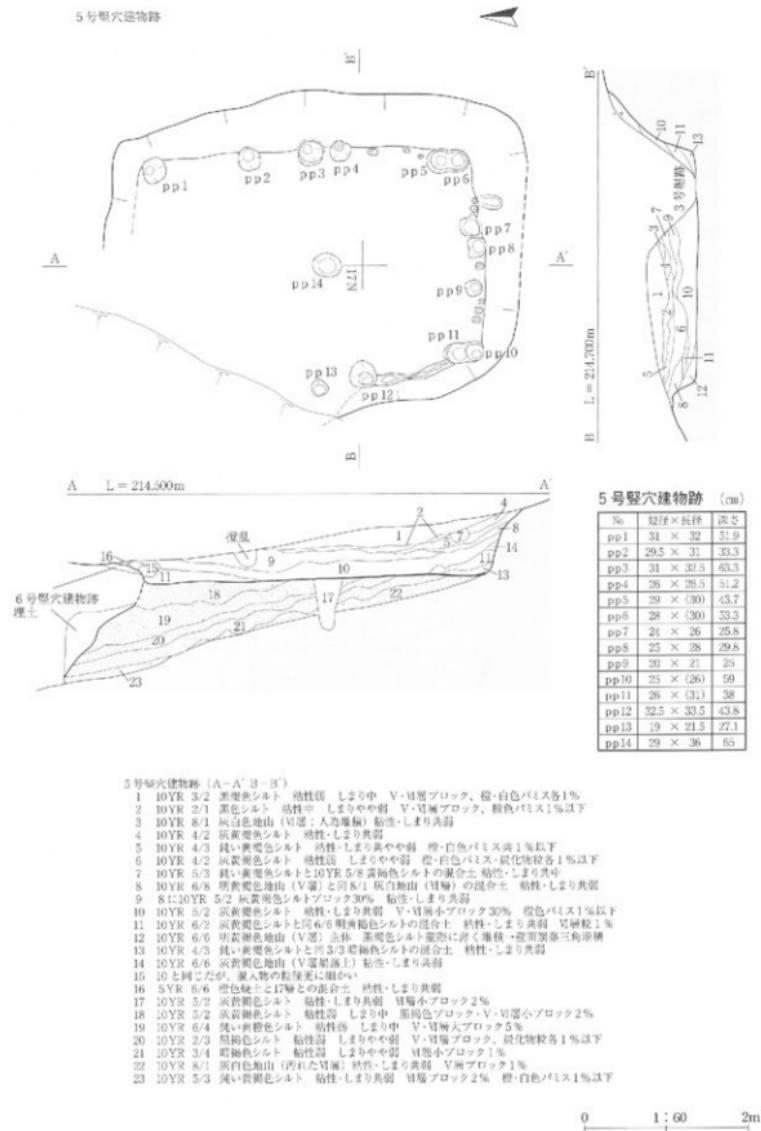
〔埋土・堆積状況〕 10層からなり、V・VI層地山ブロックを含む暗～黒褐色シルト主体で構成される。自然堆積と思われる。10層は遺構の貼床埋土にあたり、3号堀跡の人为埋戻し層である。

〔壁・床面〕 上位は3号堀跡埋戻し土、下位はV・VI層を掘り込み壁面を構築している。残存する壁高は東側で100cm、西側で36cmあり、外傾して立ち上がる。南・西側床面の壁際には幅8～21cm、深さ1.8～8cmの縫溝が巡る。



第41図 3・4号堅穴建物跡

3. 中世の検出遺構



第42図 5号堅穴建物跡

〔柱穴〕南・東側の床面堅際に相当する箇所を中心として pp1 ~ pp5 の5個を検出した。柱穴の規模は径6~15cm、深さ3.2~20cmを測る。堅溝中に設けられた小穴の可能性がある。

7号堅穴建物跡（第43図、写真図版32）

〔位置・検出状況〕調査区北側、18Qグリッドに位置する。IV層下位~V層上面で暗褐色土の広がりとして検出した。4号平坦地の北側縁辺部付近に位置する。

〔規模・平面形〕東辺2.65m、西辺2.17m、南辺2.76mの方形を呈する。東・西辺は残存値である。斜面下位にあたる北側は、壁を確認できていない。

〔埋土・堆積状況〕8層からなり、上位と下位で様相が異なる。上位はVI層地山ブロックを40~50%程度含む黄褐色シルトがレンズ状に堆積するもので、下位は明黄褐色シルトブロックを疊らに含む墨色土がフラットに堆積する。上位は自然堆積、下位は人為堆積の可能性があり、本来は上下別個の建物跡である可能性もある。

〔壁・床面〕V・VI層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で65cm、東側で54cm、西側で39.6cmあり、やや外傾して直線的に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、堅く締まる。斜面上位にあたる南側には幅9~20cm、深さ1.8~3.3cmの堅溝が廻る。北側では確認できなかった。

〔柱穴〕堅際に沿って pp1 ~ pp10 の10個を検出した。柱穴の規模は径9~27.5cm、深さ4.2~33.6cmを測る。

8号堅穴建物跡（第44図、写真図版33）

〔位置・検出状況〕調査区北側、17Qグリッドに位置する。IV層下位で暗褐色土の広がりとして検出した。4号平坦地の北側縁辺部に位置し、北西側は調査区域外にかかる。

〔重複関係〕北側において現代の切土造成が行われ、これにより切られる。

〔規模・平面形〕確認できた範囲で南東辺2.05m、南西辺1.02mを測る。ともに残存値である。平面形は検出範囲から方形基調を呈すると推測される。

〔埋土・堆積状況〕4層からなり、V・VI層地山土を少量含む暗~黒褐色シルトを主体とする。自然堆積と思われる。1・6層は表土・擾乱土である。

〔壁・床面〕V層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で40cm、西側で13.5cm、東側で7cmあり、やや外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、堅く締まる。

〔柱穴〕pp1 ~ pp5 の5個を検出した。柱穴の規模は径24~60cm、深さ22.9~71cmを測る。

9号堅穴建物跡（第44図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕調査区北側、17Rグリッドに位置する。IV層下位で暗褐色土の広がりとして検出した。4号平坦地の北側縁辺部に位置し、北西側は調査区域外にかかる。

〔規模・平面形〕東辺1.25m、西辺0.4m、南辺2.2mを測る。東・西辺は残存値である。平面形は検出範囲において方形を基調とする。

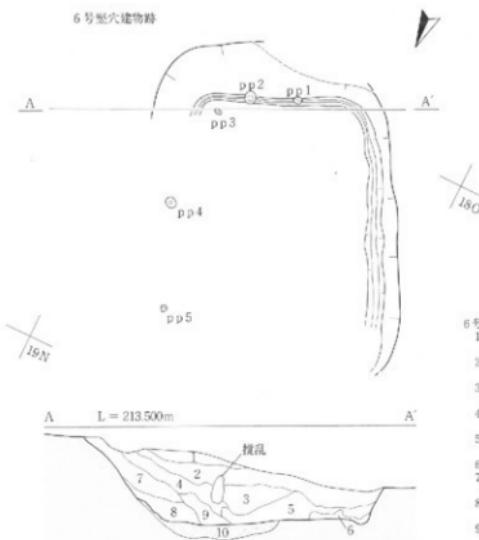
〔埋土・堆積状況〕4層からなり、地山ブロックを疊らに含む暗~黒褐色シルト主体で構成される。1層は表土・擾乱土である。

〔壁・床面〕V層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で52cm、東側で27cm、西側で42cmあり、直線的に外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、堅く締まる。

〔柱穴〕堅際に沿って pp1 ~ pp4 の4個を検出した。柱穴の規模は径14~19cm、深さ12.5~23.5cmを測る。

3. 中世の検出遺物

6号堅穴建物跡



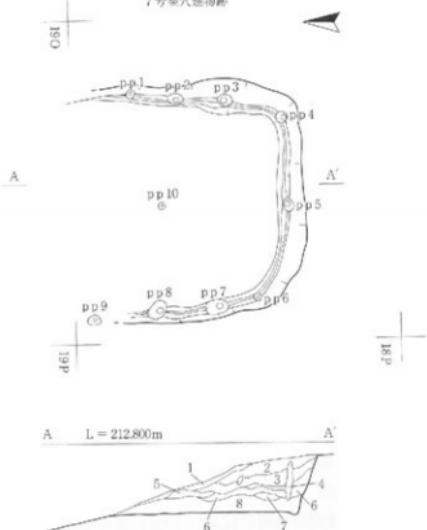
6号堅穴建物跡 (cm)

No	直径×長径	深さ
pp1	9.5 × 11	21
pp2	13.5 × 15	32
pp3	6 × 9	13.8
pp4	12.5 × 15	20
pp5	8 × 8.5	14.9

6号堅穴建物跡 (A-A')

- 1 10YR 3/3 淡褐色シルト 粘性弱 しまりやや強
V-V層小ブロック 2% 白色 バス各 1%
- 2 10YR 3/3 黑褐色シルト 粘性強 しまり中
V-V層小ブロック 2% 白色 バス 1%以下
- 3 10YR 4/3 黄褐色シルト 粘性・しまり共弱
V-V層小・帶大ブロック 5%
- 4 10YR 5/3 黄褐色シルト 粘性・しまり共弱
V-V層小ブロック 5%
- 5 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性・しまり強や弱
6 10YR 5/4 黄褐色シルト 粘性・しまり共強
7 10YR 6/8 深黒褐色 (V層主部) 粘性強 しまり中
M層ブロック 3%
8 10YR 5/2 深黒褐色 粘性・しまり共強
V-V層 2%
9 10YR 5/3 黄褐色シルトと切替ブロックの混合土
粘性や強 しまり強
10 10YR 3/3 黑褐色シルト 粘性・しまり共弱
(※本: 3号測量地の廃土)

7号堅穴建物跡



7号堅穴建物跡 (cm)

No	直径×長径	深さ
pp1	10.5 × 12	4.2
pp2	14 × 20	33.6
pp3	15.5 × 19	15.6
pp4	14 × 15	9.2
pp5	13 × 36.5	14.2
pp6	9 × 9	10.8
pp7	18.5 × 27.5	26.2
pp8	18 × 26.5	11.2
pp9	12 × 17	21.7
pp10	9 × 9	19

7号堅穴建物跡 (A-A')

- 1 7.5Y 3/3 淡褐色シルト 粘性やや強 しまり中
2 2.5Y 5/4 黑褐色シルト (60%) 帯入物として
10YR 3/1 黑褐色 4/3 黄褐色
6/8 白色バス 2.5Y 8/4 深黒褐色 (日層) を40%程度
含む
3 2回同質で、入物比30% 10YR 7/8 黄褐色砂質シルト
4 10YR 5/3 黑褐色シルト 粘性やや強 しまり弱
5 10YR 2/1 黑褐色シルト 粘性やや強 しまり中
6 10YR 2/1 黑褐色シルト (60%) 帯入物として 10YR 4/3
黄褐色 7/6 明黄褐色 シルトブロック40%程度含む
* 2~6は人為地盤層
7 10YR 6/6 明黄褐色 - 10YR 8/4 深黃褐色シルト
粘性・しまりやや強
8 10YR 2/1 黑褐色シルト 粘性・しまり共強
7層ブロック中に3%

第43図 6・7号堅穴建物跡

堅穴状遺構

切岸状遺構の裾部を中心として7棟が検出されている。内、2・3号平坦地に造られた堅穴状遺構はその後、繩張りの変更によって掘立柱建物跡や門跡?が造られており、これらより遅る時期の建物と考えられる。堅穴状遺構としたものは地面を方形に掘りくぼめて床とした建物跡のうち、便宜上、床面に規則的な柱配置を持たないものを扱っている。

1号堅穴状遺構（第45・46図、写真図版35）

【位置・検出状況】調査区南西側、3～6 U～Vグリッドに位置する。V層下位～VI層上面で暗褐色土の広がりとして検出した。3号平坦地南側、2号切岸状遺構の裾部に接するように位置する。西半部は繩張りが変更された際に切土され、残存しない。

【重複関係】南辺を2号堅穴状遺構と接するが、両者の新旧関係は不明である。また、西辺南側において1号門跡?掘削時の切土整地と見られる掘り込みによって切られる。

【規模・平面形】東辺12.55m、南辺1.97m、北辺3.32mを測る。南・北辺は残存値である。平面形は検出した範囲で長方形を呈する。

【埋土・堆積状況】5層からなり、V・VI層地山ブロックを疎らに含む暗褐色シルトを主体とする。1層は盛土整地層である。

【壁・床面】V層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は東側で74cmあり、緩く外傾する。床面はほぼ平坦で、特に継まりは認められない。斜面向上位にあたる南側には幅21～30cm、深さ14cm前後の壁溝が廻る。

【柱穴・ピット】pp1～pp14の柱穴14個と、P1のピット1基を検出した。柱穴の規模は径17.5～100cm、深さ22～64.6cm、ピットの規模は径68×71cm、深さ25.7cmを測る。

2号堅穴状遺構（第46図、写真図版35・36）

【位置・検出状況】調査区南西側、2～3 T～Uグリッドに位置する。1号堅穴状遺構の床面精査時に、南北へ連続する一連の平坦面として検出した。3号平坦地南側、2号切岸状遺構の裾部に接するように位置する。西半部は繩張りが変更された際に切土され、残存しない。

【重複関係】北辺を1号堅穴状遺構と接するが、両者の新旧関係は不明である。西辺南側において1号門跡?掘削時の切土整地と見られる掘り込みによって切られる。

【規模・平面形】東辺2.92m、南辺1.44m、北辺1.69mを測る。すべて残存値である。平面形は検出範囲で隅丸の長方形並調と推測される。

【埋土・堆積状況】5層からなり、V・VI層地山ブロックを含む暗褐色シルトを主体とする。1層は盛土整地層である。

【壁・床面】III層以下を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で76cmあり、緩やかに外傾する。床面はほぼ平坦で、特に継まりは認められない。

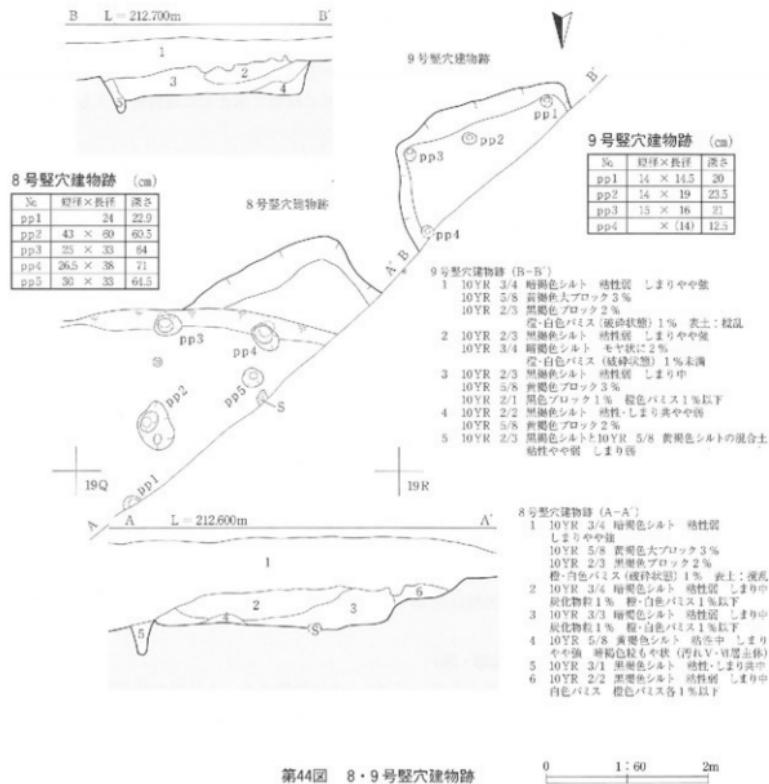
【柱穴】pp1～pp6の6個を検出した。柱穴の規模は径18～37cm、深さ12～46.6cmを測る。

3号堅穴状遺構（第47図、写真図版35・36）

【位置・検出状況】調査区西側、5～7 Vグリッドに位置する。VI層上面で暗褐色土の溝状プランとして検出した。3号平坦地のはば中央に位置する。

【重複関係】東辺南側において1号堅穴状遺構と重複し、これを切る。

3. 中世の検出遺構



〔規模・平面形〕検出した壁溝の範囲は残存値で 7.27m である。検出した時点で壁溝しか残存せず、建物自体の規模・平面形は不明である。

〔埋土・堆積状況〕暗褐色シルトを主体とするものである。

〔壁・床面〕V層を掘り込んでいる。床面は新規の普請（縄張り変更）の際に削平された可能性があり、殆ど残存しない。検出状況では東側に向かい微かな下り勾配となっている。斜面上位にあたる東側には幅 18~37cm、深さ 5~17cm の壁溝が廻る。

〔柱穴〕pp18 ~ pp20 の 3 個を検出した。柱穴の規模は径 19.5~69cm、深さ 3.6~43.1cm を測る。

4号堅穴状遺構（第47図、写真図版35・36）

〔位置・検出状況〕調査区西側、5~7 Vグリッドに位置する。VI層上面で暗褐色の溝状プランとして検出した。3号平坦地ほぼ中央に位置する。

〔重複関係〕東辺南側において 1号堅穴状遺構と重複し、これを切る。

〔規模・平面形〕検出した壁溝の範囲は残存値で7.22mである。検出した時点で壁溝しか残存せず、建物自体の規模・平面形は不明である。

〔埋土・堆積状況〕暗褐色シルトを主体とする。

〔壁・床面〕V層を掘り込んでいる。床面は新規の普請（繩張り変更）の際に削平された可能性があり、殆ど残存しない。検出状況では東側に向かい微かな下り勾配となっている。斜面上位にあたる東側には幅10~26cm、深さ3~11cmの壁溝が廻る。

〔柱穴〕床面プランに相当する範囲において、本遺構に伴う可能性のあるpp1~pp17の17個を検出した。柱穴の規模は径15~51cm、深さ4.1~56.2cmを測る。

5号竪穴状遺構（第48図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕調査区南側、5Pグリッドに位置する。1号切岸状遺構の盛上層掘削時に存在を確認した。2号平坦地南側、1号切岸状遺構の裾部に接するように位置する。

〔重複関係〕一部を除き、遺構の殆どが1号切岸状遺構の普請（繩張り変更）の際に切上され、失われている。

〔規模・平面形〕南東隅のみを検出したもので、東辺2.5m、南辺1.25mを測る。いずれも残存値である。平面形は検出範囲で方形基調を呈する。

〔埋土・堆積状況〕4層からなり、V・VI層地山ブロックを含む黒~灰黄褐色シルト主体で構成される1層に炭化状混入物を1%含む。

〔壁・床面〕IV層以下を掘り込み壁・床としている。床面検出した範囲ではほぼ平坦である。残存する壁高は南東側で61cmあり、直立気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、やや締まる。

〔柱穴〕壁際に沿ってpp1の1個を検出した。柱穴の規模は径43×46cm、深さ54cmを測る。

6号竪穴状遺構（第48図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕調査区北側、14Qグリッドに位置する。VI層上面で暗褐色のプランとして検出した。2号平坦地の北側縁辺部に位置する。

〔規模・平面形〕検出した範囲で東辺2.83m、南辺2.97mを測る。平面形は隅丸方形基調を呈すると推測される。北側斜面下位は現代の切土造成が加えられ、遺構の西~北側は失われている。

〔埋土・堆積状況〕6層からなり、V・VI層地山ブロックを含む黒褐色~鈍い明黄褐色シルトを主体とする。自然堆積と思われる。

〔壁・床面〕IV層以下を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は南側で130cmあり、やや外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦で、やや締まる。

〔柱穴〕調査範囲においては未検出である。

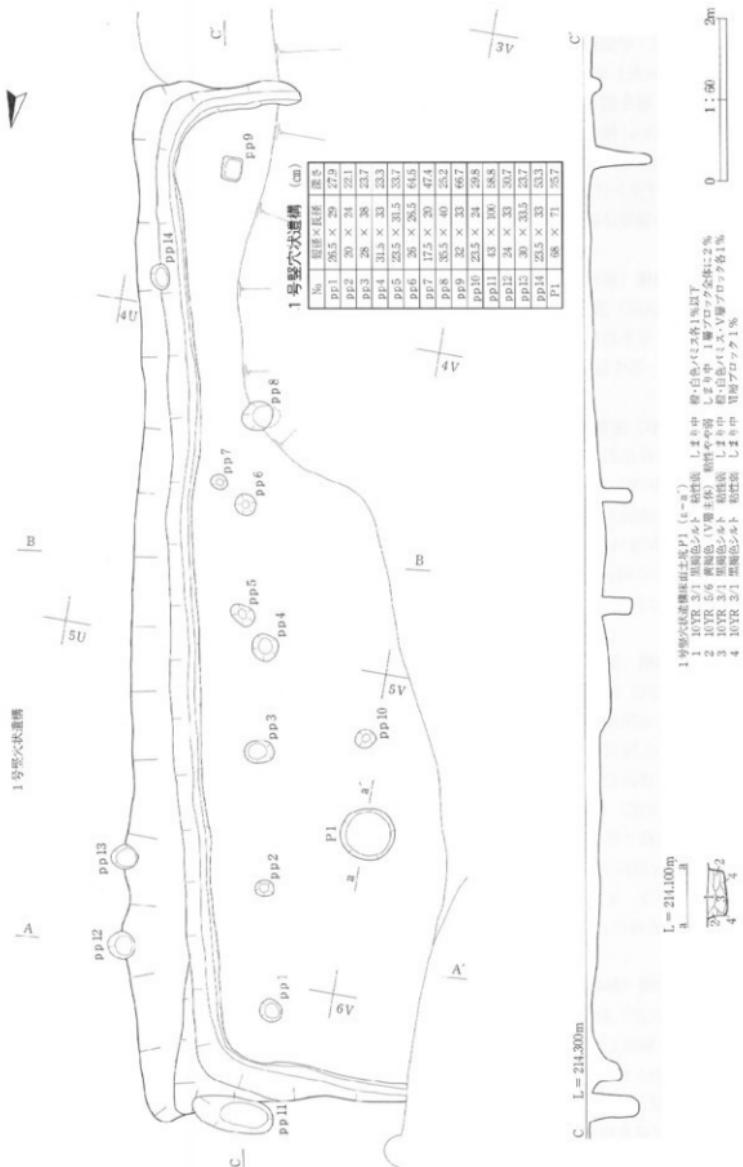
7号竪穴状遺構（第49図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕調査区北側、16~17R・Sグリッドに位置する。V層下位~VI層上面で暗褐色のプランとして検出した。4号平坦地の北側縁辺部に位置し、北西側は調査区域外にかかる。

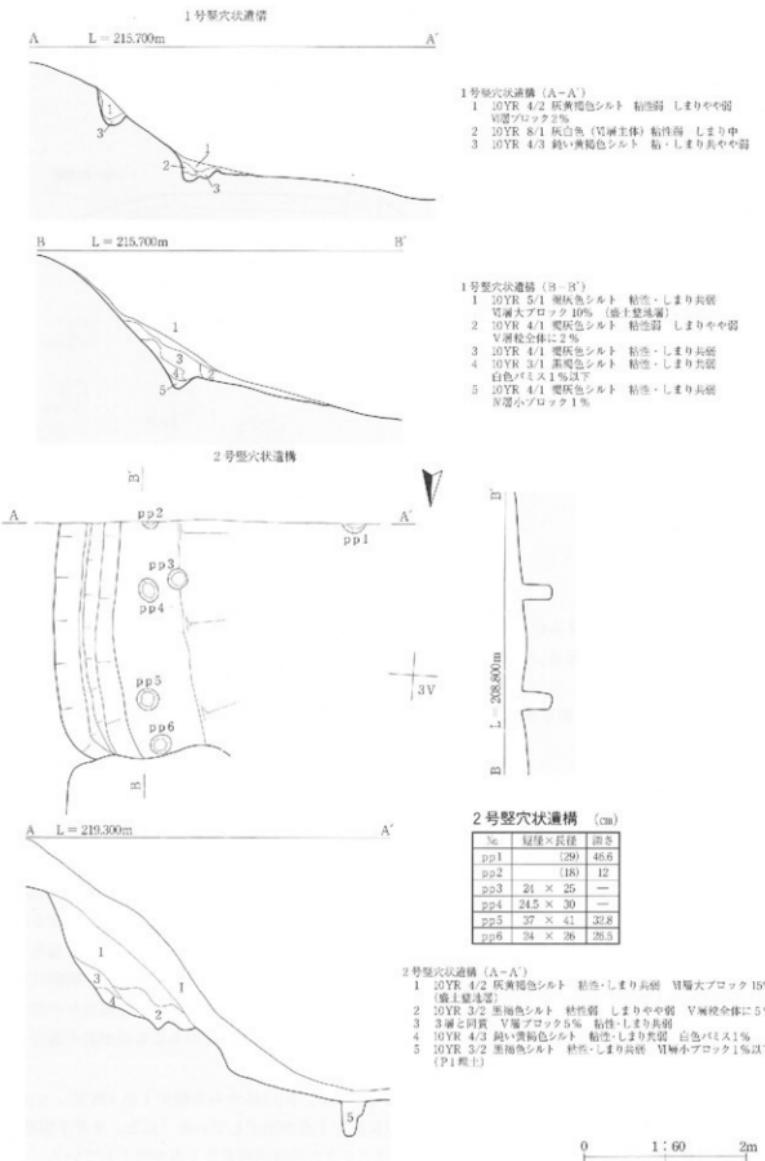
〔規模・平面形〕検出した範囲で東辺1.89m、南辺2.56mを測る。平面形は方形基調と推測される。

〔埋土・堆積状況〕2層からなり、黒褐色シルトを主体とする。1層は表土および擾乱土である。

〔壁・床面〕V層を掘り込み壁・床としている。壁は表土・擾乱土を除去した時点で既に失われており、辛うじて調査区際の断面で残存部が認められた。これによると南側で15cmあり、外傾して立ち上がる。



第45図 1号堅穴状遺構(1)



第46図 1号豎穴状遺構(2)・2号豎穴状遺構

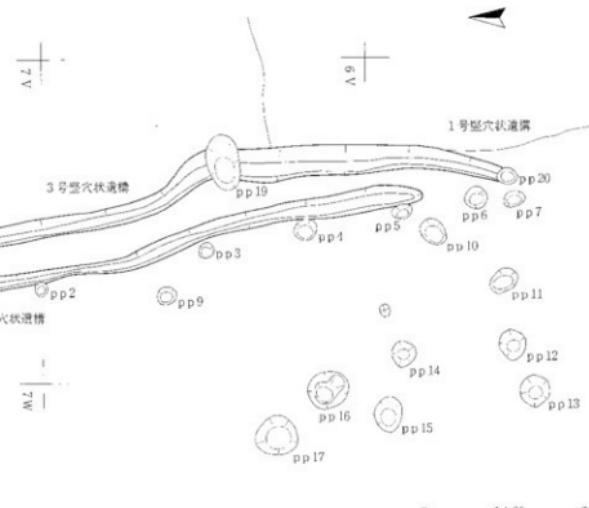
3. 中世の検出遺構

3・4号堅穴状遺構(cm)

No.	直径×長さ	径%
pp1	18 × 21	4.1
pp2	15 × 18	36.7
pp3	19 × 20	16.1
pp4	26 × 27.5	24.8
pp5	24.5 × 27	35.6
pp6	26.5 × 28.5	13.9
pp7	19.5 × 27.5	38.5
pp8	29 × 40	-
pp9	22 × 25	40.4
pp10	27 × 35.5	11.9
pp11	28 × 37.5	15.5
pp12	25 × 36	22.6
pp13	37.5 × 40	56.2
pp14	39.5 × 32	27.9

No.	直径×長さ	径%
pp15	35 × 43	41.3
pp16	42.5 × 45.5	50.1
pp17	51 × 51	51
pp18	23 × 3.5	3.6
pp19	41 × 69	43.1
pp20	39.5 × 25.5	16.5

柱穴 pp1 pp8



第47図 3・4号堅穴状遺構

0 1:60 2m

床面はほぼ平坦でやや縮まるが、貼床は認められない。斜面上位にあたる南側には幅10~24cm、深さ3~13cmの隙溝が2重に廻る。このことから、プランをほぼ同じくする別個の堅穴状遺構が重複している可能性もある。

〔柱穴〕 pp1 ~ pp3 の3個を検出した。柱穴の規模は径22.5~45cm、深さ14~28.5cmを測る。

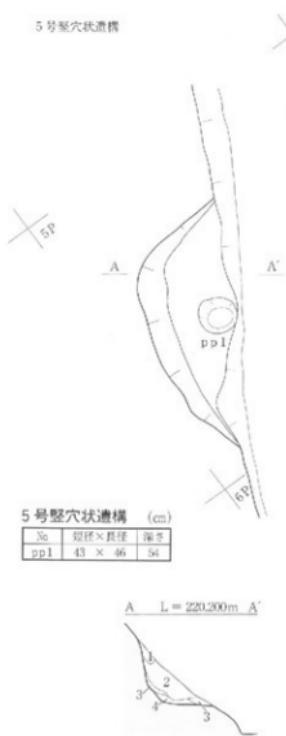
4. 時期不明の検出遺構

柱穴状小ピット群(第50~53図)

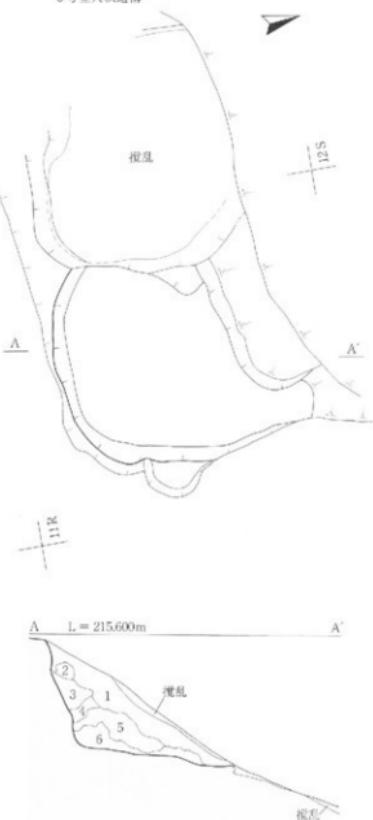
柱穴状ピット群は1~4号平地から合計595個が検出されている。個々のピットの計測値については、第3~7表を参照されたい。平面形は円形を基調とし、規模は径13~85cm、深さ4~113.6cmの幅におさまる。柱穴規模は立地条件による数値のばらつきが大きく、斜面下位のものが浅くなるが、同じ等高線付近の柱穴底面のレベルはほぼ近似する範囲に収まるようである。埋土は鈍い黄褐色~灰黃褐色、褐色シルト主体で構成され、層中にV・VI層ブロックが混入するものが多い。明確に建物跡を構成するような配置が確認できなかったため柱穴状ピット群に含めているが、柱当たりの確認できる柱穴も一部存在することから、本来は掘立柱建物跡を構成する可能性のあるものが若干数含まれると見られる。

〔出土遺物〕 各々の柱穴の帰属時期など詳細は不明であるが、pp146から古錢が1点(無文)、pp197から磁石が1点、pp205埋土から16世紀代の白磁反皿片1点が出土している(以上、2号平地)。また、pp65から近世磁器碗片1点、pp78から同じく近世磁器の碗皿片1点が出土している(以上、

5号堅穴状遺構



6号堅穴状遺構



5号堅穴状遺構 (A-A')

- 1 10YR 4/2 灰黄色シルト 粘性・しまり共弱 V-M層ブロック各2%
- 2 10YR 2/4 黄褐色シルト 粘性・しまり共弱 V-質層ブロック各1%
- 3 10YR 2/2 灰黄色シルト 粘性・しまり共弱 V層ブロック1%
- 4 10YR 4/3 細い黄褐色シルト 粘性・しまり共弱 V層ブロック3%
- 5 質層ブロック5%

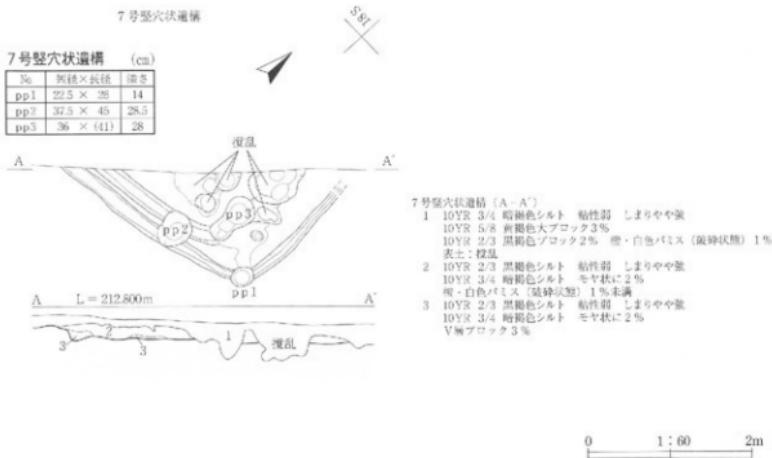
0 1:60 2m

6号堅穴状遺構 (A-A')

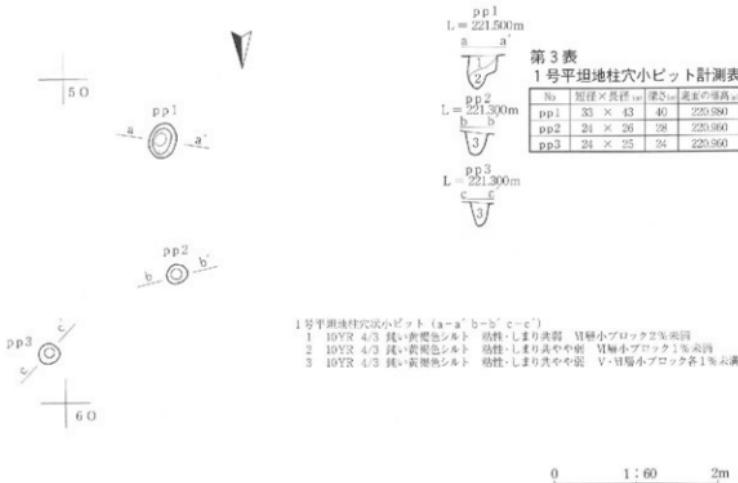
- 1 10YR 3/2 灰褐色シルト 粘性弱・しまりやや弱 V層ブロック・炭化物粒1%
- 2 10YR 6/4 黄褐色シルト (汚れV層崩落土) 粘性・しまり共弱
- 3 10YR 6/6 明るい褐色 (汚れV層崩落土) 粘性・しまり共弱
- 4 1号と2号の混合土 粘性・しまり共弱
- 5 10YR 6/8 明るい褐色 (汚れV層崩落土) 粘性・しまり共弱
- 6 10YR 7/4 細い黄褐色 (汚れV層崩落土) 粘性弱・しまり中

第48図 5・6号堅穴状遺構

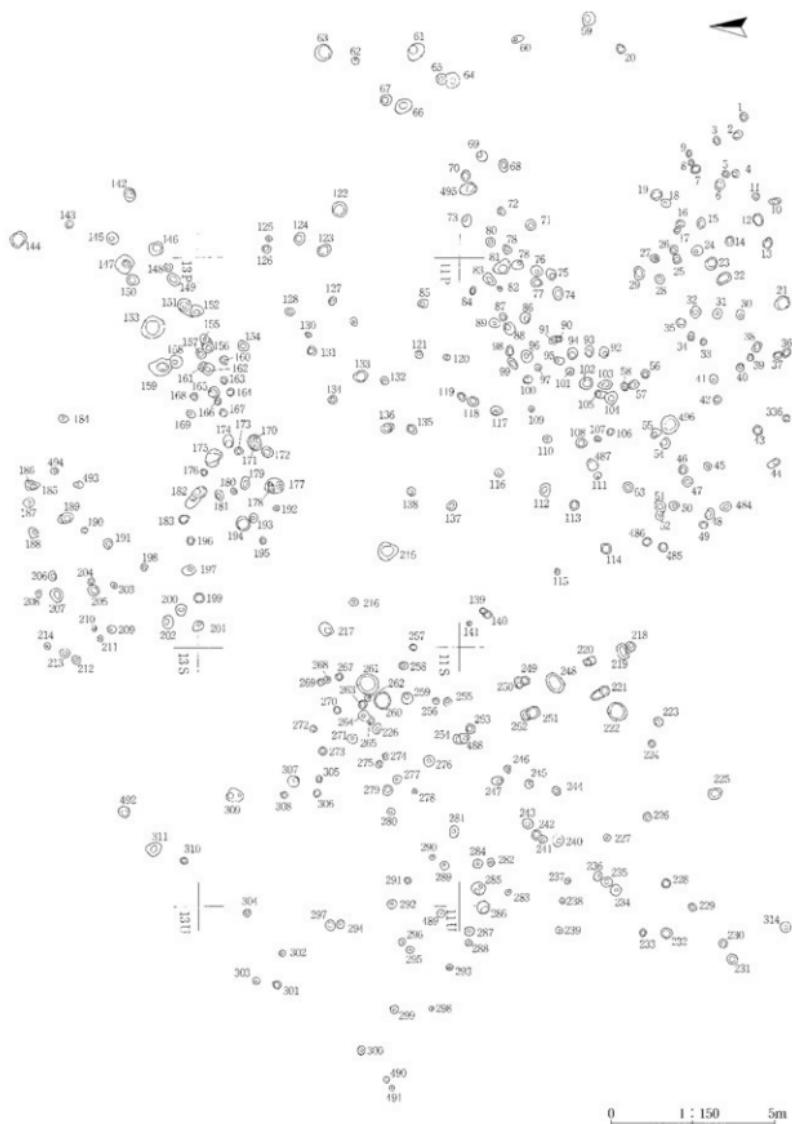
3. 中茎の検出遺構



第49図 7号堅穴状遺構



第50図 1号平坦地柱穴状小ビット

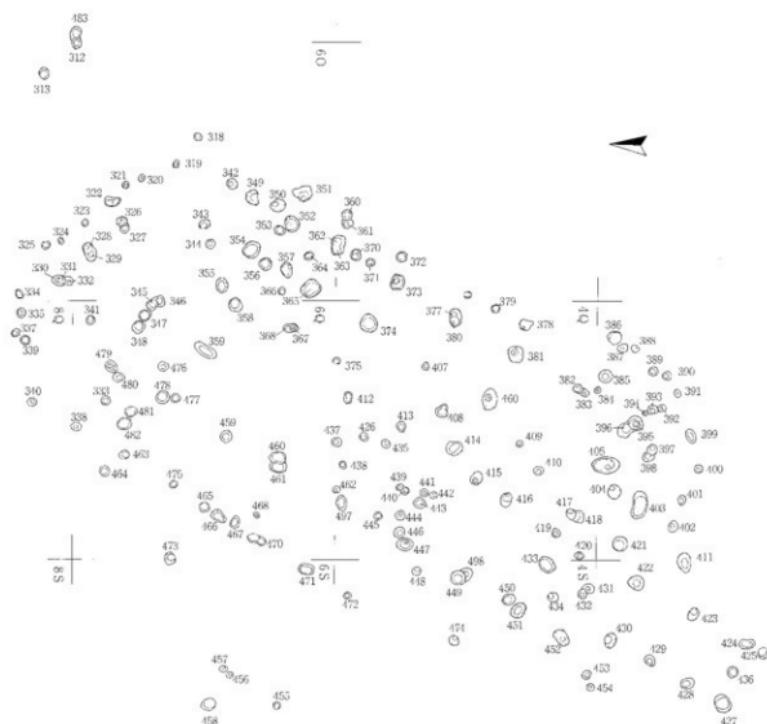


第51図 2号平坦地柱穴状小ビット(1)

第4表 2号平坦地柱穴小ビット計測表(1)

No.	直径×長径(cm)	底さ(cm)	底面の面積(m ²)	k ₀	算定×長径(cm)	深さ(cm)	底面の面積(cm ²)	No.	算定×底面(cm)	底さ(cm)	底面の面積(m ²)
1	14×29	38.1	218.070	84	17×94	8.4	217.342	167	26×25	48.6	215.948
2	23×30	-	-	85	26×30	34.3	216.910	168	23×23	35.3	215.991
3	21×24	29.7	218.075	86	32×33	69.5	216.814	169	24×30	44.3	215.886
4	25×27	17.8	218.167	87	25×27	22.3	217.232	170	23×23	39.4	215.681
5	21×26	12.2	218.206	88	35×37	56.7	216.889	171	25×26	87.6	215.569
6	30×35	9.2	218.274	89	30×35	16.3	217.288	172	28×37	42.4	216.007
7	25×30	34.8	217.930	90	21×30	-	-	173	25×36	69.7	215.660
8	17×19	10.6	218.170	91	23×27	63.4	216.834	174	33×41	70.1	215.678
9	19×23	10.3	218.185	92	30×30	31.6	217.280	175	40×36	130.0	215.229
10	15×35	-	-	93	31×31	21.5	217.360	176	22×24	37.6	215.976
11	22×24	-	-	94	30×34	45.5	217.065	177	25×28	33.0	215.101
12	31×35	9.1	218.200	95	21×30	19.6	217.284	178	31×36	60.0	215.759
13	27×30	18.4	218.090	96	36×36	49.6	216.954	179	26×40	46.7	215.886
14	25×29	-	-	97	21×22	23.2	217.216	180	18×20	21.6	216.089
15	24×38	12.0	218.038	98	25×35	14.7	217.282	181	27×30	36.6	215.875
16	23×24	13.8	217.962	99	33×39	13.1	217.342	182	29×40	165.4	215.125
17	19×21	28.0	217.790	100	25×29	15.3	217.278	183	25×32	41.2	215.726
18	27×31	12.9	217.996	101	21×24	21.6	217.272	184	22×30	19.5	216.972
19	24×36	17.6	217.952	102	27×41	48.1	217.694	185	22×31	-	-
20	28×28	26.4	217.991	103	41×42	-8.4	217.360	186	30×(36)	-	-
21	40×47	52.2	217.666	104	38×40	25.7	216.773	187	31×35	-	-
22	33×47	8.6	218.012	105	25×43	13.2	217.352	188	28×35	44.0	215.182
23	33×39	26.2	217.836	106	19×23	19.1	217.236	189	31×38	36.5	215.365
24	31×35	18.4	217.896	107	38×20	16.4	217.350	190	18×20	17.5	215.602
25	23×27	23.7	217.798	108	31×32	26.2	217.090	191	30×31	32.9	215.536
26	25×26	14.2	217.874	109	17×21	11.6	217.278	192	16×18	19.7	215.157
27	23×26	16.2	217.798	110	24×27	57.2	216.714	193	21×29	60.4	215.687
28	27×30	9.0	217.824	111	20×21	16.5	217.062	194	44×44	87.7	215.350
29	34×42	22.8	217.678	112	32×41	20.6	216.963	195	19×21	33.0	215.926
30	25×30	42.0	217.659	113	27×31	20.7	216.943	196	22×34	28.1	215.833
31	29×31	17.0	217.808	114	31×33	38.3	216.735	197	33×41	35.1	215.497
32	33×38	13.3	217.801	115	17×19	20.5	216.716	198	20×23	17.4	215.664
33	20×22	13.2	217.752	116	27×28	44.7	216.652	199	30×32	35.1	215.641
34	22×25	8.4	217.765	117	28×34	-	-	200	31×36	53.9	215.345
35	31×31	26.4	217.620	118	30×35	-	-	201	29×39	35.1	215.578
36	21×30	23.4	217.840	119	21×27	-	-	202	31×42	41.0	215.431
37	24×25	23.4	217.790	120	20×22	15.4	217.038	203	18×(24)	12.8	215.606
38	21×30	22.0	217.804	121	25×25	24.0	216.885	204	19×22	16.4	215.546
39	20×20	23.0	217.746	122	45×49	33.4	216.832	205	32×35	75.3	214.948
40	24×26	29.8	217.650	123	36×46	21.6	216.846	206	27×39	27.3	215.365
41	25×32	21.6	217.624	124	34×39	16.7	216.864	207	37×46	29.2	215.330
42	25×26	16.6	217.578	125	17×21	15.9	216.765	208	20×22	13.7	215.395
43	31×39	36.5	217.455	126	27×28	22.1	216.673	209	24×27	15.2	215.516
44	22×40	15.9	217.606	127	23×26	23.7	216.764	210	16×19	3.4	215.347
45	25×27	29.7	217.278	128	25×30	25.6	216.570	211	18×20	57.4	215.038
46	29×31	87.3	216.882	129	17×20	36.3	216.596	212	25×27	43.0	215.125
47	30×32	35.1	217.195	130	18×20	11.1	216.759	213	26×31	21.0	215.318
48	28×35	43.4	217.024	131	29×25	39.6	216.410	214	17×20	10.2	215.380
49	25×26	40.7	217.012	132	22×25	29.5	216.662	215	53×69	63.2	215.910
50	32×32	29.6	216.918	133	30×35	15.5	216.994	216	25×27	19.6	215.528
51	32×32	30.7	217.085	134	24×24	26.6	216.308	217	44×47	16.1	216.004
52	26×28	25.0	216.994	135	25×34	18.1	216.815	218	21×35	77.7	215.665
53	31×32	47.4	216.901	136	28×40	44.6	216.496	219	29×38	29.8	215.491
54	29×31	55.0	217.044	137	27×32	21.2	216.688	220	24×25	59.0	215.026
55	24×35	12.8	217.354	138	26×26	35.8	216.430	221	27×28	63.4	215.947
56	23×25	30.6	217.342	139	20×23	29.0	216.305	222	56×28	68.4	215.201
57	26×30	63.4	216.974	140	24×26	31.1	216.494	223	26×28	31.3	216.039
58	22×25	18.6	217.356	141	13×15	10.3	216.413	224	22×23	10.9	216.296
59	40×45	25.0	216.994	142	25×49	69.9	217.262	225	33×43	30.2	215.699
60	23×34	47.8	217.497	143	22×26	36.7	217.182	226	26×26	29.9	215.665
61	45×60	46.6	217.132	144	42×48	35.8	216.867	227	30×23	58.3	215.258
62	22×25	35.5	217.024	145	30×26	69.6	217.078	228	35×26	41.2	215.170
63	51×55	47.4	216.868	146	38×43	65.8	217.221	229	21×24	39.0	215.009
64	41×46	112.0	216.616	147	40×36	113.6	216.536	230	26×26	24.0	215.040
65	32×33	67.1	216.935	148	25×26	45.7	217.421	231	29×30	24.0	215.035
66	43×57	70.3	216.842	149	34×43	72.0	217.162	232	34×35	45.0	215.640
67	32×35	69.6	216.768	150	34×36	91.2	216.836	233	21×25	9.0	215.110
68	22×38	37.1	217.165	151	30×32	75.2	217.174	234	35×36	43.0	215.105
69	33×33	89.4	216.872	152	39×42	39.0	217.495	235	31×36	34.0	215.270
70	28×31	35.5	217.065	153	65×75	106.4	216.745	236	27×31	41.3	215.170
71	30×31	45.1	217.205	154	31×34	71.3	216.885	237	18×19	11.5	215.425
72	22×28	36.3	217.235	155	28×30	102.9	215.505	238	19×20	11.5	215.285
73	32×33	-	-	156	32×32	79.0	215.715	239	23×24	11.0	215.110
74	30×40	78.2	216.852	157	26×35	50.6	215.990	240	36×38	34.2	215.369
75	32×35	31.7	217.318	158	30×40	57.1	215.821	241	26×25	42.8	215.265
76	34×37	44.7	217.165	159	51×70	83.6	215.374	242	27×34	47.6	215.206
77	32×33	17.8	217.418	160	25×27	29.0	216.250	243	32×32	65.7	215.118
78	30×33	42.5	217.169	161	37×30	69.0	215.748	244	21×29	74.2	215.130
79	26×31	15.4	217.434	162	31×36	72.5	215.760	245	23×25	36.8	215.580
80	28×30	44.1	217.109	163	21×22	43.9	216.039	246	18×24	44.1	215.545
81	69×67	72.9	216.806	164	24×24	69.4	215.765	247	26×35	39.0	215.290
82	15×17	9.0	217.396	165	33×35	70.9	215.753	248	46×65	22.2	215.215
83	31×41	33.0	217.142	166	21×25	30.8	216.147	249	24×28	19.3	215.172

*括弧の()は修正値を表す



第5表 3号平坦地柱穴状小ピット計測表

No.	直径×長径 (mm)	面積 (mm ²)
1	48 × 56	41.8 212.681
2	38.5 × 47	44.5 212.728
3	20 × 23	31.1 213.093
4	61 × 80	67.2 212.900
5	57 × 76	79.5 212.528

◎ 315

◎ 316

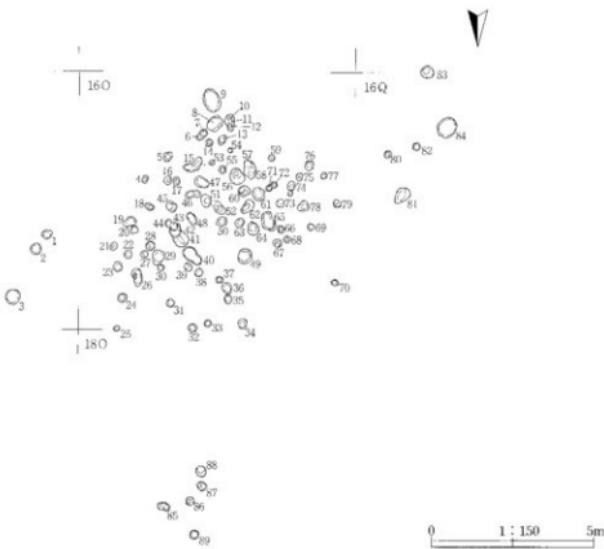
◎ 317

0 1:150 5m

第6表 2号平坦地柱穴小ビット計測表(2)

⑥ 幅×長さ(cm)	深さ(cm)	底部の厚さ(m)	⑦ 幅×長さ(cm)	深さ(cm)	底部の厚さ(m)	⑧ 幅×長さ(cm)	深さ(cm)	底部の厚さ(m)
250 21×33	33.0	215.938	303 27×29	19.5	217.700	416 34×44	93.7	217.252
251 36×40	43.8	215.786	334 21×27	5.4	217.996	417 29×33	-	-
252 34×(38)	35.4	215.829	335 29×31	25.0	217.716	418 38×45	-	-
253 26×28	49.8	215.629	336 18×20	9.4	217.800	419 36×30	44.4	217.662
254 (33)×42	28.3	215.761	337 23×28	15.4	217.786	420 21×26	35.6	217.740
255 (25)×26	29.0	215.890	338 27×32	45.8	217.336	421 46×46	67.7	217.582
256 21×23	-	-	339 28×30	30.4	217.646	422 44×33	77.9	217.252
257 20×23	34.7	215.978	340 23×26	52.2	217.226	423 29×43	64.2	217.206
258 20×27	57.5	215.665	341 26×29	53.5	217.380	424 29×48	62.8	217.260
259 30×40	70.2	215.134	342 31×35	61.4	217.886	425 31×37	68.1	217.162
260 51×53	22.0	215.216	343 34×35	50.1	217.710	426 31×36	54.6	217.276
261 61×67	20.1	215.932	344 27×28	36.2	217.010	427 50×69	45.5	217.162
262 19×28	39.8	215.798	345 31×35	31.4	217.600	428 33×43	50.0	217.116
263 26×27	41.5	215.505	346 34×35	30.1	217.460	429 39×35	80.4	217.026
264 30×(35)	64.2	215.330	347 36×45	27.6	217.826	430 35×49	69.4	217.314
265 24×(28)	46.7	215.468	348 36×41	36.5	217.552	431 28×39	24.5	217.774
266 23×29	23.5	215.700	349 36×49	27.3	217.186	432 26×32	43.7	217.528
267 24×25	47.5	215.955	350 39×46	51.4	217.905	433 41×57	64.2	217.396
268 20×24	48.7	215.568	351 26×30	48.3	217.987	434 29×33	58.0	217.402
269 23×23	35.1	215.826	352 44×50	50.6	217.944	435 25×30	25.3	218.029
270 22×23	27.7	215.843	353 29×34	39.7	218.118	436 26×28	30.0	217.982
271 28×31	31.0	215.515	354 47×53	67.9	217.719	437 30×31	35.0	217.856
272 19×23	13.5	215.695	355 36×46	43.1	217.866	438 21×25	30.5	217.947
273 25×27	27.2	215.488	356 38×39	43.1	217.948	439 30×23	1.2	218.014
274 18×23	44.3	215.362	357 33×50	44.2	217.968	440 25×27	20.4	217.985
275 20×24	25.5	215.490	358 42×43	28.8	218.012	441 23×25	58.8	217.780
276 30×35	32.0	215.588	359 34×78	35.6	217.796	442 23×26	63.3	217.562
277 25×30	4.4	215.716	360 32×32	29.1	218.245	443 35×38	22.9	217.908
278 13×16	34.0	215.400	361 (34)×35	46.4	218.030	444 30×32	40.6	217.702
279 31×32	54.0	215.162	362 (41)×42	47.2	218.006	445 21×23	20.4	217.868
280 24×25	40.0	215.249	363 (36)×39	47.4	218.006	446 37×38	65.6	217.416
281 25×37	26.7	215.366	364 23×32	26.5	218.170	447 39×52	20.4	217.281
282 20×24	36.5	215.165	365 35×60	52.3	217.880	448 25×28	47.9	217.356
283 18×20	13.1	215.263	366 23×36	15.1	218.234	449 48×48	63.5	217.223
284 25×29	22.0	215.584	367 30×32	61.1	217.748	450 41×46	-	-
285 36×43	41.0	214.574	368 26×30	23.8	218.072	451 28×50	36.6	217.566
286 37×39	38.8	211.886	369 (20)×25	29.0	218.202	452 35×55	50.5	217.429
287 27×29	19.3	214.965	370 (27)×30	32.3	218.165	453 35×30	70.6	217.090
288 20×21	10.0	215.010	371 22×27	40.3	218.077	454 22×36	75.7	216.938
289 26×26	46.8	215.010	372 32×36	30.8	218.236	455 21×23	16.7	217.615
290 18×19	15.9	215.348	373 40×48	72.9	217.746	456 21×23	65.6	217.096
291 21×21	10.0	215.289	374 50×55	50.3	217.932	457 22×28	66.0	217.115
292 26×27	45.9	214.827	375 23×24	27.7	218.085	458 38×45	42.7	216.945
293 18×18	7.1	214.904	376 22×26	25.6	218.265	459 36×38	24.4	217.172
294 23×27	29.1	214.967	377 24×28	10.3	218.112	460 38×52	33.3	217.688
295 21×21	20.3	214.857	378 32×34	32.1	218.275	461 (31)×54	17.0	217.264
296 21×25	29.4	214.930	379 35×37	-	-	462 25×27	37.5	217.567
297 30×32	24.3	214.960	380 27×27	49.2	217.982	463 29×33	96.6	217.446
298 14×17	11.2	214.706	381 45×55	51.4	217.968	464 34×32	28.1	217.416
299 25×26	23.0	214.694	382 29×36	52.7	217.805	465 7×32	22.9	217.536
300 21×28	27.8	214.427	383 24×31	62.6	217.836	466 25×32	22.9	217.436
301 25×35	23.7	215.549	384 29×30	12.8	218.216	467 25×29	58.1	217.511
302 17×19	18.2	214.835	385 40×48	42.6	218.101	468 16×18	7.8	217.668
303 22×23	11.3	214.797	386 40×43	54.7	218.018	469 28×42	25.1	217.374
304 23×24	18.0	214.970	387 25×31	45.6	218.129	470 27×30	18.5	217.487
305 20×23	2.4	215.644	388 22×29	21.5	218.267	471 34×41	20.9	217.331
306 21×23	44.2	215.148	389 28×28	34.6	218.276	472 20×20	19.0	217.214
307 35×38	43.6	215.229	390 26×28	55.6	218.078	473 33×39	39.7	217.070
308 20×22	24.8	215.322	391 19×24	29.1	218.224	474 31×34	83.3	215.499
309 40×53	33.7	215.193	392 22×26	32.4	218.222	475 21×24	13.9	217.519
310 17×25	45.0	214.280	393 29×31	51.7	217.989	476 29×30	30.3	217.791
311 40×46	20.0	211.000	394 17×18	46.0	218.018	477 29×29	14.0	217.696
312 19×36	50.1	218.165	395 23×49	75.2	217.740	478 40×42	63.5	217.380
313 29×37	-	-	396 62×(57)	40.4	218.004	479 32×41	20.0	217.220
314 32×33	23.0	215.170	397 32×46	46.9	217.956	480 27×36	25.9	217.697
315 27×28	18.5	214.425	398 30×36	22.7	218.177	481 32×33	39.3	217.335
316 23×23	18.0	214.175	399 28×45	59.8	217.902	482 38×42	17.1	217.704
317 21×22	31.0	213.780	400 27×28	45.1	217.988	483 36×(50)	56.3	218.283
318 22×35	-	-	401 27×31	42.8	217.858	484 28×34	19.1	217.309
319 18×22	11.9	218.360	402 31×37	52.4	217.684	485 26×28	34.2	216.927
320 20×24	17.6	218.244	403 43×85	44.6	217.844	486 23×27	31.3	216.935
321 22×25	24.9	218.160	404 41×47	96.7	217.327	487 34×38	61.0	216.626
322 32×50	-	-	405 58×81	75.2	217.604	488 28×31	36.1	215.718
323 19×22	14.6	218.170	406 49×69	69.5	217.815	489 25×23	24.2	215.027
324 19×22	22.9	218.035	407 28×24	18.0	218.276	490 17×21	10.6	216.450
325 23×28	30.0	217.939	408 30×41	12.6	218.345	491 16×16	31.2	214.413
326 30×34	37.4	217.960	409 23×24	17.5	218.175	492 31×39	72.6	216.356
327 28×32	16.6	216.585	410 28×30	56.4	217.688	493 20×25	23.9	216.906
328 33×35	79.0	217.480	411 39×63	48.0	217.646	494 22×23	22.8	216.890
329 34×43	39.5	217.865	412 24×36	21.0	218.165	495 41×56	66.9	216.940
330 27×35	-	-	413 30×33	26.1	218.117	496 30×60	20.3	217.292
331 23×25	54.9	217.561	414 46×51	31.3	218.015	497 37×51	61.0	217.232
332 29×(29)	49.2	217.668	415 32×43	31.8	217.964	498 37×(41)	46.0	217.400

*表中の()は複数個を表す

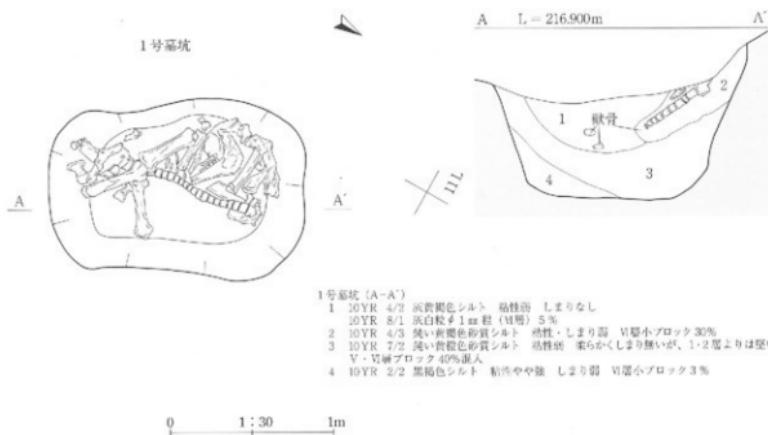


第53図 4号平坦地柱穴状小ピット

第7表 4号平坦地柱穴状小ピット計測表

番号	直径×長径(cm)	深さ(cm)	底面の横高(cm)	番号	直径×長径(cm)	深さ(cm)	底面の横高(cm)
1	25×31	11.0	212.700	31	24×25	11.0	212.700
2	34×35	19.5	212.690	32	25×28	24.5	212.470
3	44×45	17.0	212.625	33	19×21	6.0	212.650
4	16×23	12.0	212.535	34	26×30	21.0	212.500
5	24×28	15.0	212.430	35	23×29	11.5	212.635
6	18×(26)	17.5	212.720	36	29×35	23.0	212.370
7	22×(25)	20.5	212.690	37	20×21	4.0	212.810
8	40×50	18.5	212.685	38	23×25	14.0	212.745
9	51×73	23.0	212.850	39	22×28	44.0	212.395
10	33×(31)	18.5	212.755	40	40×65	12.5	212.260
11	33×(46)	27.0	212.670	41	43×(36)	19.5	212.605
12	20×(30)	23.0	212.710	42	35×45	19.0	212.610
13	23×34	20.0	212.495	43	(22)×26	30.0	212.300
14	22×25	9.0	212.390	44	22×26	12.5	212.395
15	24×53	15.0	212.510	45	26×35	32.5	212.350
16	25×25	14.0	212.540	46	22×(30)	21.0	212.620
17	19×28	17.0	212.510	47	21×(26)	27.0	212.450
18	19×30	25.5	212.380	48	21×42	27.5	212.590
19	32×37	30.0	212.255	49	16×46	49.5	212.370
20	22×23	47.0	212.335	50	25×30	39.5	212.470
21	23×24	31.0	212.490	51	32×40	40.0	212.500
22	23×26	35.5	212.540	52	26×40	36.0	212.530
23	25×33	7.5	212.720	53	14×17	8.0	212.580
24	29×29	39.5	212.400	54	15×16	12.5	212.570
25	18×19	4.0	212.685	55	23×23	17.0	212.495
26	28×56	35.5	212.480	56	41×52	32.5	212.340
27	23×23	43.0	212.400	57	30×(10)	17.0	212.390
28	29×29	48.0	212.320	58	(28)×40	45.5	212.435
29	36×46	40.0	212.420	59	19×21	7.0	212.300
30	21×21	3.0	212.800	60	34×38	45.0	212.460

*表中の()は測定値を表す



第54図 1号墓坑（獸骨出土）

4号平坦地）。このことから一部は中世後期に属する可能性があるものの、近世以降のものまで混在する状況を示す。

1号墓坑（第54図、写真図版37）

獸骨が出土した墓坑は、調査区中央部の2号堀跡西側斜面から1基検出された。

〔位置・重複関係〕 調査区中央部、10Kグリッドに位置する。検出面はVI層でV・VI層地山ブロックを多量に含む暗褐色土の隅丸方形プランとして確認した。

〔規模・形状〕 開口部径 110×157cm、底部径 73×98の隅丸方形基調を呈する。断面形は逆台形状で、底面から外傾して立ち上がる。深さは最深部で93cmを測る。

〔埋土〕 4層に大別される。暗褐色土主体で構成されるが、埋土全体にV・VI層の地山ブロックを多量に含んでいる。全体的に搅乱土で、人為堆積である。

〔遺物・時期〕 埋土中位から下位にかけて頭部を北側、背を西側に向け、脚部を東側に折り疊んだ状態の獸骨が1体分出土した。歯の形状から馬であると推測される。このほか供伴遺物は出土しておらず時期など詳細は不明であるが、獸骨の残存状態が良好であることから、館の造営時期よりも新しいものであると推測される。

(丸山直美)

V. 出 土 遺 物

今回の調査による出土遺物には、縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品・石器・鉄製品・錢貨・動物遺存体がある。いずれも量は少なく、総量は大コンテナ（40×30×30cm）でおよそ3箱分である。以下、種類ごとに概観する。

1. 縄 文 土 器（第56図、写真図版38：1～15）

縄文土器は大コンテナ1箱分の量が出土しており15点を掲載した。いずれも細片で、図示できたのは内9点である。ほとんどは遺構外からの出土で、2号平坦地盛土中、1号切岸状遺構、1号土壙構築上中からの出土のほか、主に調査区南西側にまとまりがみられる。器種は浅鉢、台付鉢、鉢、深鉢、ミニチュア形？土器で、器形が判明するものは無い。1～2は1号炉跡埋土上位から出土した。1は鉢形土器とみられる体部破片、2は深鉢の体部片で、共にL R縄文が施文される。14号土坑からは2点が出土した。3は台付鉢で、口縁部に平行沈線を持ち、沈線間に短沈線による刻目を持つ。4は深鉢で口縁部文様体に二重連弧文が巡る。頸部に7本の平行沈線+沈線間の刻目を持つ。5は浅鉢の口縁部片で、体部文様帶に雲形文状の曲線的な磨消縄文が施される。口唇部には平行沈線と半哉竹管状工具による刺突穴が巡る。6は鉢形土器の口縁部片で、口縁部に2条の平行沈線を持つ。体部にはL R単節斜縄文が横位施文され、作りは丁寧である。7は台付鉢の脚部片である。8は鉢の体部片である。これらは文様の特徴などから概ね晩期（大洞B C式期）に相当するものと思われる。9～14は小片であるため、時期の特定が困難であるが、これらの土器に伴う粗製土器と考えられる。

2. 土師器・須恵器（第56・57図、写真図版38・39：16～26）

調査区全域から小コンテナ（40×30×10cm）およそ0.5箱分の量が出土しており、11点を掲載した。16は1号竖穴住居跡のカマド相当部から出土した土師器片である。製作に際してはロクロが使用されており、内面はミガキ+黒色処理される。底部切り離し技法は静止糸切りによる。17～19は土師器長胴壺の体部片である。外面調整はナデ～ケズリ、内面はナデ調整される。19は底部に木葉痕を持つ。20は小形壺である。外面調整はケズリ後一部ミガキ、内面はミガキ+黒色処理される。21～23は土師器の長胴壺、体部外面調整はナデ（一部ケズリ）、内面調整はナデ調整される。24～26は須恵器の大甕である。

3. 陶 磁 器（第57図、写真図版39：27～33）

調査区の西側を中心に小コンテナ（40×30×10cm）およそ0.5箱分の量が出土しており、7点を掲載した。27は2号平坦地のpp205から出土した中国産の白磁反皿である。28は4号平坦地のpp65から出土した染め付け碗である。体部には二重織み口文が施される。30～31は灰釉皿で、30は大窯I期（16世紀前半代）に比定される特徴を持つ。32は18世紀代の肥前産の鉢、33は19世紀以降の東北産の描鉢である。

4. 土 製 品（第57図、写真図版39：34～35）

土製品は2点が出土し、全て掲載した。34は調査区中央部から出土した羽口の小片である。35は調査区東側から出土した陶質の碁石状土製品である。

5. 石 器・石 製 品（第58図、写真図版39・40：36～43）

石器・石製品は8点出土し、全て掲載した。36～41は館の時期に伴うものと考えられる。42は2号炉跡埋土下位から出土した硯未成品？である。43は調査区中央部西寄り、Ⅲ層から出土したスクレイバーである。39・40は調査区中央部～南西側の1号切岸状遺構Ⅰ層中より出土した、茶臼（上・下臼）

片である。

〔茶臼について〕

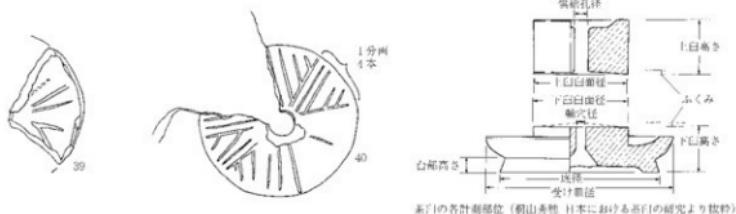
調査区中央部～南西側の1号切岸状遺構I層中より、茶臼（上・下臼）片が各1点出土している（39・40）。残存部は上臼で1/4程度、下臼で5/6程度で全体の形状は不明であるが、残存部位の形態から茶臼と判断できるものである。本遺跡出土資料の特徴を以下にまとめる。

上臼（No 39）：①中心が供給口となっており、孔が下方まで貫通する。②引き孔痕跡が認められる。

下臼（No 40）：①臼面の主溝が8分画となる。②主溝・副溝共に外縁のエッヂまで到達せず、外周平滑面を持つ。③受け皿を持つ。

〔石質〕 奥羽山系の安山岩を素材とする 〔主溝を除く副溝の数〕 4本で構成される

当資料の臼面は上下共に摩滅しており実用品と見られるが、器面が粗く、副溝の木数・ピッチの間隔が疎である。主溝を除いた副溝の木数については、明確に確認できるところで4本あるものの、分画毎のピッチにはばつきが認められる。



第55図 茶臼の各計測部位

6. 鉄製品（第59図、写真図版40・41：44～49）

鉄製品は6点出土し、全て掲載した。44～46は1号堅穴状遺構から出土した。44は刀子である。45は形態不明の鉄製品である。46は鉄滓である。47～48は2号切岸状遺構裾部付近から出土した。47は棒状鉄製品で、両端を欠損する。49は2号平坦地pp495から出土した形態不明の鉄製品である。

7. 古銭（第59図、写真図版41：50～55）

5種6点が出土しており、全て掲載した。全体的に平坦地の盛上整地層から出土したものが多い。50は1号堅穴状遺構から出土した天聖元寶、52は1号平坦地盛上整地層から出土した嘉祐通寶、53は2号平坦地盛上整地層から出土した嘉定通寶、54・55はそれぞれ5号平坦地IV層、18F I層から出土した寛永通寶である。51は2号平坦地pp146埋土中から出土した無文錢である。前3者は中国からの舶来錢で、天聖元寶（1023年鑄造）・嘉祐通寶（1056～1063年鑄造）は北宋、嘉定通寶（1208～1224年鑄造）は南宋時代に鑄造されたものである。岩手県北部の事例では一戸町姫代城跡の土坑から天聖元寶2点が出土しているが、嘉祐通寶・嘉定通寶の出土例は未だ知られていない。54はいわゆる「新寛永」で、銅貨寛永通寶2期、背面上部に「文」字をもつ「文錢」である。文錢は寛文8（1668）～天和3（1683）年に龟戸銭所で鑄造されたものである。55は不明瞭ながら「寛永通寶」の銭名が判読でき、鉄一文錢と思われる。

8. 自然遺物（写真図版41：56）

2個体の動物遺存体が出土している。56は2号平坦地pp433の埋土中から出土した貝殻片である。このほか1号墓坑から獸骨（馬？）が一体分出土した（写真図版37）。

（丸山直美）

第8表 韓文土器觀察表

No.	出土地点	形態	施工	表面	文様特徴	断面	内面観察	切面	母型
1	1号坑	盆	やや粗	板文のみ		L.R	ナメ	長板	鉢形
2	1号坑	盆	やや粗	地文のみ		L.R	1号坑に近いナメ	短板	鉢形
3	1号坑	盆	やや粗	地文のみ		L.R	1号坑に近いナメ	短板	鉢形
4	1号坑	盆	やや粗	地文のみ		L.R	ナメ~ミガキ	短板	鉢形
5	3~4 S. 1/2 号坑壁上	盆	粗	口縁: 刮削痕	縦溝: 沈溝	L.R	ナメ	片側	片側(C.2)
6	3~4 S. 1/2 号坑壁上	盆	粗	口縁: 刮削痕	縦溝: 沈溝	L.R	ナメ~ミガキ	短板	片側
7	9 R~8 S. 盆	盆	粗	口縁: 刮削痕	体部: 地文	L.R	ナメ~ミガキ	短板	片側
8	13N 1 盆	盆	粗	地文のみ		L.R	ナメ	短板	片側
9	3~4 S. 1/2 号坑壁上	盆	粗	身形: 1面削平	体部: 地文のみ	L.R	ナメ~ミガキ	短板	片側
10	8 M. 1 盆	盆	粗	地文のみ		R.L	ナメ	短板	片側
11	8 L. 1 号坑壁上	盆	粗	地文のみ		R.L	ナメ	短板	片側
12	4 P. 1 号坑壁上	盆	粗	地文のみ		L.R	ナメ~ミガキに近いナメ	短板	片側
13	13T 1 壺	壺	粗	地文のみ		(L) 横柾	ナメ	短板	片側
14	13P 1 壺	壺	粗	地文のみ		(L) 横柾	ナメ	短板	片側
15	13L 1 壺	壺	ミカサチャク底?	地文のみ		R.L	ナメ	短板	片側

第9表 土器・須恵器観察表

No.	出土地點	種類	器體	外輪半	色調	内面半	上な外輪側 (R+L)	底面	断面 (a)	底面	母型
16	1号窯(火葬場) 1号窯	土器	手掘	年	10%以下	10YR 7/4	(体) ケヌリ	脚付トキリ	-	-	内面裏毛刷跡
17	1号窯(火葬場) 1号窯	土器	手掘	長柄甕	10%以上	10YR 5/4	(体) ナデ	-	-	-	-
18	1号窯(火葬場) 1号窯	土器	手掘	長柄甕	10%以上	7.5YR 6/6	(体) ケヌリ	木葉焼	-	-	-
19	1号窯(火葬場) 1号窯	土器	手掘	長柄甕	10%以上	7.5YR 5/4	(体) ナデ	ロロナデ	-	-	-
20	13N (SK12 窯)	土器	手掘	小瓶	10%以上	N 3/0	(体) ケヌリ~ミガキ	木葉焼	-	-	内面裏毛刷跡
21	14K (SK12 窯)	土器	手掘	長柄甕	10%以上	10YR 6/3	(体) ナデ	(体) ナデ	-	-	-
22	15G 1 三脚	土器	手掘	長柄甕	10%以上	7.5YR 3/4	(体) ケヌリ~ミガキ	(体) ナデ	-	-	-
23	15G 1 三脚	土器	手掘	長柄甕	10%以上	7.5YR 5/6	(体) ナデ~ミガキ	(体) ナデ	-	-	-
24	11M (SD33 窯) T6.1	土器	手掘	大壺	10%以上	2.5YR 3/4	(体) 手引タケ	(体) 手引タケ	-	-	-
25	15G 1 壺	壺	手掘	大壺	10%以上	5YR 1/1	(体) 手引タケ	(体) 手引タケ	-	-	-
26	25G 1 壺	壺	手掘	大壺	10%以上	10YR 4/1	(体) 平行タケ(=ミガキ)	(体) 平行タケ	-	-	-
									-	-	() は記述無、△は記述有

四 十四 四月

第10表 陶磁器観察表

No.	出土地點	器種	断面	操作地	操作手
27	2号半井	P1205 壺	白泥	透明	中面
28	4号半井	P1205 壺	白泥	透明	中面
29	4号半井	P1205 壺	白泥	透明	中面
30	4 U~5 I 壺	白泥	白泥	透明	中面
31	13R 1 壺	白泥	白泥	透明	中面
32	6 V 壺	白泥	白泥	透明	中面
33	14Q 1 壺(残)	白泥	白泥	透明	中面

第11表 土製品觀察表

No.	出土地点	地盤	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	形状 (cm)	備考
34	11M 1~10番 16F 1番	耕土 透水性土製品	△2.75	△1.8	△1.8	△2.2	△3.1	
35			1.9	1.81	0.8	0.8	2.1	

第12表 石器・石製品觀察表

No.	出土地点	地盤	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	形状	備考
36	2号穿堀渠 1P 197番土	砾石 下灰	△5.83	2.25	16.4	砾状石 尖頭	奥羽山脈 新代新潟紀	
37	3~4P (1号切妻造渠 1番)	下灰	△13.2	△10.5	5.4	67.5	尖頭石 奥羽山脈 新代新潟紀	
38	3~4P (1号切妻造渠 1番)	下灰	△16.0	△10.5	5.8	70.6	尖頭石 奥羽山脈 新代新潟紀	
41	3~4P (1号切妻造渠 1番)	砾石 砾石	△14.65	9.65	5.0	22.1	尖頭石 北上山地 新代 (初期) 9	
42	13K (51D228) 1番	砾石 砾石	12.5	9.7	1.3	41.5	尖頭石 北上山地 新代 (中期) 9	
43	9K 6S 1番	砾石 砾石	9.05	4.6	1.65	41.5	尖頭石 北上山地 新代 (中期) 9	

第13表 茶臼觀察表

No.	出土地点	地盤	直径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
39	3~4P (1号切妻造渠 1番)	砾石 砾石	10.0	1.70	△150 (塊)	安山岩 安山岩	奥羽山脈 新生代新潟紀
40	3~4P (1号切妻造渠 1番)	砾石 砾石	△10.5	1.69	△150 (塊)	安山岩 安山岩	奥羽山脈 新生代新潟紀

第14表 鉄製品觀察表

No.	出土地点	地盤	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
44	1号穿堀渠 壁下	瓦砾 瓦砾	△17.9	1.2	1.5	97.8	○	30と同
45	1号穿堀渠 壁下	瓦砾 瓦砾	7.1	5.3	0.6	16.2	○	30と同
46	1号穿堀渠 壁下	瓦砾 瓦砾	10.6	0.65	0.6	14.1	○	30と同
47	4丁 1号切妻造渠	瓦砾 瓦砾	7.9	0.65	0.65	14.6	○	30と同
48	4丁 1号切妻造渠	瓦砾 瓦砾	4.95	2.65	0.75	19.9	○	30と同
49	2号切妻造渠 (51D228) 1番	瓦砾 瓦砾	4.95	2.65	0.75	19.9	○	30と同

第15表 古鐵器觀察表

No.	出土地点	地盤	計測値 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	石材	備考
50	1号穿堀渠 断面	2.95	2.95	0.18	6.05 × 0.05	2.9	鋼鉄／木製丸筒	△3.5
51	2号穿堀渠 P 46壁下	2.15	2.15	0.15	7.0 × 0.10	2.2	鋼鉄／木製丸筒	△3.5
52	1号穿堀渠 壁下	2.51	2.51	0.16	7.0 × 0.10	3.2	鋼鉄／木製丸筒	△3.5
53	2号穿堀渠 壁下	△2.0	2.25	0.15	6.05 × 0.05	1.9	鋼鉄／木製丸筒	△3.5
54	5号穿堀渠 壁下	2.51	0.15	6.05 × 0.05	3.4	鋼鉄／木製丸筒 (未完)	△3.5	
55	18F 1番	2.3	2.26	0.18	6.05 × 0.05	2.0	鋼鉄／木製丸筒 (未完)	△3.5

第16表 その他觀察表 (動物遺存体)

No.	出土地点	地盤	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
56	2号穿堀渠 P 46壁上	2.25	△4.0	△1.2	△0.4	1.3	△3.5

△は鉄器を示す

△は鉄器を示す



埋土上位



埋土上位

1号炉跡



14号土坑



3~4S



13N I層



3~4S
8M I層



15
13H I層



16
カマド相内部



カマド脇り方
(貼り床)



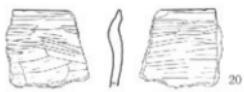
18
埋土



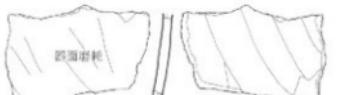
0 1:3 10cm

1号窯穴住居跡

第56図 楽文土器・土築器



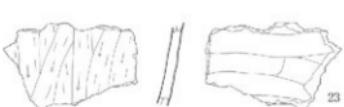
13N
(SK12埋土上)



14K Ⅲ層直上



15G Ⅱ～Ⅲ層



15G Ⅱ～Ⅲ層



11M
(3号薄荷塗土下位)



15G Ⅲ層直上



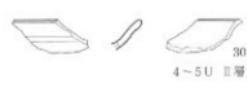
25G Ⅰ層



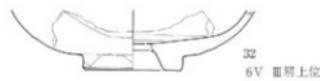
13R pp205埋土上



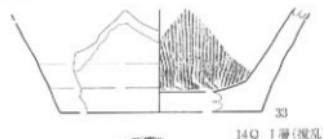
17O～P pp65埋土



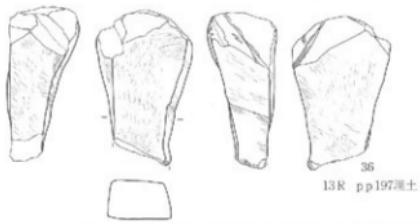
4～5U Ⅲ層



6V Ⅲ層直上位



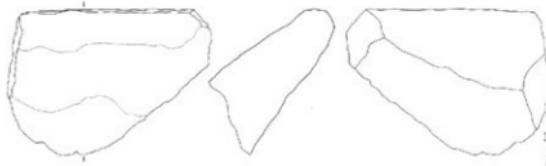
14Q Ⅰ層(搅乱)



13R pp197埋土



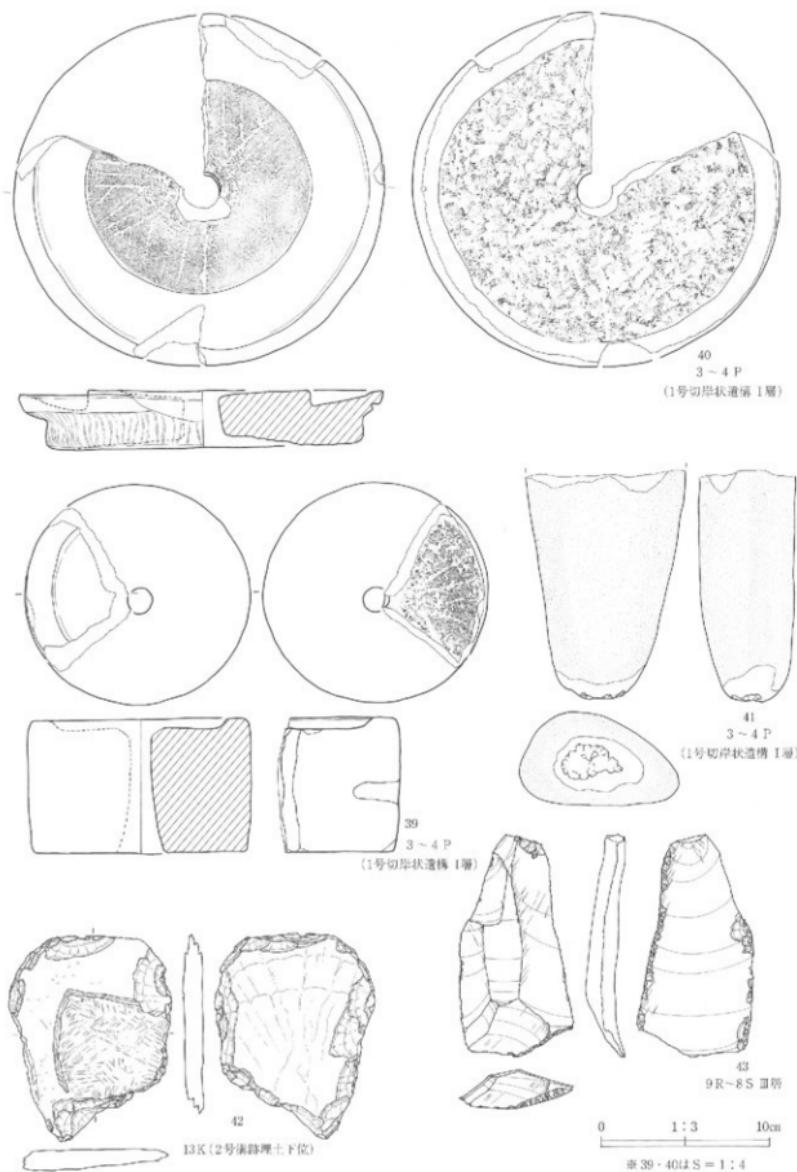
18F Ⅰ層



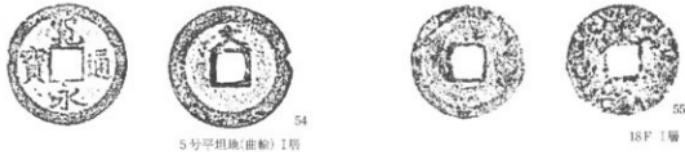
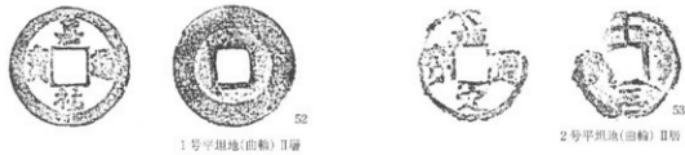
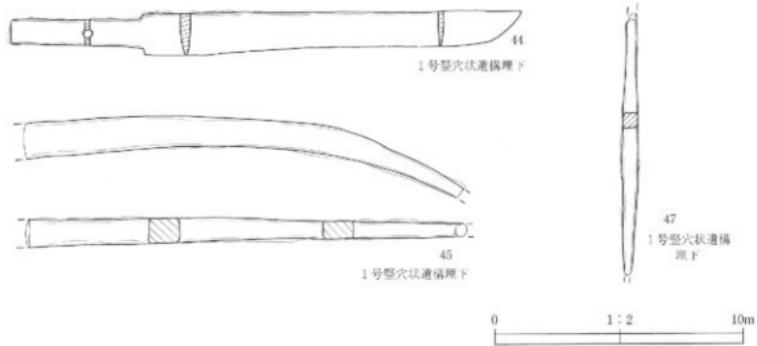
3～4P
(1号切岸状遺構Ⅰ層)

0 1:3 10cm

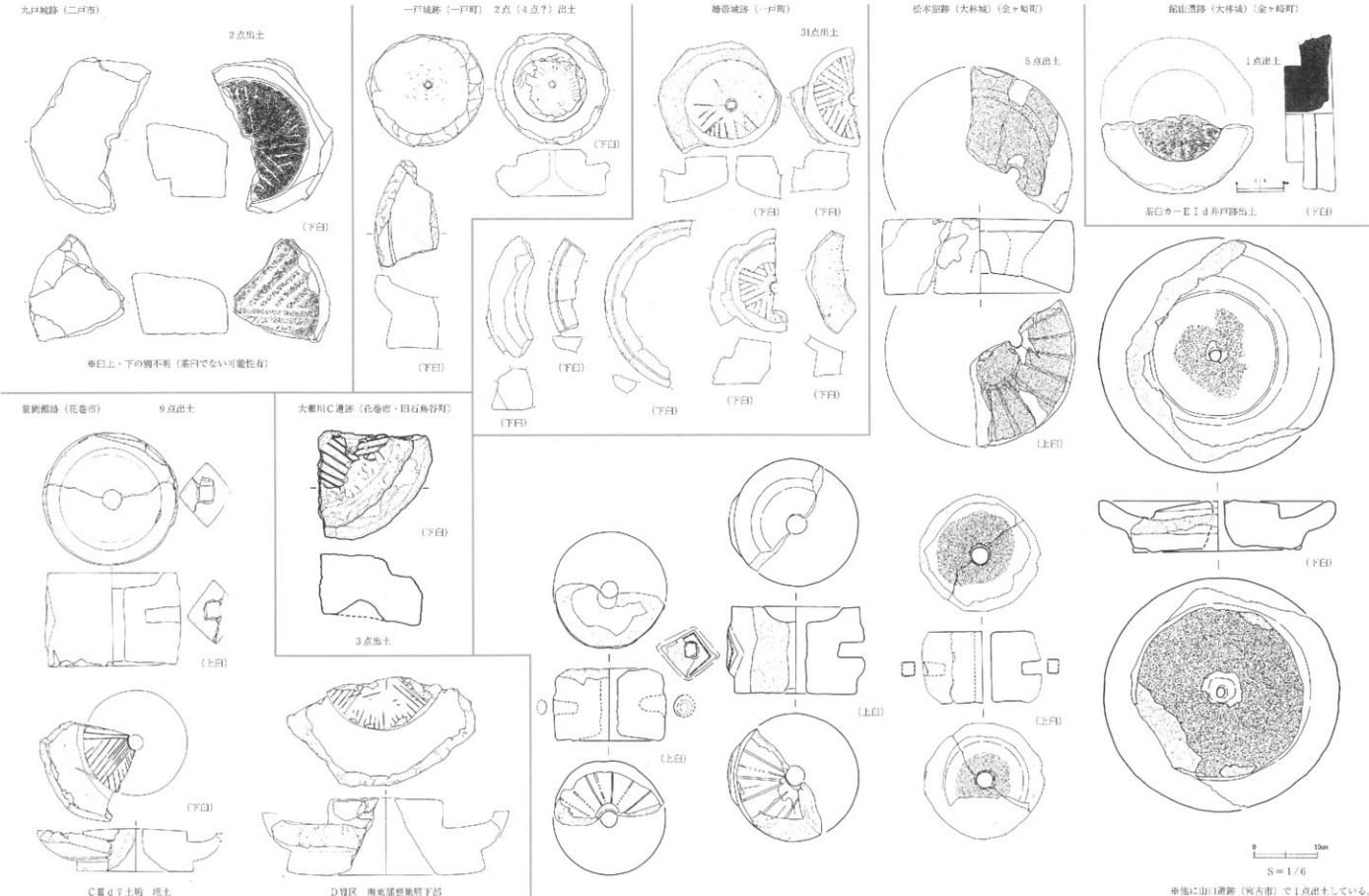
第57図 土師器・須恵器・陶磁器・土製品・石器



第58図 石器・石製品



第59圖 鐵製品・古錢



第60図 岩手県内出土茶臼集成図

VI. まとめと考察

以下では縄文時代の土坑・陥し穴状遺構と中世の縄張り、普請・作事についての簡単なまとめを行う。なお、出土遺物については僅少であるため本章では扱わない。

1. 縄文時代

該期の遺構としては、か跡1基、上坑42基、陥し穴状遺構23基が検出された。

(1) 炉跡

3号平坦地西側で検出された。竪穴住居の炉だった可能性もあるが、当該部分は中世の普請によって削剥しきいため、詳細は不明である。

(2) 土坑

上坑は42基検出されている。このうち、円形基調の平面形を呈し、底面の中央付近に小径の杭穴を伴うものが14基ある。11・15

・16・18・19・23・25・33・
24・35・36・38・39・41号の各土坑である。これらは単なる土坑というよりも、次に触れる陥し穴状遺構C型の可能性が高い。これらの14基については次項で一括して触ることとする。

土坑の形態分類		断面形 土坑 = 「坑」と略す。*は不確定なもの。				
平面形	円形 (略円形)	方形	逆台形	袋	漏斗	不明
		17坑、*20坑、 24坑	7坑、21坑、26坑、 28坑、29坑、30坑、 31坑、32坑、	13坑	40坑	9坑、 *10坑
	椭円形	5坑	2坑、3坑、6坑、 12坑、27坑、42坑	*8坑、 14坑、 37坑		*11坑
隅丸方形		1坑	*4坑			

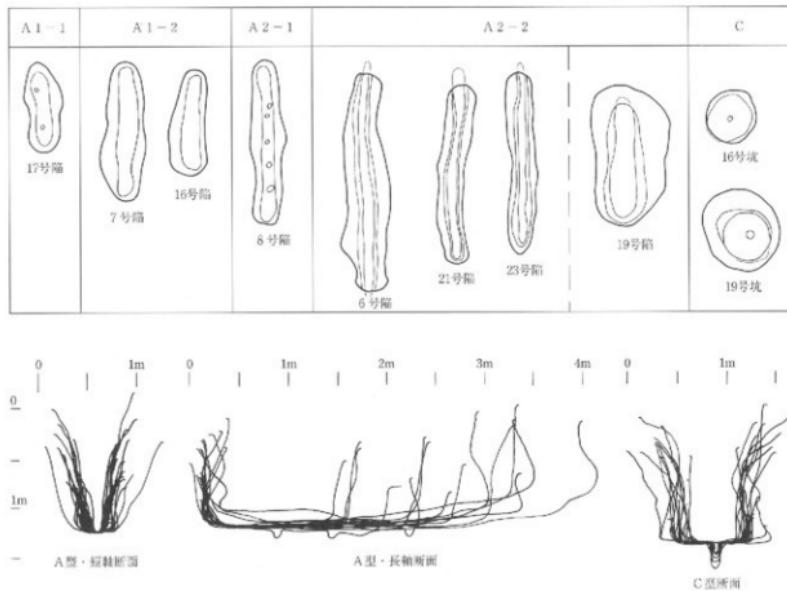
検出された十坑の平面形には不整なものも含めて円形、椭円形、隅丸方形があり、開口部径62～242cm、底径38～148cmとかなりバラつきがある。断面形は方形状、逆台形状、袋状を呈しており、深さ10～129cmを測る。埋土は自然堆積の様相を示すものが多い。遺物は14号土坑を除いて出土しなかった。かかる様相から、これらの土坑にはその機能・用途に差異があると考えられる。いずれの土坑、特にも調査区西半部の土坑は中世の普請により少なからず削剥されており不明確ではあるが、断面形が袋状の13・14・37号土坑などは貯蔵穴の可能性が想定され、円筒形土坑の17・20・24号土坑や漏斗形の40号土坑は、底面の小穴を欠くものの陥し穴状遺構C型の可能性を考慮する余地がある。

土坑の所属時期は、14号土坑を除いた29基については明らかではない。検出層位から縄文時代に位置づけているが、具体的の時期は不明である。一方、袋状を呈する14号土坑では、底面付近で入れ子状に深鉢2個体が潰れた状態で出土した。出土した土器は台付の深鉢形土器で、口縁部文様の様相から大洞B・C式新相ないしは大洞C・I式に位置づけられることから、当土坑の時期は晩期中葉頃と思われる。また、当土坑の埋土は人為的な堆積様相であり、かつ土器の出土状況が特殊であることから、当土坑が晩期の墓坑だった可能性も考慮されるが、確証は薄い。

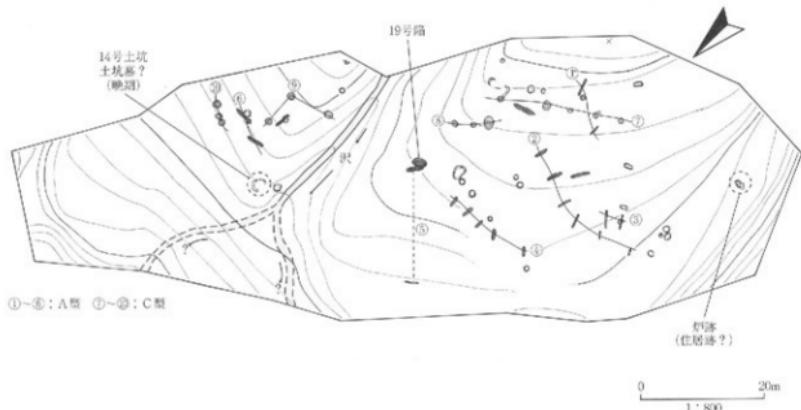
(3) 陥し穴状遺構

調査区からは溝状の陥し穴状遺構23基が検出された。また、前述のとおり上坑に分類した中に底面小穴を有するものが14基含まれている。これらは後述の陥し穴状遺構C型に類似しており、陥し穴状遺構である可能性が高い。本項では底面小穴を伴う上坑を含めて陥し穴状遺構として扱うこととする。

1. 繩文時代



第61図 跪し穴状遺構形態分類図



第62図 跪し穴状遺構配置図

岩手県内の陥し穴状遺構については、瀬川司男氏（瀬川1981）や田村壮一氏（田村1987）がその形態、地域性、時期について検討を加えている。田村1987によれば、陥し穴状遺構は平面形状によって、A型：溝形、B型：楕円形、C型：円形、に分類されている。田村分類を参考として、本遺跡の陥し穴状遺構を平面形で大別し、底面小穴の有無によって細分した（第61図）。

なお、ここでA型に含めた19号陥し穴状遺構については、溝というにはやや幅広であり、B型に近いものかもしれないが、楕円というほどのものでもなく、便宜的にA 2-2型に組み入れた。19号陥し穴状遺構をA型とすれば、本遺跡ではB型は検出されていない。A型は、開口部長軸1.2～3.6m・短軸0.2～1.2cm、深さ10～140cmである。第61図は、A型・C型の陥し穴状遺構の断面形をそれぞれ合成したものである。A型については、長軸側断面がフラスコ形、逆台形など若干の差異があり、かつその長さにバラつきがあるものの、3つほどの分布の山を見ることができる。開口部長-底面長で見ると、開口部1.5m-底面1.4m付近、2.5m-2.3m付近、3.4m-3.0m付近である。その一方、短軸断面ではU字形ないしはV字形というある程度の齊一性を示しており、概ね開口部幅が60～70cm、底面幅が30～40cm付近に密な分布を示している。C型では開口部径0.8～2.1m、深さ20～129cmを測り、開口部の形状により全体としてフラスコ形や長方形・逆台形を呈するものがあつてやや差異が認められるが、中～下部に着目すると概ね同形態・規模であることがわかる。中部の径70cm、底面径70～80cmほどに分布が集中している。C型については、元々開口部で外傾ないし外反ぎみに開く形だったかもしれないが、上部が崩壊ないしは削剥により失われたものではないかと思われる。

第62図は、調査区の陥し穴状遺構の配置を示したものである。一般に陥し穴状遺構が1基のみ単独で存在することは稀であり、2～7基ほどが纏まって配置されることが多い。本遺跡の場合、中世城館の普請により原地形が改変されており、配置を考える上では不完全ではあるが、ある程度の纏まりを認めることができる。第62図の①～⑩はA・C型それぞれの組み合わせを推定したものである。中世の普請前には、1号堀跡部分がもともと小規模な沢、東西の曲輪部分がこの沢を挟む緩やかな傾斜面（尾根先端部）だったと思われる。溝状のA型については、位置関係や軸方向などから①～⑥のセット関係を想定できる。⑤については約18mと離れているが、軸線がほぼ同じこと、2基の間に数基が存在していた可能性があること（当該部分は普請・削剥が著しい）、からセット関係を想定した。現況の等高線を見ると、①～③・⑤は等高線に対して直交する（傾斜に沿う）配置で、④・⑥は等高線に沿う（傾斜を横切る）配置である。一方、C型については、A型と違って軸方向がわからないこともあってセット関係の想定が難しく、直線的な⑦・⑧・⑩、屈曲した⑨という配置を想定したが、不確実である。これらの配置には、原地形の傾斜度や沢へと降りていく獣道（？）の存在、等が関係しているものと思われる。本遺跡の所在する淨法寺町では、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴って安比川右岸丘陵上の遺跡群の発掘調査が行われた。それらの中で第63図に示した広沢遺跡、飛鳥台地I遺跡、安比内I遺跡、大久保I遺跡、桂平（II）遺跡（註1）、沼久保（I）遺跡（註1）、五庵III遺跡、五庵I遺跡、田余内I遺跡、柿ノ木平III遺跡において、A型・C型の陥し穴状遺構が検出されている

陥し穴状遺構の形態分類		陥し穴状遺構＝「溝」、土坑＝「池」、と略す。深いものも含めた。＊は不規則なもの。			
分類	平面形	平面規模	小穴 数	走 跡	老
A型	A 1-1型	小形 長軸2.5m未満	あり なし	1 9+ 1?	17箱 2箱、7箱、10箱、11箱、12箱、13箱、 14箱、15箱、16箱、＊18箱
	A 1-2型	溝状	あり	1	8箱
	A 2-1型	大形 長軸2.5m以上	なし	11	1箱、3箱、4箱、5箱、6箱、9箱、 ＊19箱、20箱、21箱、22箱、23箱
	A 2-2型				
B型	楕円形			0	
C型	円形		あり	14	11箱、15箱、16箱、18箱、19箱、 23箱、25箱、33箱、34箱、35箱、 36箱、38箱、39箱、41箱

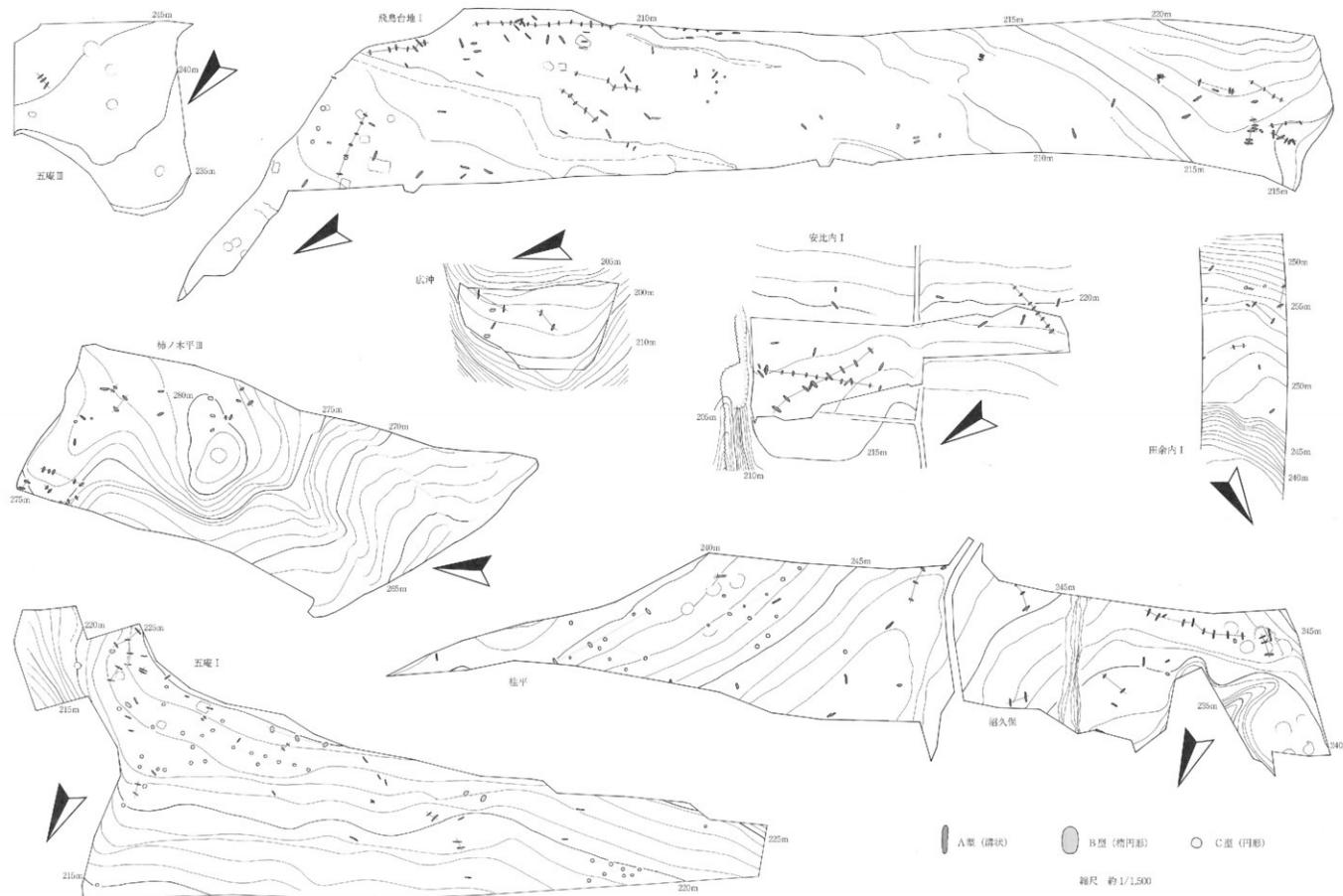
第17表 土坑計測値一覧

道権名	位置	規模 (cm)		△は残存値	重複關係 (断>時)	地主		編号
		東西部延	南北延			標高標高、測入物	バニス	
1号土坑	5Q	62 × 158	59 × 144	22		人為、炭化物粒		
2号土坑	7S	89 × 138	56 × 120	32		自然	白・緑	
3号土坑	9T	70 × 146	49 × 129	36		自然	白・緑	
4号土坑	9T	48 × 86	42 × 79	10	5坑>	自然	緑	
5号土坑	8V	100 × 118	85 × 107	51		自然	白・緑	
6号土坑	8V	104 × 126	74 × 105	26		自然	白・緑	
7号土坑	8V	64 × 70	38 × 43	16		人為?		
8号土坑	9V	94 × 115	81 × 99	50		自然	白・緑	
9号土坑	8L	66 × 66	48 × 56	12		人為?	緑	
10号土坑	9L	△10.7 × 11	△6.6 × 9.8	42		人為?		
11号土坑	9M	△11.6 × 20.0	△9.0 × 14.8	24	22坑>	自然、施主、黒化物質	?	
12号土坑	13N	176 × 232	98 × 148	26		自然	白・緑	
13号土坑	13H	28	70	18		人為?	白・緑	施主?
14号土坑	19T	△168 × 242	△176 × 186	50		人為? 施主? 混入物	白・緑	
15号土坑	6Q	78 × 82	64 × 69	26		自然	白・緑	施主中央に小穴
16号土坑	7P	82 × 88	72 × 74	46		自然	白・緑	
17号土坑	8O	72 × 86	62 × 66	84		自然	白・緑	
18号土坑	8O	126 × 156	80 × 82	106		自然	白・緑	施主中央に小穴
19号土坑	7O	76 × 80	68 × 72	20		自然	白・緑	施主中央に小穴
20号土坑	8K	69 × 94	60	106		自然	白・緑	
21号土坑	8X	120 × 121	64 × 72	112		自然	白・緑	
22号土坑	9M	88 × 108	75 × 78	137	>11坑	自然	緑	施主中央に小穴
23号土坑	10N	141 × 200	106 × 114	129		自然	白・緑	
24号土坑	11M	79 × 76	64	33		自然	白・緑	
25号土坑	11M	90 × 109	72 × 81	103		自然	白・緑	
26号土坑	11P	90 × 92	69 × 71	107		自然	白・緑	施主中央に小穴
27号土坑	11P	98 × 106	64 × 69	102		自然	白・緑	
28号土坑	13O	97 × 106	79	106		自然	白・緑	
29号土坑	13O	112 × 117	80 × 88	79		自然	白・緑	
30号土坑	13P	91 × 93	66 × 67	87		自然	白・緑	
31号土坑	13S	90 × 97	72 × 78	78		自然	白・緑	
32号土坑	14I~14J	75 × 78	68 × 72	73		自然	白・緑	
33号土坑	15T	116 × 133	114 × 116	88		自然	白・緑	
34号土坑	16G	112 × 129	65 × 70	114		自然	白・緑	施主中央に小穴
35号土坑	17G	109 × 107	72 × 73	118		自然	白・緑	施主中央に小穴
36号土坑	16H	101 × 123	80 × 81	100	21坑>	自然	白・緑	施主中央に小穴
37号土坑	17I~17G	114 × 132	78 × 80	158	22坑>	自然	白・緑	
38号土坑	18G	42	51 × 62	95	22坑>	施主不明	不明	施主中央に小穴
39号土坑	18E	119 × 135	76 × 85	116		自然	白・緑	施主中央に小穴
40号土坑	18F	100 × 102	74 × 80	113		自然	白・緑	
41号土坑	18F	95 × 99	55 × 37	76		自然	白・緑	施主中央に小穴
42号土坑	19J	108 × 121	67 × 81	116		施主不明	白・緑	

※施主中央に小穴を有つものは円筒形柱状空洞となる可能有利

第18表 陥し穴状構造計測値一覧

道権名	位置	幅員 (cm)		△は残存値	重複關係 (断>時)	地主	長方形 (Nから)	備考
		東西部延	南北延					
1号陥し穴状遺構	6Q~7O	22 × 305	16 × 269	10		バニス・混人物	白	22° W
2号陥し穴状遺構	7Q~8Q	16 × 185	6 × 175	15		8	2° E	底面のみ残存
3号陥し穴状遺構	9R	38 × 322	8 × 312	53		地山ア	30° E	
4号陥し穴状遺構	9T~10T	28 × 317	9 × 308	42		緑	44° W	
5号陥し穴状遺構	9T	22 × 265	13 × 270	28	> 4坑	緑	35° W	
6号陥し穴状遺構	9N	73 × 355	18 × 401	102		白・緑	70° E	
7号陥し穴状遺構	9 P~10 P	70 × 225	29 × 206	91		緑	9° Z	
8号陥し穴状遺構	10Q	36 × 265	20 × 253	69		16° E	底面に小穴	
9号陥し穴状遺構	10R	35 × 252	19 × 218	27		巻	14° E	
10号陥し穴状遺構	10 S~11 S	27 × 234	13 × 217	27		巻	23° W	
11号陥し穴状遺構	10T	23 × 124	14 × 130	10		巻	35° W	
12号陥し穴状遺構	10U	11 × 120	..	9		巻	23° W	底面のみ残存
13号陥し穴状遺構	13O~14O	47 × 184	35 × 172	42		白・緑	14° E	
14号陥し穴状遺構	13P~14P	58 × 210	37 × 210	52		白・緑	1° W	
15号陥し穴状遺構	13P~14P	44 × 163	33 × 152	60		白・緑	0°	
16号陥し穴状遺構	13Q	55 × 269	30 × 155	76		緑	32° W	
17号陥し穴状遺構	13R	58 × 145	25 × 119	58		48° W	底面に小穴?	
18号陥し穴状遺構	17P	21 × △216	12 × △205	26		白	53° E	
19号陥し穴状遺構	33M~14V	119 × 227	35 × 204	87		白・緑	61° E	
20号陥し穴状遺構	4AM	77 × 271	8 × 290	114		白・緑	36° E	
21号陥し穴状遺構	16H~17H	42 × 294	16 × 316	89	>30坑	白・緑	1° E	
22号陥し穴状遺構	18F~18G	62 × 337	18 × 338	141	>37~38坑	白・緑	90° W	
23号陥し穴状遺構	18G~18II	41 × 293	13 × 300	94		白・緑	74° E	



第63図 岩手県北部における陥没穴状遺構集成図

(註2)。これらの遺跡の陥し穴状遺構の配置については、田村1987において既に指摘されているが、想定される組み合わせ関係を図示した(第63図)。遺跡によって調査部分の位置や面積が異なることで遺構数の多寡があり、概には言えないが、各遺跡の陥し穴状遺構は一定の繰り返しを示していると解される(註3)。A型の陥し穴状遺構については、飛鳥台地Ⅰ遺跡、安比内Ⅰ遺跡、沼久保遺跡で8~12基の並列的配置の様相が示されている。一方、C型が頗る者なのは五處Ⅰ遺跡、桂平遺跡で、3~6基の直線または弧状配置が見られる。また判然としないが三角形配置と思われるものもある。A型・C型とともに、傾斜に対しての配置・位置関係には規則性は見られず、それぞれの地形に応じたものと思われる。本遺跡の陥し穴状遺構の配置状況も、従前の調査成果と同傾向を示す事例である。

本遺跡検出の陥し穴状遺構からの出土遺物は皆無であり、純文時代という以上に具体的な所属時期を明らかにし得ない。先学によるこれまでの調査成果によれば、この両者には時期差があると考えられており、A型は纏文中期末~後期前葉、C型は前期前葉以前(中振浮石降下以前)、とされている(田村1987)。本遺跡でも、A型とC型の重複が、A型・21号陥し穴状遺構-C型・36号上坑、同じく38号陥し穴状遺構-37号上坑、で見られる。いずれも前者が後者を載っており、A型がC型よりも新しいことは確実であり、これまでの見解を裏付けるものといえる。

註

- 1) 桂平遺跡・沼久保遺跡は町道を挟んで隣接する同一の遺跡であり、昭和50~60年に岩手県埋文が調査を行った。この調査時点では遺跡名が「桂平遺跡」、「沼久保遺跡」とされているが、現在の遺跡登録ではそれぞれ「桂平Ⅱ遺跡」、「沼久保Ⅰ遺跡」となっている(浄法寺町教委1996など)。
- 2) 上記の他、海上Ⅰ遺跡・海上Ⅱ遺跡ではB型の陥し穴状遺構が複数検出されている。なお、浄法寺を含めた県北地区のB型陥し穴状遺構のうち堆土上位に白色バニスが堆積している事例があり、当該バニスは分析によって十和田a火山灰と同定されている。昭和60年代ごろまでは、この事象は堆積しきっていない遺構に十和田a火山灰が堆積したもので、遺構自体の所属時期は純文時代であると解釈されることも多かった。田村杜一氏は田村1987において、これら十和田aを作った一群(田村分類B1型)の陥し穴状遺構を弥生時代~平安時代のものの見解を示した。このB1型陥し穴状遺構は岩手県南部でも少數検出されていたが、県南地域では十和田a火山灰が希薄なため、從来、良好な史料を欠いていた。しかし、平成17年度に当センターが調査を行った岩手県(田川・沢尻郡胆沢町)宮沢原下遺跡(岩手県埋文2006、2006年度本報告予定)において、十和田a火山灰を伴うB1型陥し穴状遺構が多数検出され、当該地域における事例が飛躍的に増加することとなった。とりわけ、同遺跡では十和田a火山灰が埋土上位~底面付近に堆積している事例があり、B1型の所属時期が平安時代まで下る可能性が高いことが示唆されている。
- 3) 安比川左岸側での調査事例は少ないが、町教委で調査を行った上杉沢遺跡や野黒沢遺跡では晚期の集落跡が確認されているが、陥し穴状遺構は検出されていない。安比川右岸は北西~北向きの傾斜地が多く、日照条件は良くない。一方、左岸は植田郡野野の傾くながらかな丘陵が連続しており、集落を営む上で好条件である。これらのことから、安比川の右岸と左岸では利用のされ方がやや異なっているのかもしれない(右岸には狩場が多く、左岸には大規模な集落)。いずれ、今後、左岸の調査事例が増えることにより明らかになっていくものと思われる。

参考文献

- | | | |
|-------|------|----------------------------------|
| 岩手県埋文 | 2006 | 「宮沢原下遺跡」(概報)『平成17年度発掘調査報告書』第490集 |
| 瀬川司男 | 1981 | 「陥し穴状遺構について」『紀要Ⅰ』岩手県埋文 |
| 田村杜一 | 1967 | 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要Ⅳ』岩手県埋文 |

2. 中世

(1) 歴史的環境

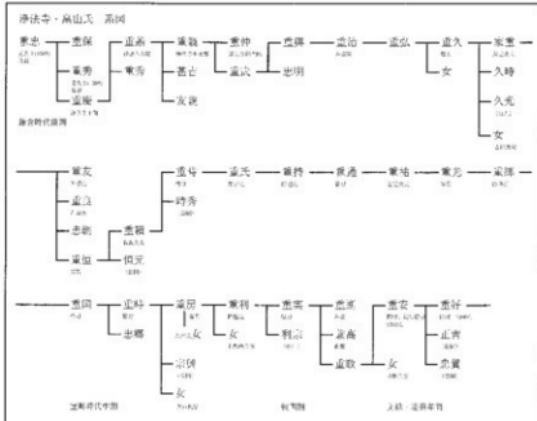
本項では、今回調査の主体である中世城館に関わって、中世における三戸・二戸地方、「藤部諸郡」の情勢について浄法寺氏を軸として概観する(註1)。

[中世藤部の情勢と浄法寺氏]

中世の浄法寺は、その名の由来となった浄法寺氏の支配地となっていた。浄法寺氏の出自については、奥州藤原氏滅亡後に浄法寺に所領を得た畠山氏が祖とされており、伝承によれば13世紀初めに畠

山重慶が“淨法寺”姓を称したことに始まるとする。元久2（1205）年、畠山重忠・重秀は「事に座して」誅殺された。重秀の弟・重慶坊は日光へ逃れて、天台宗の修験となって大友阿闍梨を称し、後に淨法寺へ下向した。この重慶の子・重基が“淨法寺太郎”を称して、応永年間（1394～1428年）ころに南部13代・守行の家臣となったと伝えられている。経緯の真偽はともかく、以後、淨法寺氏は三戸南部氏の配下として、また一方で鹿角氏・田山氏・松岡氏・四戸氏・毛馬内氏らと血縁関係を持つことで、南北朝動乱期から戦国時代までを生き残り、三戸南部氏の有力家臣としての地位を得ていったらしい。ただし南部配下とはいっても、淨法寺氏はある程度独立した存在だったようである。淨法寺には南部一門の所領が存在していないこともそれを傍証している。この間、南部氏は、田名部の鷲崎氏・鹿角の秋田氏・岩手郡滴石（季右）の戸沢氏らを攻めて領地を奪い、釋貫氏・堀孫氏らを討つて和賀を平定、さらに津軽を攻略、陸奥における勢力を急速に伸ばしている。

天正10（1582）年、三戸南部24代晴政・25代晴継が相次いで死去すると、後継者を巡り一族・重臣の対立が激化し、後継者を決める重臣会議が開かれたが、南部氏配下の大身となっていた淨法寺修理重安もこれに参加している。九戸城主・九戸信政を推す声が大勢であったが、結果的には、南部一門の最長老である劍吉鶴主・さとうじきやく さとうのぶちかが強く推挙した田子（南部）信直が三戸南部26代宗主に決まった。三戸城（第3図18；以下同様）に入った南部信直は離反した大浦氏に津軽を奪われたもの、滴石・志和（紫波）を制圧してその勢力を北上川中流域へと南下させていった。



第64図　浄法寺氏系図

一戸城を奪われた南部信直は四戸（金田一城；41）に引いて九戸勢と交戦したが、情勢は九戸方優勢となりつつあった。一揆と政実派への対応に苦慮した信直は豊臣秀吉に救援を要請し、秀吉は関白豊臣秀次を総大将とする奥州再仕置軍を派遣した。4万人超の奥州再仕置軍は和賀の二子城を攻め落とし、和賀一揆を鎮圧、北上して九戸へ向かった。九戸方は、浄法寺を経由して九戸へ向かっていた秋田氏や出羽・小野寺氏の仕置軍合流を阻止するため「浄法寺口」で襲撃したが敗退、政実をはじめ九戸方の一族郎党が九戸城（53）に立て籠もった。津軽の大浦氏、松前氏らを加えた6万人の仕置軍は九戸方の筋帝城（88）、根反城（86）、一戸城を陥れて九戸城へ迫る。この時、浄法寺修理重安は信直方として参陣し、浅野長政軍に属していた。九戸城を包围し力攻めに出た仕置軍に対して、籠城する少数の九戸勢は夥しい戦死者を出しつつも抗戦した。地理の不案内、兵糧の不足、疫病の流行などにより仕置軍は戦術を転換し、九戸氏菩提提守である長興寺の僧庵天を使使として、子女の助命を条件として降伏を勧告した。「衆寡敵せず」と悟った政実は降伏開城したが、政実の一族および子女はことごとく撫で斬り、あるいは二の丸に押し込められて焼き殺された。政実は浅野長政により三迫（宮城县栗原郡）の豊臣秀次本陣へ渡送され、当地で処刑された。

重安は所領5千石（一説には6千石）を有して安比川流域・鹿角・田山まで支配を広げ、九戸の乱に際しては、南部一族の浪岡城代・横山帶刀義実、月館隱岐、勘五郎らとともに終始信直支持の立場をとった。その結果、浄法寺修理重安は、客分ではあるが南部家臣團の中において八戸氏・北氏に次ぐ確固たる地位を築いた。

慶長5（1600）年9月、秋田の仙北小松川（平鹿郡山村内村）に逃れていた和賀氏の逸児・和賀忠親が旧臣を集め、裨員勢とともに花巻城を襲い、次いで岩崎城に立て籠もった（岩崎一揆、慶長の和賀・稗貫一揆）。10月、南部利直は岩崎城攻めのため出陣、岩崎城西にある兵庫館を本陣として岩崎城を攻めたが、籠城する和賀勢の守りが固く、かつ大雪に見舞われたため利直は春まで攻撃を延期することとして花巻城へ引き上げた。「浄法寺修理」（重好か）は、岩崎城監視役として残留・越冬を命ぜられたが、後に修理が密かに浄法寺に戻って監視の務めを怠っていたことが発覚した。権勢を誇っていた浄法寺氏であるが、利直の命に叛いたこの行動により所領没収、家取り潰しなったのである。

（2）中世城館跡の分布

前項で述べた時代背景を踏まえて、現在の岩手県二戸郡から青森県三戸郡にかけての中世城館分布を見ると、旧街道や河川沿いに実に多くの館跡が存在していることがわかる。第65図に当地域における144箇所の城館跡および中世遺跡を示した（註5）。

当地域には馬淵川が南から北へと貫流し、その支流である安比川・十文字川・白鳥川・海上川・熊原川等が合流している。平野の少ない当地域ではこれらの川筋に沿って街道が敷かれている（註6）。盛岡から北に延びる奥州街道（奥州道中）は一部山間に入る部分もあるものの、現在の国道4号の路線と重なっている。街道は、分水嶺の中山峠を越えて一戸中心部から烏越を経て現二戸市街地に入り、金田へと北上する。川口集落を経て、馬淵川がU字形に曲流する舌崎を右に、釜沢館（35）を左に見つつ、難所「蓑ヶ坂」を登って中世における南部宗家の根據地・三戸へと至る。街道はさらに南部氏入府の地・現南部町へと入り、市街北の丘陵を経てへと伸びている。この奥州街道には各方面への脇街道が連結しており、図幅内に示したものでは三戸街道（八戸～三戸）、田子街道（鹿角街道？；三戸～田子～鹿角）、八戸街道（二戸～軽米～八戸）、「鹿角街道」「浄法寺街道？」；二戸～浄法寺～鹿角街道（盛岡～鹿角）に連結）、「浄法寺街道」（一戸～浄法寺）などがある（註7）。

図示したとおり、中世城館の分布には「南部・三戸」、「二戸・一戸」、「浄法寺」という三つの中心

地域がある。16世紀代における三戸南部氏の根据地である青森県南部町・三戸町には、聖寿寺館（本三戸城）⁽⁷⁾や三戸城を中心に大規模な城館が集中している。一方、南部信直と対立した九戸勢の館は、九戸氏居城の九戸城や一戸城、姉帯城、五月館⁽⁹⁰⁾などが、現在の一戸町から二戸市への奥州街道沿いに纏まっている。南部信直と九戸氏を中心とする反信直勢の対立情況の中、安比川流域を支配地としていた淨法寺氏は地理的には九戸勢力圏の側面を衝く位置にあり、三戸南部の対九戸戦略の前線として重要な地域だったとも考えられる（註8）。かかる軍事的緊張狀況を背景とするためか、淨法寺町内には船跡が多く、これまで27箇所の城館が確認されており、これに本遺跡の館を加えると28の城館が町内に存在していたこととなる。淨法寺の館は安比川沿いの谷底平野が眺望できる高位の段丘面上に点在している。淨法寺には二戸・一戸方面と花輪・鹿角方面を結ぶ「鹿角街道」が通り、さらに天台寺南側を通じ、山中を抜けて出ル町を経山して一戸城へと至る「淨法寺街道」もある（註9）。淨法寺城（121）を中心とするこれらの館はその街道沿いに配置されていたようである（註10）。これらの城館については文献史料が乏しく、館主の伝承残るものも少ない。いくつかの館について、淨法寺氏配下の吉田氏・松岡氏・漆沢氏・大森氏・大清水氏らの名が伝えられており、二戸・一戸方面と鹿角方面との交通の要衝である安比川流域を支配していく中で、街道の抑えとして淨法寺氏が一族・郷党を配したものだった可能性がある。淨法寺の狭い河谷は長渡路・八幡館・濱見橋・大清水付近での惣が極端に狭まり天険要害をなし、その要所に館が置かれており、全体として難攻易守の形勢となっている（註11）。ところで、天正20（1592）年、豊臣秀吉の命により南部領内の48城中、一戸城・姉帯城・金田一城・古軒米城など36城が破却された。この時淨法寺城も廃城となっており、町内に分布するこれらの館跡の多くはこの時点で破却されたものと思われる、本遺跡の城館が機能した時期の下限もここに置かれるものと思われる。ただし現時点では、それらの城館のうち、調査が行われたものは淨法寺氏居城である淨法寺城、吉田館（114）および本遺跡（112）のみであり、明確に証明された訳ではない。

（千葉正彦）

註

- 1) 南部氏の動向を記述するにあたって、「岩手県史 第3巻」（岩手県1961）、「淨法寺町史」（淨法寺町1997）、「和賀一族の興亡」（北上市立博物館1996）等を全般的に参照した。
- 2) 前掲「岩手県史 第3巻」（831頁）では七戸家臣が改めたのは「伝法寺城」である、としているが、「南部史要」（1998、第5版、52頁）には「淨法寺城」とある。ここでは前者に拠る。
- 3) 「南部史要」（62頁）には「…公〔引使用者註：南部信直〕は九戸、一戸の連絡を断て急に一戸城を攻めてこれを陥れ、…（略）…東朝政、淨法寺重好をして代りで守らしむ、然るに重好の弟兼及びその子淨法寺主勝なるものが歟に応じて朝政、重好を欺てこれを追ひ阿波に挺りて反旗を翻す、公の軍これを攻撃するも頑強に抵抗し、戦う毎に利らず、…（後略）」とある。つまり、淨法寺重好の「跡」は兎が仔伏されていた一戸城を奪取した形であり、淨法寺一族の本陣を象徴している。なお「重好」ではなく「重安」とする史料もある。
- 4) 「南部諸城の研究」（沼部1981）によると、松岡・吉田・足谷・駒ヶ嶺・福田の諸氏が九戸陣陣に組みして、出羽勢の九戸侵攻を防ぐに、とされている。しかし、蘭部1971では吉田氏は九戸側に立たなかつたとされており、反信直に組みした「吉田」氏が吉田館に挺る淨法寺一門の吉田氏なのか、明らかではない。あるいは吉田一族内でも立場の違いがあり、一部が九戸方となった可能性がある。他氏についても同様。説あり、このあたりの事情は判然としない。
- 5) 抽出に際して複数の文献を参照したが、文献による記載の有無があるもの、名称のみで内容不詳なものもあるが、それらの「編」も便宜的に括して示している。
- 6) 街道の追跡は、「岩手県「歴史の道」調査報告」（岩手県教委1979・1980・1981）、「奥州街道」（2002）、「北夷路程記」（岩手県文化財保護協会2002）、「一戸郡誌」（1977）等を参考し、一部については推定の上、作図した。
- 7) 街道の名稱については、それぞれの地域で異なっており、一定していない。多くの場合、その道の最終目的の地名を冠して呼べることが多いようである。例えば、八戸から「三戸」と呼びている「三戸街道」は、八戸から見て最終到達地点である三戸の名を冠して呼ばれ、三戸から鹿角へ通る道は「鹿角街道」と呼ばれる。しかし、逆に秋田側では鹿角・三戸間の道を「奥越往来」や「三戸往来」という名稱で呼んだらしい。「一戸～鹿角」、「二戸～淨法寺～曲田」、「盛岡～曲田～山内～鹿角」といった複数の街道がそれぞれの地域でいずれも「鹿角街道」と呼ばれたようであり、「淨法寺街道」も「一戸～淨法寺」、「二戸～淨法寺～曲田」のいずれを指すのか、史料により異同がある。

第19表 三戸郡・二戸郡における中世の遺跡・館跡

No.	地名・遺跡名	所在地	参考(城・寺・遺構等)	備考(城主・道場等)
1	天王沢城	吉柳村		
2	船塚	新郷村		
3	乾洞城	三戸町	袖手：乾洞沢分衛門	
4	片守城・橋塚	三戸町	鶴見：片守守七郎。袖手は田城。	
5	小曲塚	吉舘町	又六・左近、雅正：小曲小内郡	
6	馬場城	南郷町	大正6(1917)年、南郷御直が旗城。 紋章：馬場市右門	
7	帶刀寺塚	二戸町	南郷11代守直一・24代守政慈院。天文 (本戸戸城)引津寺塚跡。8代室家の放火により消失。	
8	佐藤城	南部町	聚雲：佐藤氏	
9	平丘・城跡	南郷町	迹3.3(1192)年、南部守代光行が 築城	
10	人内櫓	南郷町	南部守代・南郷御城	
11	須坂城	吉舘町	吉舘氏忠城	
12	中山城	南郷町	南郷御城	
13	赤石城	青部町	天文2年(1537~92年)。鷹山：赤石 安房の居館。	
14	御内櫓	南郷町	迹2.1(1911)年。南部守代の佐藤 城跡。『文政』の伝承あり。	
15	上名久井城	南部町	袖手：名久井(上名)氏・東氏(西 印門)。	
16	川字田神	三戸町	鷹山：川字田正庵。寺場、聚。	
17	東山城	二戸町	鷹山：東山田正信。佐藤信重の築城。	
18	一戸城	一戸町	南郷2代守直が完成。16世紀後半以 降、南郷守家の居城。	
19	物内櫓	一戸町	鷹山：徳内氏(北氏一族)。	
20	金原城	三戸町	所主：石沢氏直。	
21	京兆館	一戸町	鷹山：鈴石貞良。	
22	白時城	三戸町	鷹山：白時信輔。	
23	豊川城	二戸町	鷹山：豊川又左衛門。	
24	牛内城	三戸町	鷹山：牛内氏。	
25	片ノ尻城	三戸町	鷹山：片ノ尻左衛門守・平場、堀。	
26	船子城	吉田町	鷹山：船子守左衛門。	
27	馬場城	吉田町	鷹山：佐々木虎之。	
28	嵐水頭城	吉田町		
29	田子城	田子町	鷹山：佐々木左衛門。南部守貴、 京家織田前の所主。	
30	駒頭城	田子町		
31	根木城	田子町	鷹山：土代氏。	
32	原城(工藤城)	田子町	鷹山：原氏。	
33	白石城	田子町	鷹山：白石氏。	
34	茂市城	田子町	鷹山：茂市守。	
35	並沢城	一戸町	鷹山：小笠原(足利)氏。九戸の私 の城跡。岩井文調編453・490集。	
36	酒上城	一戸町	鷹山。	
37	月折城	二戸町	聚雲、平場、空堀。	
38	鹿谷城	一戸町	聚雲。	
39	野々上城	二戸町	聚雲。	
40	下山月城	二戸町		
41	国(鶴)(金田一城)	一戸町	聚、由輪、上戸。	
42	沖1	二戸町	鷹山:筑毛城跡。岩井文調編125集。	
43	八ツ長尾	一戸町	聚六・逐物跡7。岩井文調編168集。	
44	唐野城(小谷城)	一戸町	聚、平場。領主：唐野正。	
45	長瀬D	一戸町	聚六・逐物跡6。岩井文調編22集。	
46	高浜C	一戸町	聚六・逐物跡6。岩井文調編22・51集。	
47	佐々木神(赤沢城)	一戸町	鷹山：佐々木氏。	
48	沢内B	一戸町	聚六・逐物跡4。岩井文調編7集。	
49	家の上	二戸町	鷹山:守護代。岩井文調編35集。	
50	木沢(エンタ)	一戸町	石井文調編26・402集。	
51	下村	一戸町	鷹山:守護代。岩井文調編32集。	
52	中曾根	二戸町	中曾根満清。	
53	丸戸城	二戸町	九戸氏居城。赤雲、聚、平曇、諸物 跡など。二戸町教委調査。	
No.	地名・漢詩名	所在地	参考(城主・道場等)	備考(城主・道場等)
54	佐羽小路	二戸町		独立林棲物語、備前、阿祖屋、九戸 城開拓、二戸町教委調査。
55	横浦	二戸町		喜平(横浦)・九戸城主の一部)。二 戸町教委調査。
56	村松路	二戸町		
57	坂本道(白鳥隊)	二戸町	舟輪、船。	
58	源訪間	二戸町		聚雲時代の恩詔跡。源、舟、橋、岩 川文調編4集。二戸町教委調査。
59	石切所館	二戸町	平場、廣。	
60	上屋	二戸町		赤井建物跡)。源。岩井文調編56集。 石切所跡と同跡か。
61	若崎館	二戸町		
62	久松館	二戸町	聚、平曇。	
63	狹霧(狭霧)城	二戸町	堀、平曇。	
64	下斗米間	二戸町	舟輪、船。雄主：下斗米氏。	
65	上斗米古跡	二戸町		
66	田中殿	二戸町	雄主：田中忠正。舟輪、船。	
67	上斗米館	二戸町	雄主：上斗米氏。	
68	鶴見駅	二戸町		
69	米征館	二戸町	舟輪、聚。	
70	足沢館	二戸町		雄主：足沢氏(南部一門)・九戸の 乱直前、浅野家家臣・浅野重吉尼館。
71	本田新	二戸町		
72	越崎	二戸町	堀、平曇。	
73	似白館	二戸町	堀上：似鳥左近。丸戸口。	
74	大河殿	二戸町		
75	福田館	二戸町	堀上：津田本計。丸戸口。	
76	島風森	二戸町		
77	八木武闘	二戸町	曲輪。	
78	鷺ノ口跡	二戸町	夜郎。	
79	小高城	二戸町	曲輪、膳所船、聚。	
80	吉法寺跡(妙心)	二戸町	堀上：西法寺氏。丸戸方。寶都、堀。	
81	松原館	二戸町		
82	雄山館	一戸町	堀上：浅山氏。丸戸口。曲輪、堀。	
83	一戸城	一戸町	北歎、八幡櫻、神明櫻。常左衛門の 跡。領主：一戸氏。一戸町教委調査。	
84	野沢館	一戸町		
85	上野(上野日)	一戸町		帯曲輪、空穴建物跡。岩井文調編 339集。一戸町教委調査。
86	根反城	一戸町		鉢平・桂作左衛門。平場、堀。
87	老ヶ原	一戸町		曲輪、聚雲、聚。
88	鶴城	一戸町		創主：鶴間重政(九戸氏一氏)。天正 19年落成。一戸町教委調査。
89	五月城(小谷城)	一戸町		雄主：小鳥谷景元(丸)の丸で赤城 城に築城)。岩井文調編424集。
90	新旗城跡II	一戸町		
91	女坂屋	一戸町	鉢平；女坂長左。曲輪、普段輪、堀。	
92	女坂谷(内側)	一戸町		
93	中里塙	一戸町		領主：中里人氣。夜郎、堀。
94	小友館	一戸町		曲輪、聚。新キ：月飴丸。津法寺氏 一戸の居館とも云われている。
95	半在家館	一戸町		
96	月船館	一戸町		堀上：月船社对左衛門。舟輪、二 重堀。
97	掛投館	一戸町		草野、平場、聚。
98	月窟山津平	一戸町		舟輪跡、草野、堀、堀、上戸。
99	内ノ沢堅	一戸町		
100	草向館	一戸町		
101	酒消水館	一戸町		草野、三重堀。
102	沢内館	一戸町		堀上：沢内乃左衛門。曲輪、堀。
103	川又館	津法寺町		
104	長波路館	津法寺町		
105	ノゾク	津法寺町		
106	長波路館	津法寺町		

番号	地名・遺跡名	所在地	備考(城主・遺構等)
106	漆沢館	浄法寺町	室主: 漆沢氏。
108	宮浜館	浄法寺町	
109	松原館	浄法寺町	室主: 松岡原宿(浄法寺一門)。
110	コアスカ館	浄法寺町	
111	飛鳥古跡	浄法寺町	穴六建物跡3。岩佐文調跡120處。
112	船Ⅱ	浄法寺町	山森、源、大溝、千畠、整穴建物跡、 掘立柱建物跡など。船Ⅱ遺跡。
123	不動院	浄法寺町	東、千畠、兼且造跡と認定。
124	吉田館	浄法寺町	室主: 吉田昌郎。町敷調査。
125	荒谷館	浄法寺町	室主: 荒谷勝右衛門。
126	江守館	浄法寺町	
127	小御内館	浄法寺町	
128	アイヌ館	浄法寺町	
129	里川山館	浄法寺町	
130	田子内館	浄法寺町	
121	浦山内館	浄法寺町	
122	深原塙	浄法寺町	
123	淨法寺城	浄法寺町	浄法寺氏の城跡。無輪、埴、掘立柱 建物など。町敷委託五。
124	太田塙	浄法寺町	太田氏(浄法寺一門)。
125	太田向館	浄法寺町	

8) 個々の中世城館の城主とその立場が判明している訳ではなく、三戸・九戸両陣営が具体にどの程度の勢力圈を有したのかはわからぬ。例えば、前述のとおり、浄法寺宗主・重安が「貢して信臣庶だったのに対し、一族の宮田氏や福田氏らが九戸方にいていた事実があり、各地域で両陣営の籠が混在する状況だったものと思われる。

9) 許(2) 参照。「[二]郡志」(1977)によれば、「浄法寺街道」とは、一戸と浄法寺を結ぶ街道で、一戸・島崎から浄法寺御山へ繋えて浄法寺宮道へ扇角街道(現・県道二・五十五市線)へ合流するものである。全長三里二・十九町(約14.86km)、幅二・四間(約2.6~7.3m)の大道で、晩江真澄が一戸へと通った道である。一方、「北上奥路經記」では、二戸・福岡から荒屋曲印(現・八幡平市)へ至る、全長八里四・三町(34.91km)、幅員二間(2.6m)の道。現在の県道を「浄法寺街道」と称している(岩手県教委1981)。ここでは、江戸時代の絵図の記載等を参照して、前者の説を探って便宜的に浄法寺街道と呼ぶこととする。なお、この「浄法寺街道」沿いには、月船館(96)、岩清水館(99)、中里館(93)、小友館(94)など多くの城館が配置されており、浄法寺を経由して扇角方面と一戸・二戸方面を結ぶ当街道の重要性が窺い知れる。

10) 荒谷館(115)、江守館(116)、太田塙(121)、上杉沢館(126)など、前跡が密集している浄法寺の芦名沢・多々良沢の沢筋にも、田丁・雁丘方面や田丁方面へと繋がる道が存在していたであろう。絵図等では正確ならず・トが読み取れないものの、現遺とそれほどのズレはないものと思われる。

11) 沿線、前掲書、197~198頁。

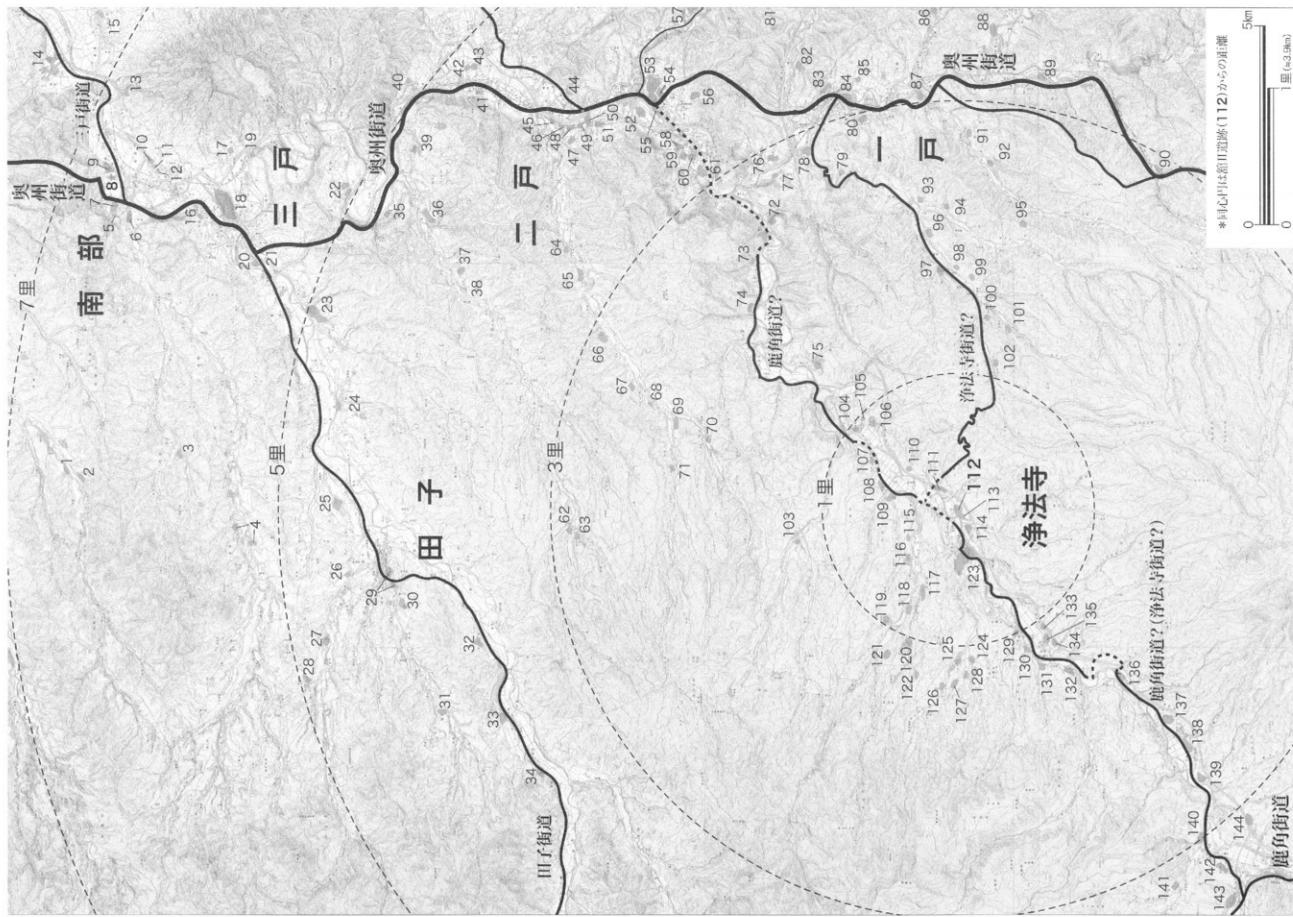
(3) 発掘調査から得られた知見

[縄張り](第69図)

館Ⅱ遺跡は、蛇行しながら北東流する安比川右岸の沖積地に対して張り出す北向きの丘陵上に立地し、標高は209~221mを測る。館跡は、丘陵尾根の先端部を利用してつくられた山城で、東西両側は谷地形を利用し、南邊は尾根を横断する堀で区画防御する構えとなっており、全体の規模は東西約250m、南北約300mの範囲に及ぶ。曲輪と堀を含めた面積は約75,000m²である。縄張りは東西2つの曲輪で構成され、今回の調査区は東側曲輪の北西隅から西側曲輪の北半部緩斜面上にかかる。

東側曲輪(陣場): 東側曲輪の頂上部には山城の中心となる平坦地があり、現在は墓地・煙地となっている。北方にあたる斜面下方にはこれらを取り囲むように階段状の平坦地群(註1)が配置され、通路が各平坦地を繋ぐ。これらの平坦地群は北東側を自然の沢状の落ち込みにより、北西側を掘跡群により限られている。北側は幾重にも巡らされた平坦地群により比較的守りが堅いのに対し、東側は自然の沢地形によって守られているに過ぎず、殆ど普請の手が加えられていない。南側においては、地表面観察によると堀状の浅い崖みと、崖みの両側に取り付く低い土壠状の高まりが確認できたことから、本曲輪の南端の防御はこの堀と土壠によっているものと推測される。全体的に北側に比して東・南側の守りは薄く、この方面からの敵の侵攻をそれほど意識した縄張りとはなっていないようと思われる(註2)。虎口は北西、北東、西側にA~C・Gの計4箇所が想定され、各々最上位の平坦地に通じている。

番号	地名・遺跡名	所在地	備考(城主・遺構等)
126	上杉沢館	浄法寺町	
127	小柳沢館	浄法寺町	
128	タテシロ館	浄法寺町	
129	大森館	浄法寺町	室主: 大森氏。後醍醐1991・文化庁 1983等に記載。現古棟に疊置なし。
130	小森館	浄法寺町	
131	下谷地館	浄法寺町	
132	大渡水館	浄法寺町	室主: 大渡水氏。
133	上渡Ⅱ	浄法寺町	空穴建物20。舟底状2、掘立柱構築 1。岩清水調跡91集。
134	下渡	浄法寺町	空穴建物跡。岩清水調跡97集。
135	崩ケ駒館	浄法寺町	崩ケ駒氏(浄法寺一門)。
136	下森	浄法寺町	
137	下ノ印館	安代町	
138	北ノ城跡	安代町	刻。岩清水調跡438集。
139	八幡宿	安代町	
140	五日市館	安代町	
141	日向官舎	安代町	
142	久次野館	安代町	空穴建物跡。岩清水調跡303集。
143	上の山館	安代町	
144	小井御館	安代町	空穴建物跡。岩清水調跡43集。



第65図 三戸郡・二戸郡における中世城館分布図



第66図 周辺の館跡縄張り図 (S = 1:10,000)

©古田・不動院・鎌目道連の櫛張り図は柴野秀文氏作成のものに基づいている。

西側曲輪（中館）：西側曲輪の頂部には北東—南西方向に細長い平坦地が存在する（註3）。この平坦地は北側において小規模なクランク状の二重突出部を形成しており、斜面下方にはこれを取り囲むように、階段状の平坦地群が配置されている。この平坦地の東側には縁辺部に沿って3方向に土塁が巡らされ、このうち南東方向に延びるものは南側の堀底へ接続し、その後耕形状に屈曲して虎口状をなす（F）。このほかに虎口が想定される地点は本曲輪内に数箇所存在する（D・E・G）。1つは3号平坦地の西側において最も周囲より落ち込む地点Gで、北側は3号平坦地、南側は陣場の最頂部および南側の堀へと通じる。この地点には丸太材の小階段が付けられ、山への登り口として今に痕跡を残している。一方、東側の堀底面を伝わって入城する経路D・Eも想定できる。但し、これらは現地踏査による地表面観察から推定したものであり、発掘調査に基づくものではないため詳細は不明である。調査区南西側にあたる平坦地、及び切岸状造構は後世の耕地造成の際、局所的ではあるがV～VI層上位まで掘削されており、この部分の平坦地の範囲が不明瞭となっている（2・3号平坦地）。

註

- 1) 堀、土塁に囲まれた城域内には、北から南方向に緩く傾斜する尾根の自然地形を利用して人工的に造られた平坦地が数段確認でき、断面からは普清（切り盛り）の痕跡を認める事ができる。本報告書では便宜上、このように堀、土塁によって防備された平坦地のことを「郭・曲輪」、曲輪内部の斜面上に形成された階段状の平場を「平坦地」と呼称して両者を区別した。
- 2) 陣場の南側には現在東北自動車道が通っており、繩張りの南端が不明瞭となっている。この付近は地形図においても不自然な地形が観察され、本来の繩張りが改変されている可能性が高い。
- 3) 地元の方より中量の位置する曲輪最上位の平場地に「馬屋」があったという言い伝えを伺っている。

周辺の館・街道との関係：館II遺跡は安比川の右岸に張り出す丘陵縁辺部に立地する。本遺跡と谷を隔てた西側には同じく中世山城「不動館」があり、西側を安比川の断崖と接し、東—南側を二重の堀で区切った内部に狭い平坦地と腰曲輪を持つ。地元では、これを含めて東側から「陣場」、「中館」、「お不動様」と呼び習わしている（写真図版1）。やや遠方に目を転すれば、西方約1000mに浄法寺氏の居館である浄法寺城、南西方約400mには浄法寺氏配下の土豪とされる吉田氏の居館「吉田館」がある。11月18～19日にかけて実施した周辺踏査の折、不動館から吉田館にかけて通じる古い道路跡



第67図 館II遺跡虎口・連絡路想定図

を確認した（右下写真）。このことから、地理的には館II遺跡・不動館と同様に吉田館もまた、相互に密接に関連していた施設である可能性を想定できる。

次に街道について。本山城は地理的に鹿角街道・浄法寺街道など交通の要衝に近く、街道を経由して当地入りする近隣諸氏の動向を監視するには好立地であったと考えられる。加えて当時隆盛を誇った九戸氏やその周辺勢力、これと対立する三戸南部氏勢（浄法寺氏を含む）、双方の動向に常に目を配れる地点に立地する。また、必然的に鹿角・浄法寺・奥州街道を通って入城する敵を迎撃すること、街道から攻め入られた場合を想定し



て枝道の両側に館を築き、有事の際の通行の遮断と監視を行うことに、本山城を造った主たる理由があったと推測される。縄張り図からは、道の両側に防衛の主力を向いている様子が読み取れる。

〔絵図（巻頭カラー写真1・2）〕

盛岡市中央公民館所蔵の御旧領之内福岡通絵図と、岩手県立図書館所蔵の岩手県管轄陸奥国二戸郡御山村を確認することができた。いずれも絵図の年代は不明であるが、描かれた手法から前者のほうが前出と考えられる（巻頭図版参照）。前者によると安比川は現在の流路と大分異なって描かれる。現在、安比川は駒ヶ嶺を抜け吉田館に差し掛かる手前でやや東側に膨らみ、不動館の立地する崖にぶつかり北側に屈曲しながら清水尻を抜けるが、絵図によればこの区間の川はほとんど蛇行せず北流する。調査区のある地点には吉田村、御山村、清水尻の地名が見え、館II遺跡（陣場）に相当する部分には「侍屋敷」の地名が確認できる。次に街道であるが、館II遺跡と不動館の間を通る旧道の存在を絵図から確認することができる。実際にはこの道はほどなく西へ分岐し、吉田館へと抜けるのであるが、絵図には詳細が表現されていない。一方、時代がやや降って後者の絵図では、川と丘陵縁辺部の位置関係が大分正確さを欠くものの、大きくカーブを描く不動館周辺の安比川の流路については現在に近いものとして表現されている。平成17年11月18～19日に盛岡市遺跡の学び館の室野氏の指導のもと実施した現地の地形観察において、不動館の位置する曲輪の西側に崩落に伴う残崖が確認され、縄張りの構造からも以前は更に西側に張り出していた可能性をご指摘頂いている。このことを鑑みれば両者の絵図が描かれた時間幅の中で崖の崩落や流路の変更などの地形変化が起きた可能性もあるいは想定できるのかも知れない。後者の絵図では調査区のある地点は吉田川と安比内澤に挟まれた地区にあるが、そこには清水尻、大久保、館などの地名が見え、館II遺跡の載る山稜尾根部分には「古館」の表記を確認することができる。

〔曲輪内に見つかった普請の跡〕

平坦地・切岸状遺構

平坦地1～6が調査され、整地層、掘立柱建物跡、堅穴建物跡、堅穴状遺構などが確認された。整地層は平坦地1の北西側、平坦地2の西側縁辺部に認められ、これにより旧地形の丘陵緩斜面が階段状の平坦面に造成されている。調査区南西側の2・3号平坦地、及び1・2号切岸状遺構は後世の耕地造成の際、局所的にV～VI層上位まで掘削されており、この部分の平坦地の範囲が不明瞭となっている。また、4号平坦地の南端部は切土造成され、本来の2～4号平坦地の範囲・整地の痕跡が失われている。3号平坦地は本米、細く外縁部を巡る帶曲輪状を呈する可能性がある。

堀跡・大溝跡・土壙跡

堀跡3条・溝跡2条（計5条）と、土壙1箇所が確認された。これらの遺構は直接切り合いかなく、

新旧関係の把握が困難である。堀はすべて空堀で、作事跡との重複関係、人為堆積層の確認などより、時間差を持って構築されたものと考えられる。その中で確認できたのは以下の3点である。①3号堀跡が1号上塁の埋土（人為堆積）で埋まる ②1号堀跡の堆積土下位に、2号堀跡の掘削土と見られる地山層（但し、壁面崩落上の可能性も有）が堆積する ③3号堀跡埋め立て後に堅穴建物跡群が造られる。これらの事実から普請の新旧を想定した場合、大局的には1・3号堀跡・1号土塁が最も古く、次いで2号堀跡・1号大溝跡、5号堀跡が造られたものと考えられる。

【曲輪内でみつかった作事の跡】

曲輪内部からは、3種類の建物跡が造られる地点を異にしながら見つかっている。掘立柱建物跡は2号平坦地の山際に位置する。1号掘立柱建物跡は梁間4間・桁行7間の建物跡で、多用される柱間寸法は梁行170cm(5.61尺)、桁行200cm(6.6尺)～220cm(7.26尺)である。周辺には建物跡と軸方向を同一にする柱穴（柱穴状小ピット群）も少なからず存在することから、本来は2～3回の建て替えがあったと考えられる。堅穴建物はその殆どが平坦地4の縁邊および3号堀跡の埋め立て地付近に集中して分布する。これらは建物同士が近接・重複する事から本来は更に時期細分されると考えられる。切岸状造構は1・2号平坦地と接続する2箇所が確認されている。また、両切岸状造構の裾部と壁面を接するように1～4号堅穴状造構が検出されている。1～4号堅穴状造構はその後、門跡（？）、掘立柱建物跡の作事の際に壊されている。また、2号平坦地に位置する掘立柱建物跡は、近接する堅穴状造構を切って平場を造成しており、これより新しい。このほかV・VI層地山面で（一部、整地層を切る）柱穴が558基確認されており、掘立柱建物跡等の可能性が考えられたが、建物配置を確認するには至らなかった。

【縄張りの変遷】

縄張りの変遷については、遺構同士の直接的な重複が少なく、重複している場合も出土遺物が殆どないことから推定するのが困難であった。そのため作事の位置関係や埋土の堆積状況から推測せざるを得ず、前後関係は確実ではない。今回は本調査区の縄張りの変遷について一応の見解を述べる。

第Ⅰ期：1号堀跡、3号堀跡、1号上塁

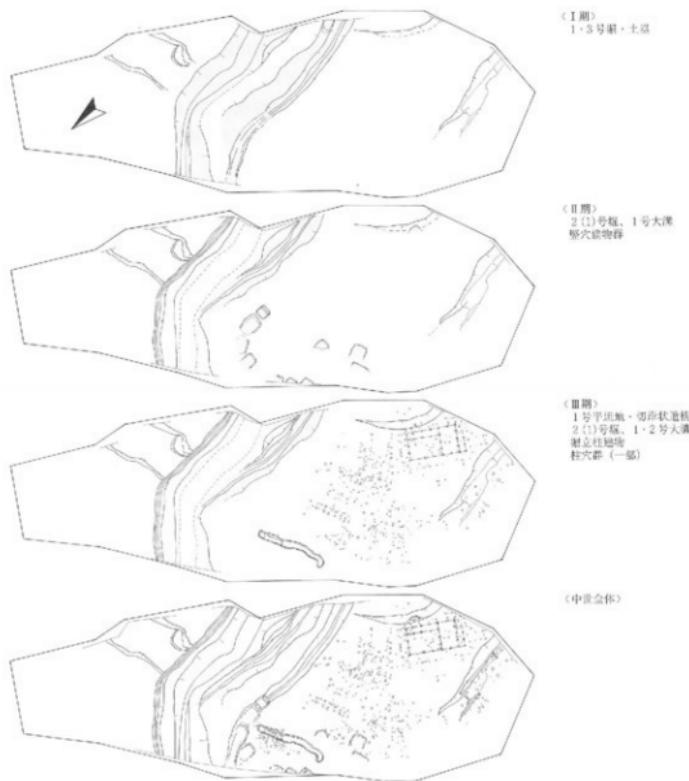
1号堀跡は自然の沢を利用した堀で、最初の段階から存在したと考えられる。3号堀跡は切り合い関係から堅穴建物跡群より確実に古期で、1号土塁構築上による東側一方からの人為的埋め戻しが行われている。よって3号堀跡と1号土塁とは同時存在と考えられる。これと堅穴建物跡群との切り合い関係から本期をⅠ期と仮定する。本期は1号堀跡・3号堀跡との土塁を伴う二重堀を形成していたと推測される。

第Ⅱ期：2（1）号堀跡、1号大溝跡、堅穴建物跡群

1号堀跡は大部分が自然埋没による堆積状況を示すが、第14層に白色の地山上の一括堆積が認められる。これは西側堀壁面崩落土、もしくは2号堀跡構築時の掘削土（人為堆積土）の双方の可能性が考えられる。貫した断面により1号堀跡との重複関係を把握できないことから根拠はやや不十分とならざるを得ないが、ここで2号堀跡が新しいと判断した場合、Ⅱ期以降にあたるとみられる。そうであれば、この時点で1号堀跡は完全に埋没しきっていない状況で使用されていたことになる。1号大溝跡については不明な点が多いが、本館跡が各時期に亘って二重堀の防御性を保持していたと仮定した場合、本期にあたる。但しⅠ期の段階で既に三重堀であった可能性もある。

第Ⅲ期：1号平坦地、1号切岸状造構、2（・1）号堀跡、1・2号大溝跡、掘立柱建物跡、一部柱穴群

2号堀跡が1号堀跡より新期と判断すればⅢ期以降となるため、本期まで含める。1号掘立柱建物跡については、検出面（2号平坦地）と5号堅穴状造構の床面との関係から、5号堅穴建物跡よりも



第68図 館II遺跡縦張り変遷想定図（中世）

新期と考えられる。但し、その場合2号平坦地全体が更に削平されたことになる。5号堀跡は、竪穴建物跡群との位置関係からみて、それらより新期であることから本期に含めた。

全體：西側竪穴状遺構、1号門跡？

時期不明であることから時期別図に含めていないが、両者ともに3号平坦地南側に位置する。両者は新旧が認められ、竪穴状遺構の床面を壊して、門跡の掘り込みが造られている。竪穴状遺構は埋土下位から鉄製品が出土していることから中世としたが、盛土整地層の下位との境界付近にもあたり、断定はできない。

これまでの事柄をまとめると以下のようになる。

1. 館II遺跡については文献資料や伝承が乏しく館主も不明であるが、地理的な環境から判断して浄法寺氏配下の在地領主の館であった可能性がある。歴史的背景からみると15世紀末葉～16世紀中頃にかけては九戸氏が新興勢力として台頭し二戸に進出する動きを強める。本館の造営理由としては、このような動きの中で浄法寺氏を含む三戸南部方が九戸方に対抗するために造営した山城群のうち

の一つであったと考えられる。

- 2 調査区の網張り変遷には、遺構の重複関係から少なくとも3時期あり、それぞれ堀跡と土塁、堀跡と堅穴建物跡、大溝跡と掘立柱建物跡を主体とする時期で構成されていた可能性がある。但し遺構間の直接的な重複が少なく、重複している場合も出土遺物が殆どないため、作事の位置関係や埋上の堆積状況から推測したものであり、前後関係は確実ではない。
- 3 館II遺跡の周辺には多数の山城があり、これらの位置関係から①館II遺跡と不動館が併存していた可能性、②これに加え吉田館が併存した可能性などが考えられる。後者の可能性としては、吉田館の專守防衛の為に街道を押さえ目的で吉田氏自身が築いた出城などの可能性も残される。
- 4 出土遺物が少ないため館の性格は判然としないが、調査区から出土した大堀I期の端反り皿の口縁部片が16世紀代のものであることから館II遺跡の造営時期は上限が16前半代～中頃とみられ、16世紀後半には淨法寺城と並存していたと考えられる。また、このほか古鏡、茶臼、石鉢片などが出土しており、少ない[1]にも当時の状況を推測する上で貴重な資料が得られた。

おわりに

館II遺跡は先記のように、2つの区画（曲輪）から構成されている山城であり、道を挟んで隣接する不動館を含めそれが連携しながら機能していたものと考えられる。これを含めた3つの館の網張りと地形観察から判断する限りでは、不動館の造りが3つのなかで一番丁寧であり、土塁の形状も高く堅固なことから最も古くから存在した曲輪である可能性がある。中館は占地から不動館と対となり街道の監視と封鎖を担う目的で造られた曲輪と考えられる。この中館と接して東側に位置する陣場は、網張りの造り、特に東側・南側の防御性の薄さから推測して一番後に普請が開始された曲輪と考えられ、現在の網張りの段階で山城が役割を終えた可能性がある。しかしながら発掘調査が行われたのは陣場と中館にあたる限られた一部分で、周辺エリアの調査が未だ行われていない段階にあり、出土遺構や遺物からの情報もないため、不明な点が数多い。周辺の山城の発掘調査が進んだ段階で、包括的な検討がなされる必要があろう。

(丸山直美)

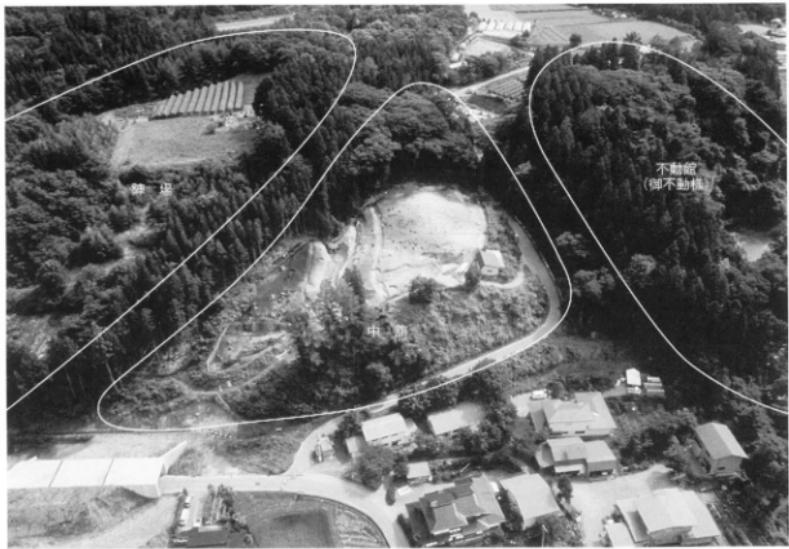
引用・参考文献

- 桐山秀穂 1996 「日本における茶臼の研究」『古代学研究所研究紀要 第6号』:43~100, 古代学研究所
 青森県教委 1983 「青森県の中世城館」『北海道・東北地方の中世城館①北海道・青森・秋田』水洋書林、所収
 一戸町教委 1982 「一戸バイパス関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ(一戸城跡)」一戸町文化財調査報告書第2集
 岩手県 1961 「岩手歴史 第3巻(中世編、下)」
 岩手県 1979 「北上山系開拓地域 十字分岐基本調査 淨法寺」岩手県農地林務部
 岩手県教委 1979 「岩手縣「歴史の道」調査報告 奥州道中」岩手県文化財調査報告書第367集
 岩手県教委 1970 「岩手県「歴史の道」調査報告 鹿角街道」岩手県文化財調査報告書第467集
 岩手県教委 1981 「岩手縣「歴史の道」調査報告 淨法寺・八戸街道」岩手県文化財調査報告書第67集
 岩手県教委 1986 「岩手県中世城跡分布調査報告書」岩手県文化財調査報告書第82集
 楽部哲次郎 1971 「二戸郡・九戸郡古城館跡考」東北民俗研究会(二戸)
 —— 1977 「二戸郡誌」〔縮刷版〕二戸郡誌編纂委員会、編、名著出版会(東京)
 —— 1995 「国史 地図版 岩手県の歴史」織井伸、編、河出書房新社(東京)
 —— 1998 「山部史要 全」〔第5版〕
 —— 1998 「東北の街道」渡辺信夫、監修、無明舎出版、編(秋山)
 —— 2002 「北奥羽路程記」岩手県文化財愛護協会、編
 —— 2002 「奥州街道」無明舎出版、編(秋山)
 沼田寺町教委 1981 「南部諸城の研究」伊古書院(八戸)
 淨法寺町教委 1998 「浄法寺城跡 平成9年度町内遺跡詳細分布調査概報」



第69図 館II遺跡（陣場・中館）・不動館縦張り図

写 真 図 版



遺跡近景（北から）



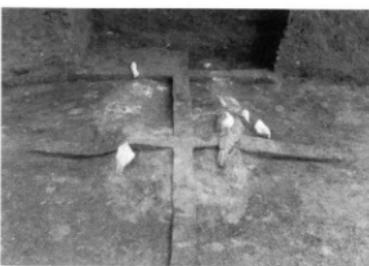
遺跡近景（南西から）

写真図版1 空中写真



1号炉迹

断面①



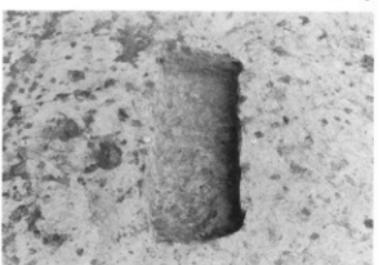
平面



断面②



断面③



1号土坑

平面



断面



2号土坑

平面



断面

写真図版2 1号炉跡・1・2号土坑



3号土坑

平面



断面



5号土坑

平面



断面

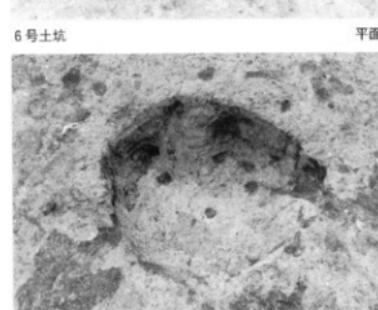


6号土坑

平面

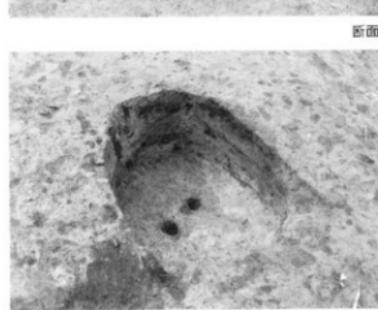


断面



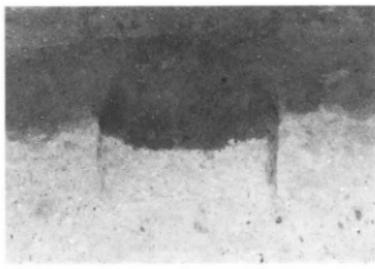
7号土坑

平面



断面

写真図版3 3・5～8号土坑

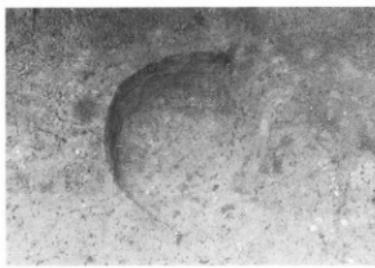


9号土坑

平面



断面



10号土坑

平面



断面

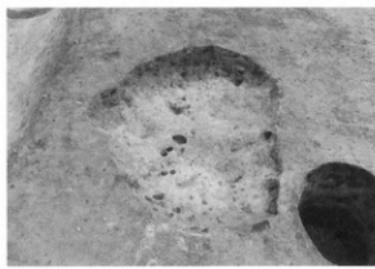


11号土坑

平面



断面



12号土坑

平面



断面

写真図版 4 9～12号土坑



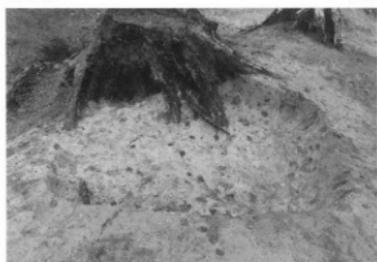
13号土坑

平・断面



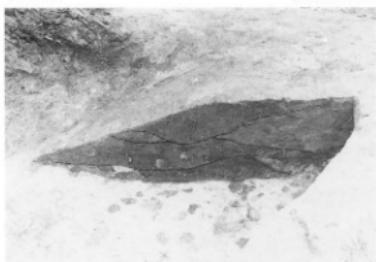
14号土坑

遺物出土状況

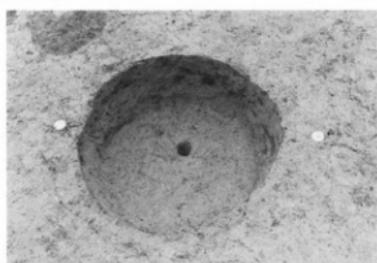


14号土坑

平面

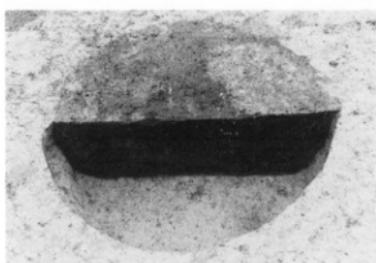


断面

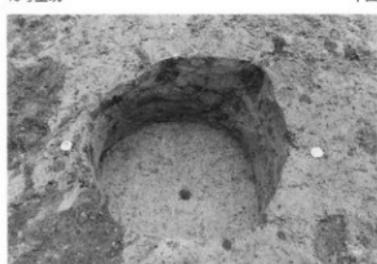


15号土坑

平面



断面



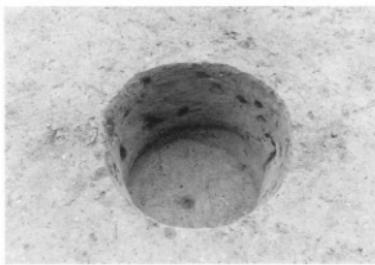
16号土坑

平面

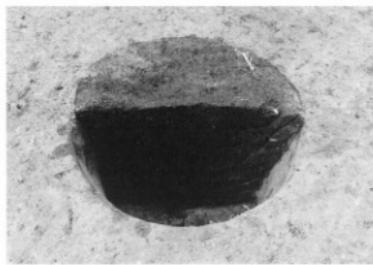


断面

写真図版 5 13~16号土坑



17号土坑



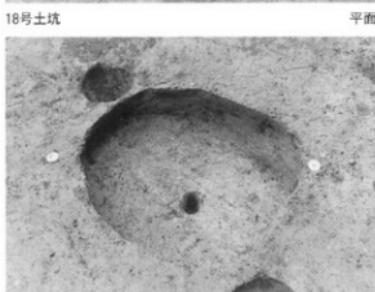
断面



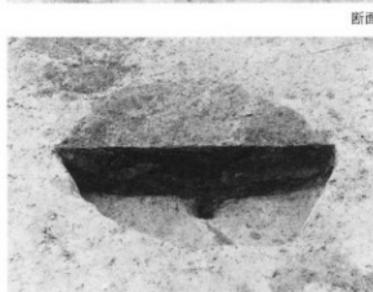
18号土坑



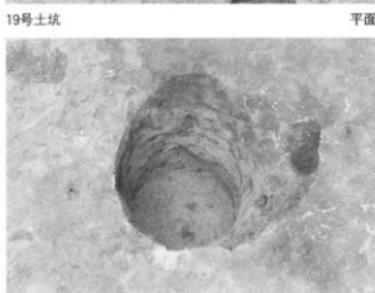
断面



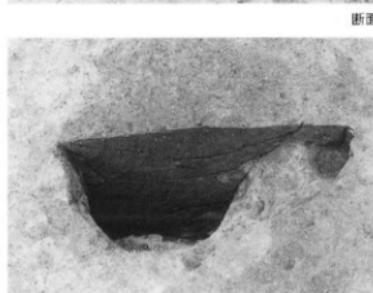
19号土坑



断面



20号土坑



断面



21号土坑

平面

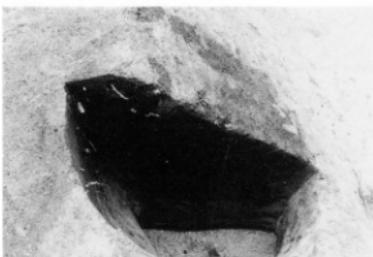


断面

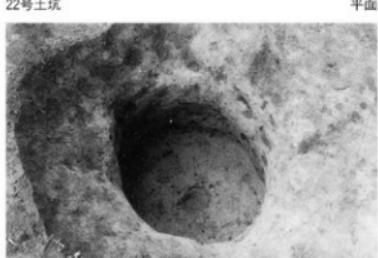


22号土坑

平面

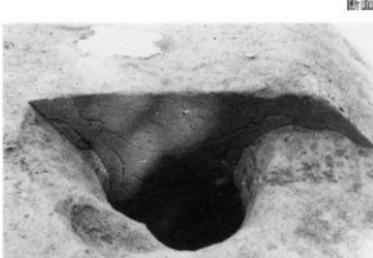


断面

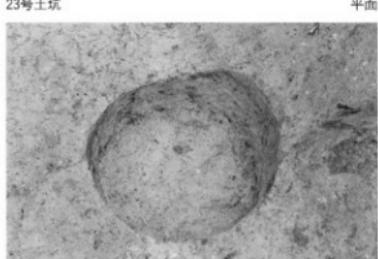


23号土坑

平面



断面



24号土坑

平面



断面

写真図版 7 21~24号土坑

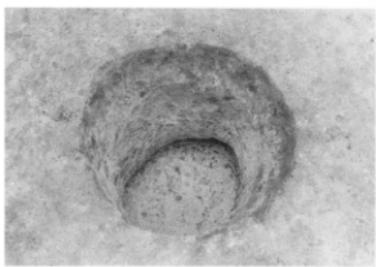


25号土坑



平面

断面

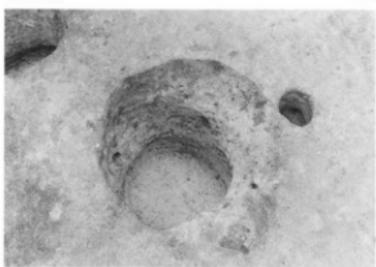


26号土坑

平面



断面



27号土坑

平面



断面



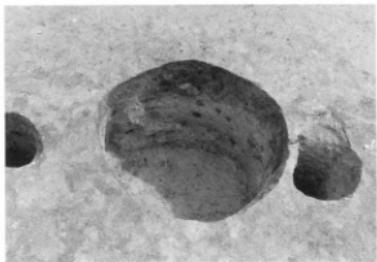
28号土坑

平面



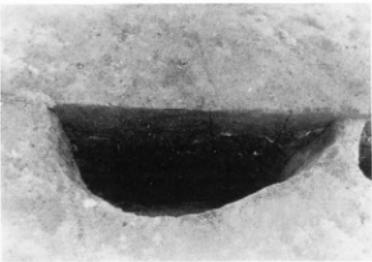
断面

写真図版 8 25~28号土坑



29号土坑

平面

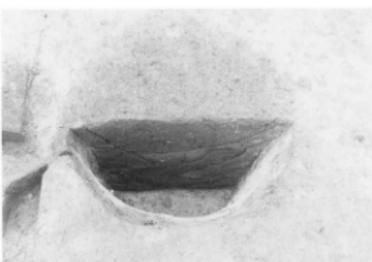


断面

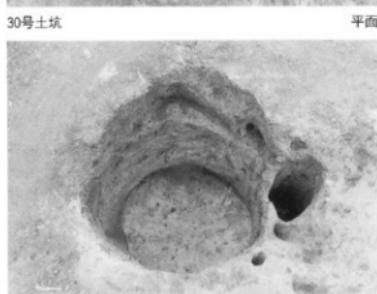


30号土坑

平面



断面

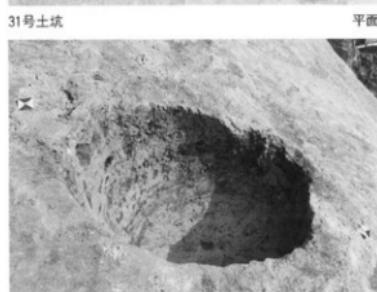


31号土坑

平面

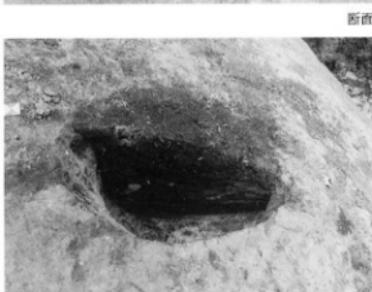


断面



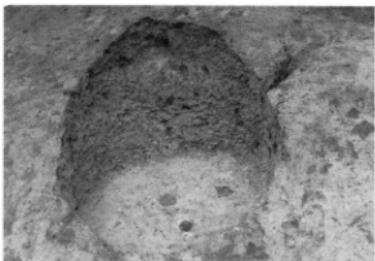
32号土坑

平面



断面

写真図版 9 29~32号土坑



33号土坑

平面

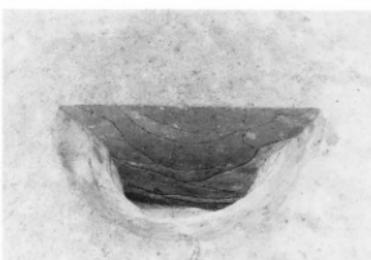


断面



34号土坑

平面

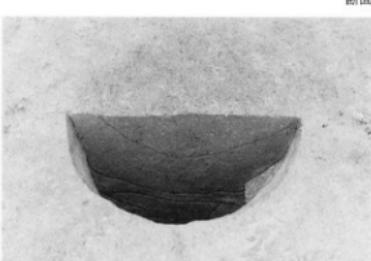


断面



35号土坑

平面

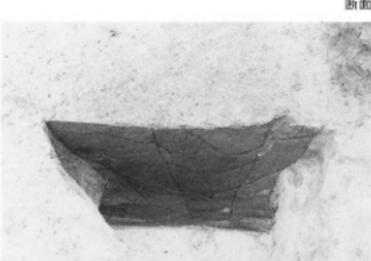


断面



36号土坑

平面



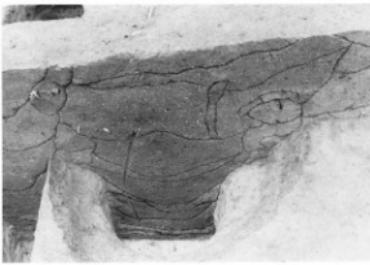
断面

写真図版10 33~36号土坑



37号土坑

平面

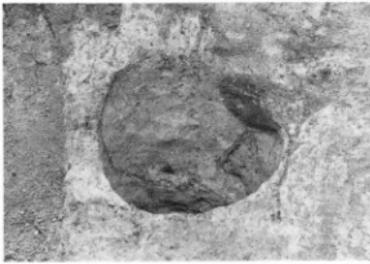


断面



38号土坑

平面



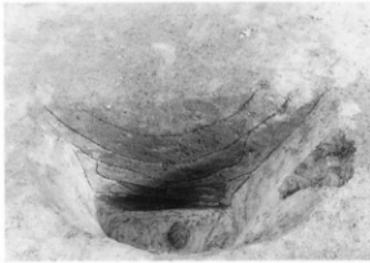
42号土坑

平面



39号土坑

平面



断面



40号土坑

平面



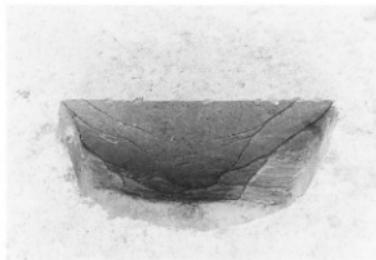
断面

写真図版11 37~40・42号土坑



41号土坑

平面



断面

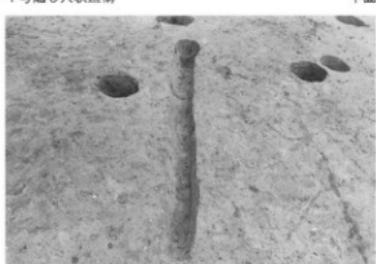


1号陷し穴状遺構

平面



断面



2号陷し穴状遺構

平面



断面



3号陷し穴状遺構

平面



断面

写真図版12 41号土坑・1～3号陷し穴状遺構



4号陷し穴状遺構

平面



断面



5号陷し穴状遺構・4号土坑

平面



断面



6号陷し穴状遺構

平面



断面



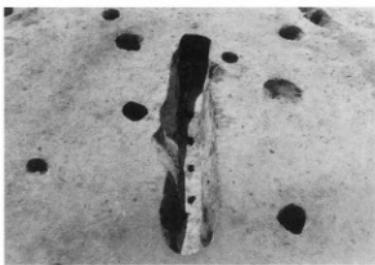
7号陷し穴状遺構

平面



断面

写真図版13 4～7号陷し穴状遺構（4号土坑）



8号陷し穴状遺構

平面



断面

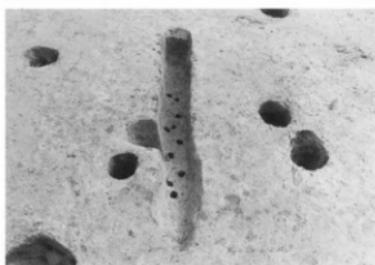


9号陷し穴状遺構

平面



断面



10号陷し穴状遺構

平面



断面



11号陷し穴状遺構

平面



断面

写真図版14 8～11号陷し穴状遺構



12号陥し穴状遺構

平面



断面



13号陥し穴状遺構

平面



断面

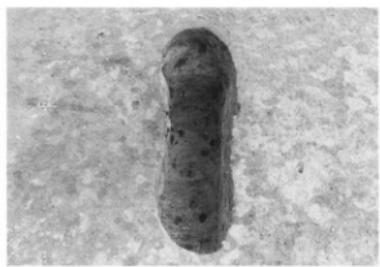


14号陥し穴状遺構

平面



断面



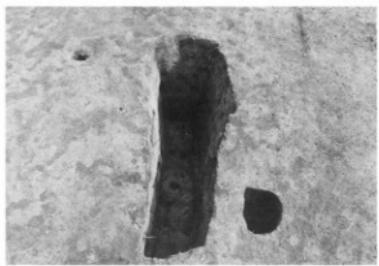
15号陥し穴状遺構

平面



断面

写真図版15 12~15号陥し穴状遺構

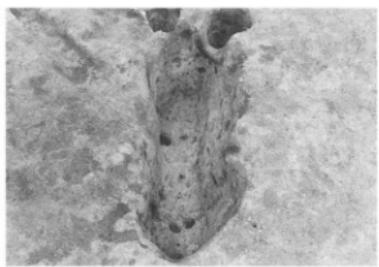


16号陥し穴状遺構

平面



断面



17号陥し穴状遺構

平面



断面



18号陥し穴状遺構

平面



断面



19号陥し穴状遺構

平面



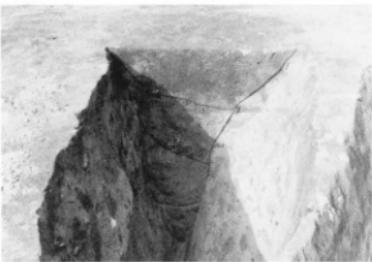
断面

写真図版16 16～19号陥し穴状遺構



20号陷し穴状遺構

平面



断面



21号陷し穴状遺構

平面

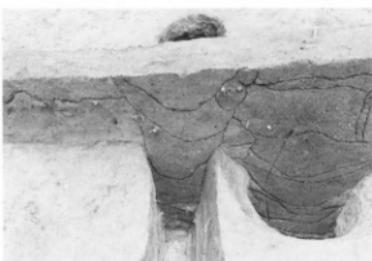


断面



22号陷し穴状遺構

平面



断面



23号陷し穴状遺構

平面



断面

写真図版17 20~23号陷し穴状遺構



完 捲



断 面



1号竖穴住居跡カマド

平 面



断 面

写真図版18 1・2号竖穴住居跡



2号竪穴住居跡カマド

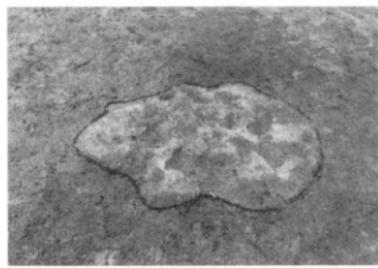


断面



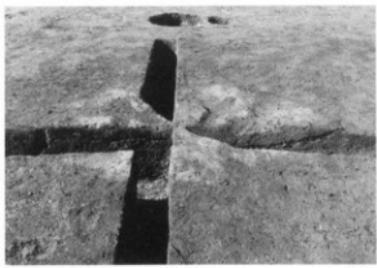
3号竪穴住居跡

平面



1号焼土遺構

平面



断面

写真図版19 2・3号竪穴住居跡・1号焼土遺構



1号平坦地（曲輪）・1号切岸状造構完掘（北西から）



断面①（東から）



断面②（東から）



1号平坦地検出（西から）



盛土断面（東から）

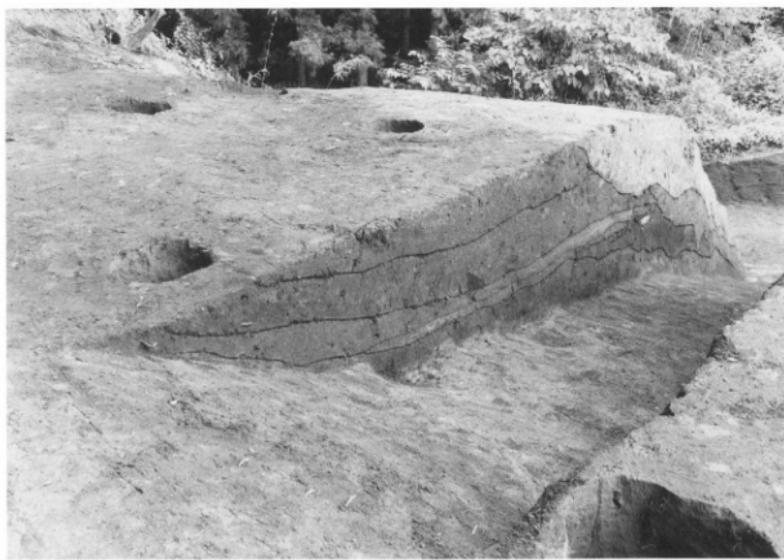
写真図版20 1号平坦地（曲輪）・1号切岸状造構



2号平坦地検出 (東から)



作業風景



断面① (東から)



断面② (西から)



2号切岸状遺構・3号平坦地検出 (北から)

写真図版21 2・3号平坦地 (曲輪・帯曲輪)・2号切岸状遺構



4号平坦地完掘（西から）



5・6号平坦地完掘（北から）

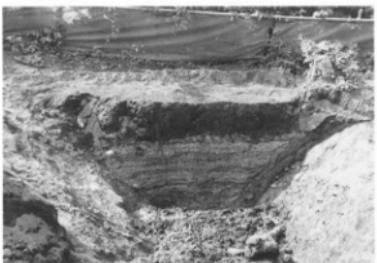
写真図版22 4～6号平坦地（曲輪）



1～3号堀跡・1・2号大溝跡



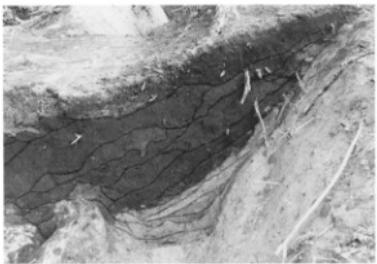
1号堀跡断面①（北から）



1号堀跡断面②（南から）



2号堀跡断面①（北から）



2号堀跡断面②（北から）



2号墳跡完掘（北から）



3号墳跡検出（北から）



3号墳跡断面①（北から）



3号墳跡断面②（南から）

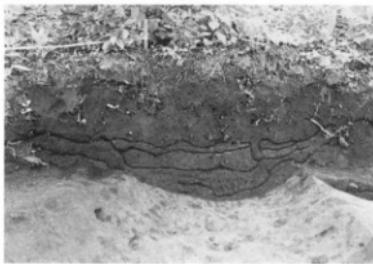


遺物出土状況（北から）

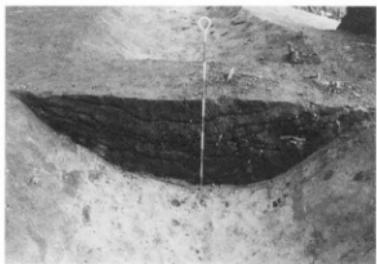
写真図版24 2・3号墳跡・遺物出土状況



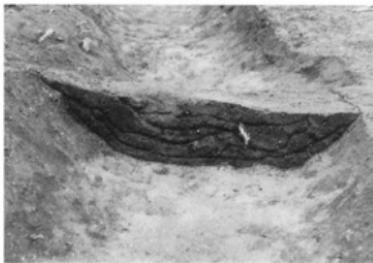
1号大溝跡完掘（北から）



1号大溝跡断面①（北から）



1号大溝跡断面②（北から）



1号大溝跡断面③（北から）



作業風景

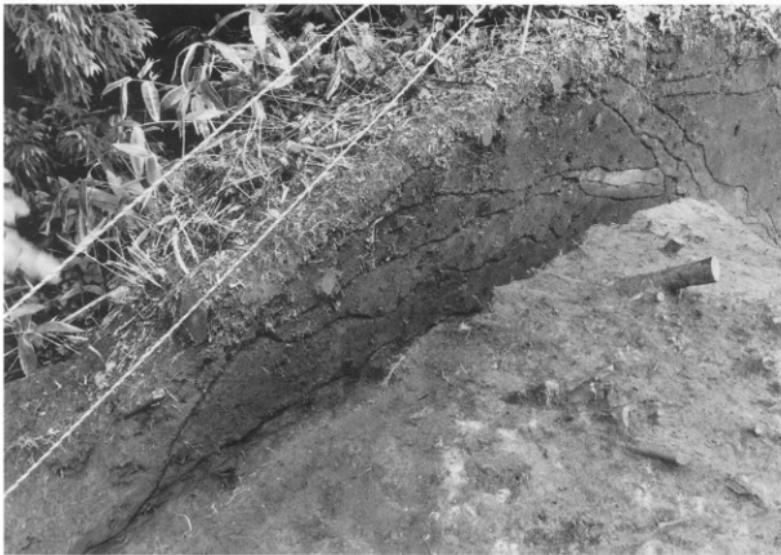
写真図版25 1号大溝跡



2号大溝跡完掘（西から）



2号大溝跡断面（西から）



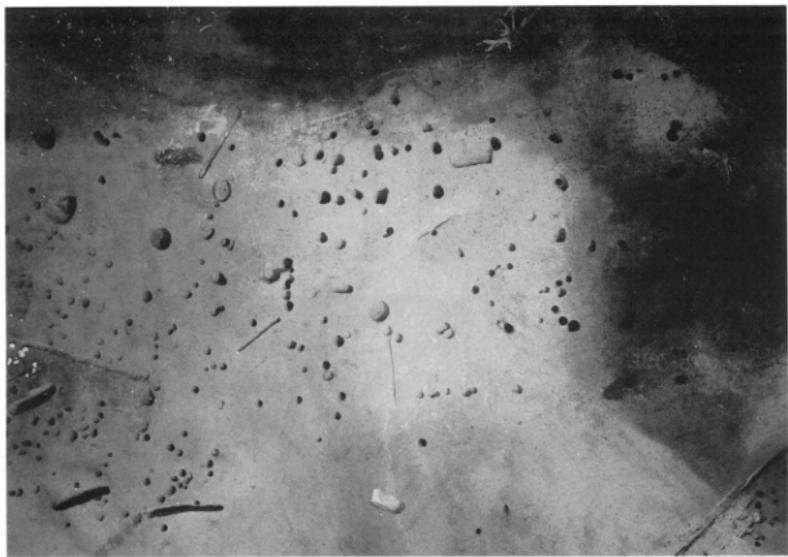
1号土塁断面①（北東から）



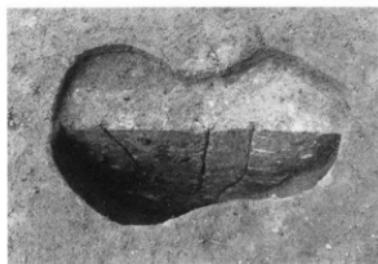
断面②（北から）



現地説明会

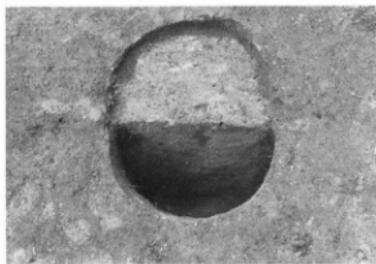


1号掘立柱建物跡完掘



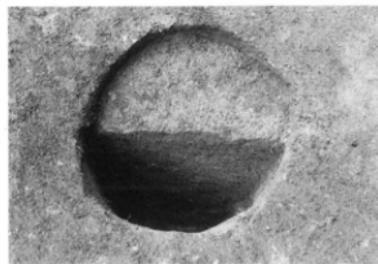
pp 449・498

断面



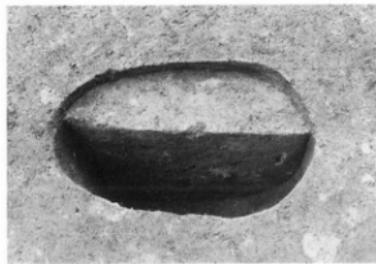
pp 421

断面



pp 452

断面



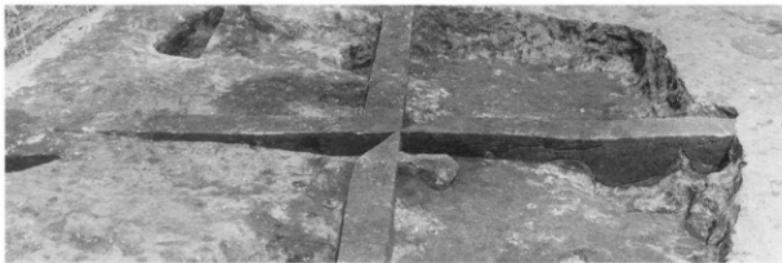
pp 432・431

断面

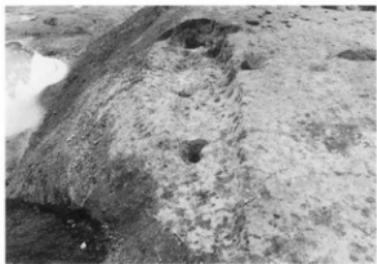
写真図版27 1号掘立柱建物跡



1号竖穴建物跡平面（南から）



1号竖穴建物跡断面（西から）



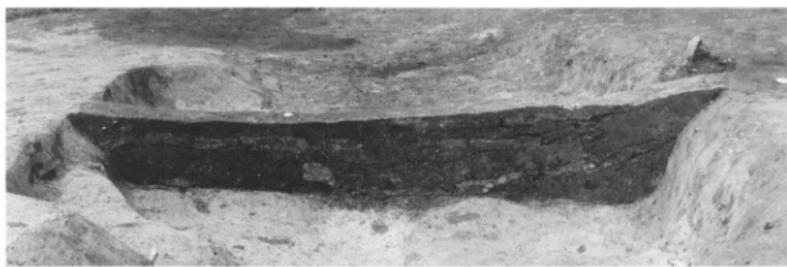
2号竖穴建物跡完掘（西から）



2号竖穴建物跡断面（西から）



3・4号竪穴建物跡完掘（北から）



断面（南から）



p p 9 断面（北から）



p p 3 断面（北から）

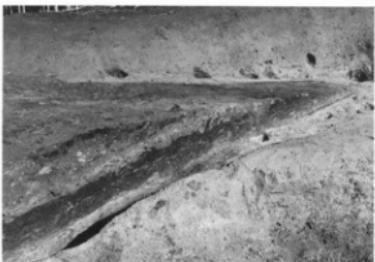
写真図版29 3・4号竪穴建物跡



5号竖穴建物跡平面（北から）



断面（西から）



貼り床断面（西から）



作業風景

写真図版30 5号竖穴建物跡



6号整穴建物跡完掘（東から）



断面（北から）

写真図版31 6号整穴建物跡

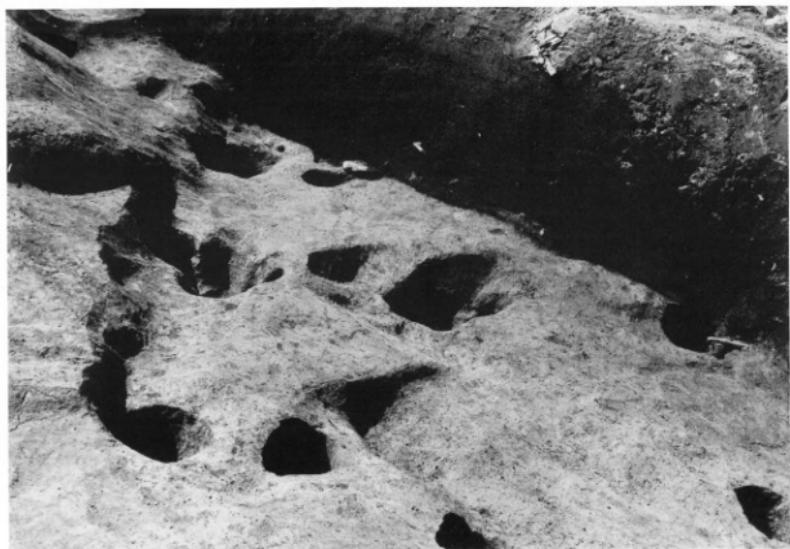


7号竪穴建物跡完掘（北から）



断面（東から）

写真図版32 7号竪穴建物跡



8号竪穴建物跡完掘（東から）



断面（南から）

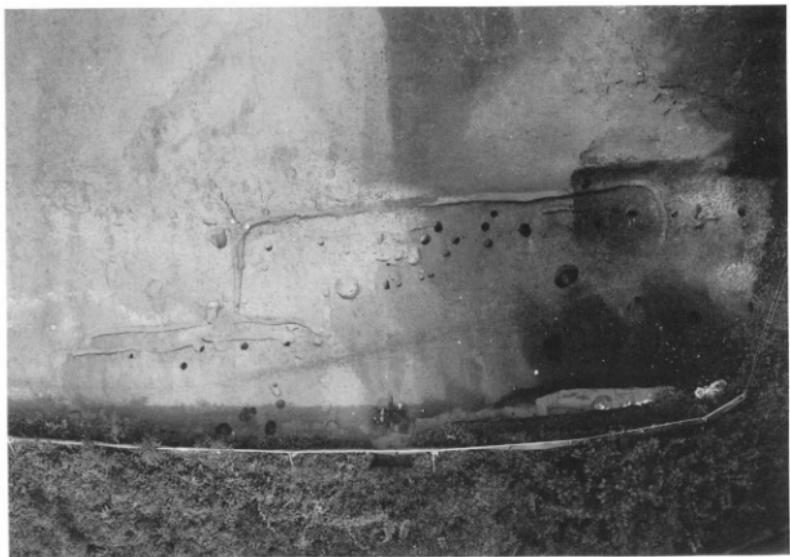
写真図版33 8号竪穴建物跡



9号竪穴建物跡平面（西から）



断面（南から）



1～4号竖穴状遺構全景



1号竖穴状遺構

検出



1号竖穴状遺構

断面



1号竖穴状遺構

P 1断面



1号竖穴状遺構

遺物出土状況

写真図版35 1～4号竖穴状遺構



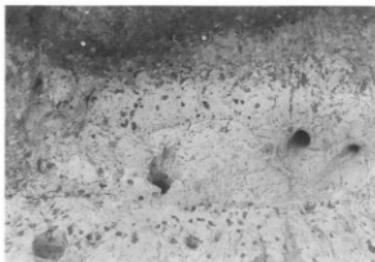
2号豎穴状遺構

断面



3・4号豎穴状遺構

断面

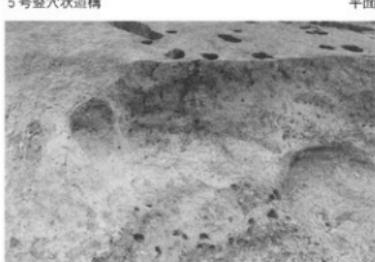


5号豎穴状遺構

平面



断面



6号豎穴状遺構

平面



断面



7号豎穴状遺構

平面



断面

写真図版36 2～7号豎穴状遺構



調査区東側全景（北から）

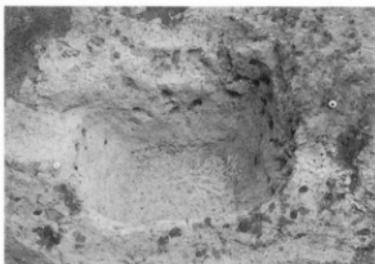


1号墓坑

断面



獣骨出土状況

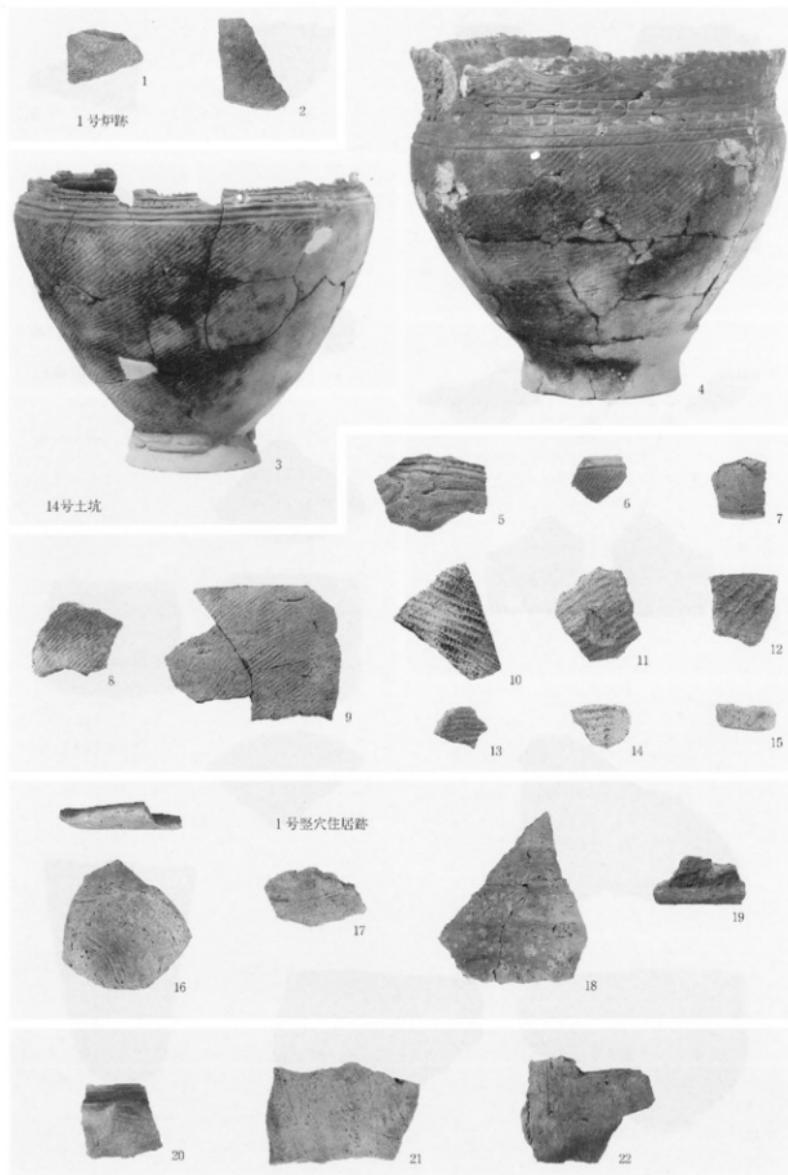


完掘

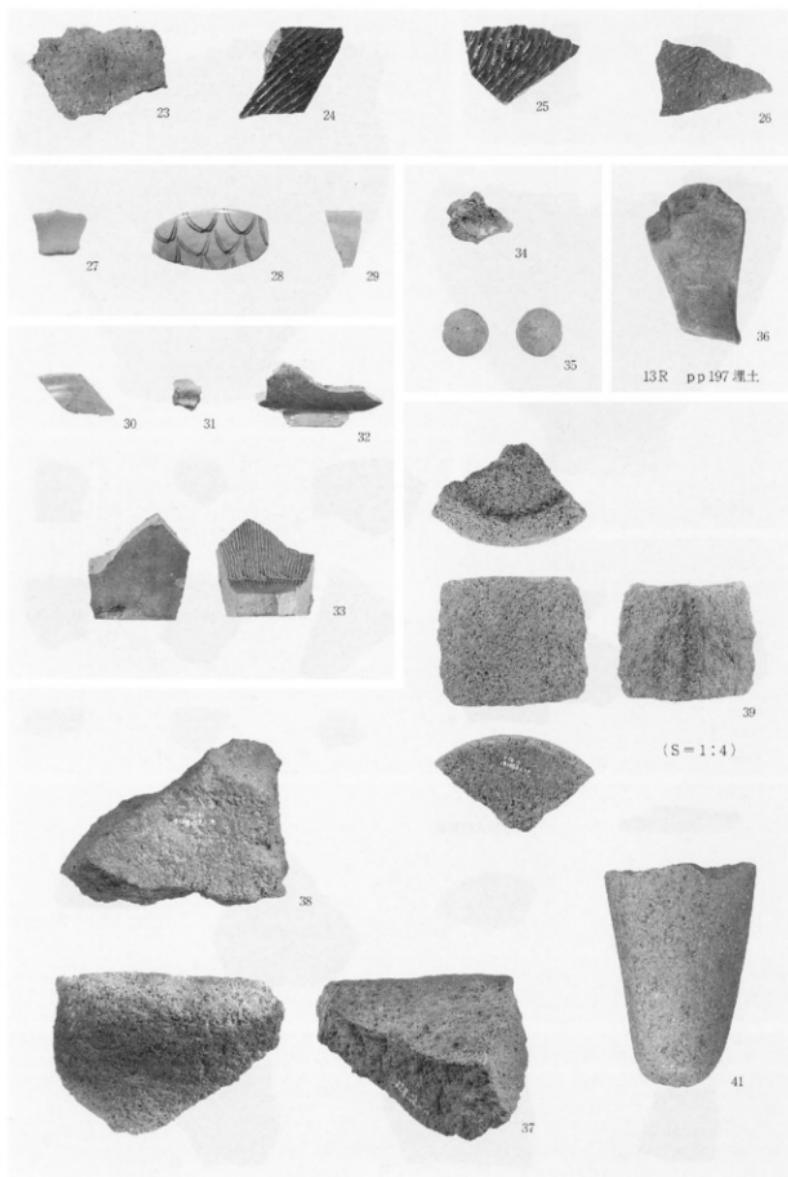


現地説明会

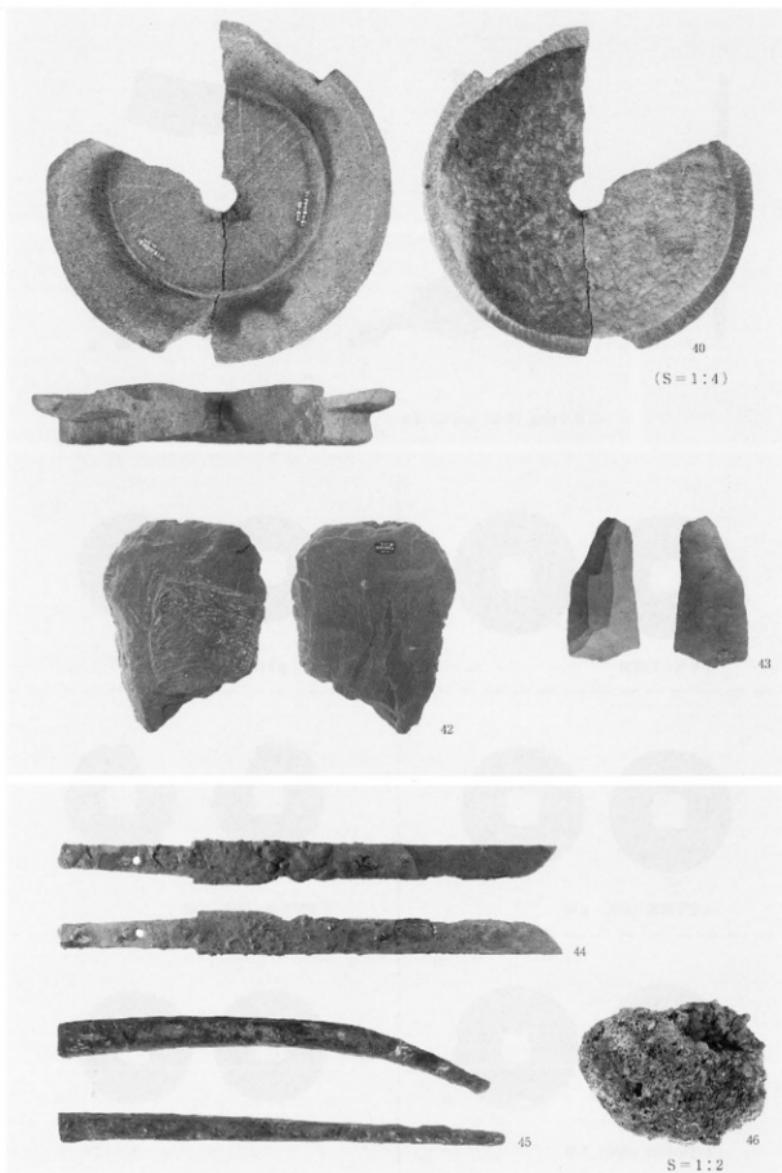
写真図版37 1号墓坑（獣骨出土）



写真図版38 出土遺物 1



写真図版39 出土遺物2



写真図版40 出土遺物 3



S = 1 : 2



S = 1 : 1



1号竖穴状遺構



130 pp 146 程上



1号平坦地（曲輪）II層



2号平坦地（曲輪）II層



5号平坦地（曲輪）I層



S = 1 : 1

写真図版41 出土遺物 4

報告書抄録

ふりがな	たてにいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	館II遺跡発掘調査報告書							
副書名	主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第497集							
編著者名	丸山直美・千葉正彦							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2006年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 度	調査期間	調査面積	調査原因	
館II遺跡	岩手県二戸市 静法寺町御山 第1番地	03213	JE37-0075	40度 11分 5秒	141度 9分 57秒	2005.05.19 ~ 2005.09.08	4,730m ²	主要地方道二 戸五日市線緊 急地方道路整 備事業に係る 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
館II遺跡	狩り場跡	縄文時代	炉跡1基 土坑42基（内、円筒形陥入穴状遺構の可能性あるもの14基を含む） 溝形陥入穴状遺構23基	縄文土器	*縄文時代晩期（大洞B C式期）の深鉢が入れ子状に積み重ねられた状態で2点出土している（14号土坑）			
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡3棟 焼土遺構1基					
	城館跡	中世	平垣地6箇所 切岸状遺構2箇所 空堀跡3条・大溝跡2条 土塁1箇所 掘立柱建物跡1棟 竪穴建物跡9棟 竪穴状遺構7棟 柱穴状小ピット595個 墓坑（歓骨）	古銭 陶磁器・茶臼・石鉢	*調査区中央部の空堀を埋戻した跡に複数の竪穴建物跡が造られている			
		中世以降						
		時期不明						
要約	館II遺跡は北向きの丘陵尾根部に造られた戦国時代の山城で、道を挟んで隣接する不動館と共に、それが連携しながら機能していたものと考えられる。調査の結果、礫や土壠によって画された複数の半円形の内部に、竪穴建物跡・竪穴状遺構などの建物跡が立地を異にしながら確認された。これら普普通に作事の痕跡からは、繩張りが数時期に亘って変更されており、次第に防御性を増しながら変遷してゆく様子が垣間見れる。本館跡に関しては文献資料・伝承が乏しく、その出来は不明であるが、歴史的な背景や周辺に複数存在する館跡の位置関係等から推測して、当時この地方を所領した浄法寺氏に関わる人物によって築かれた山城であった可能性が高い。							

(北緯・東経は日本測地形による)

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第497集

なで
館Ⅱ遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

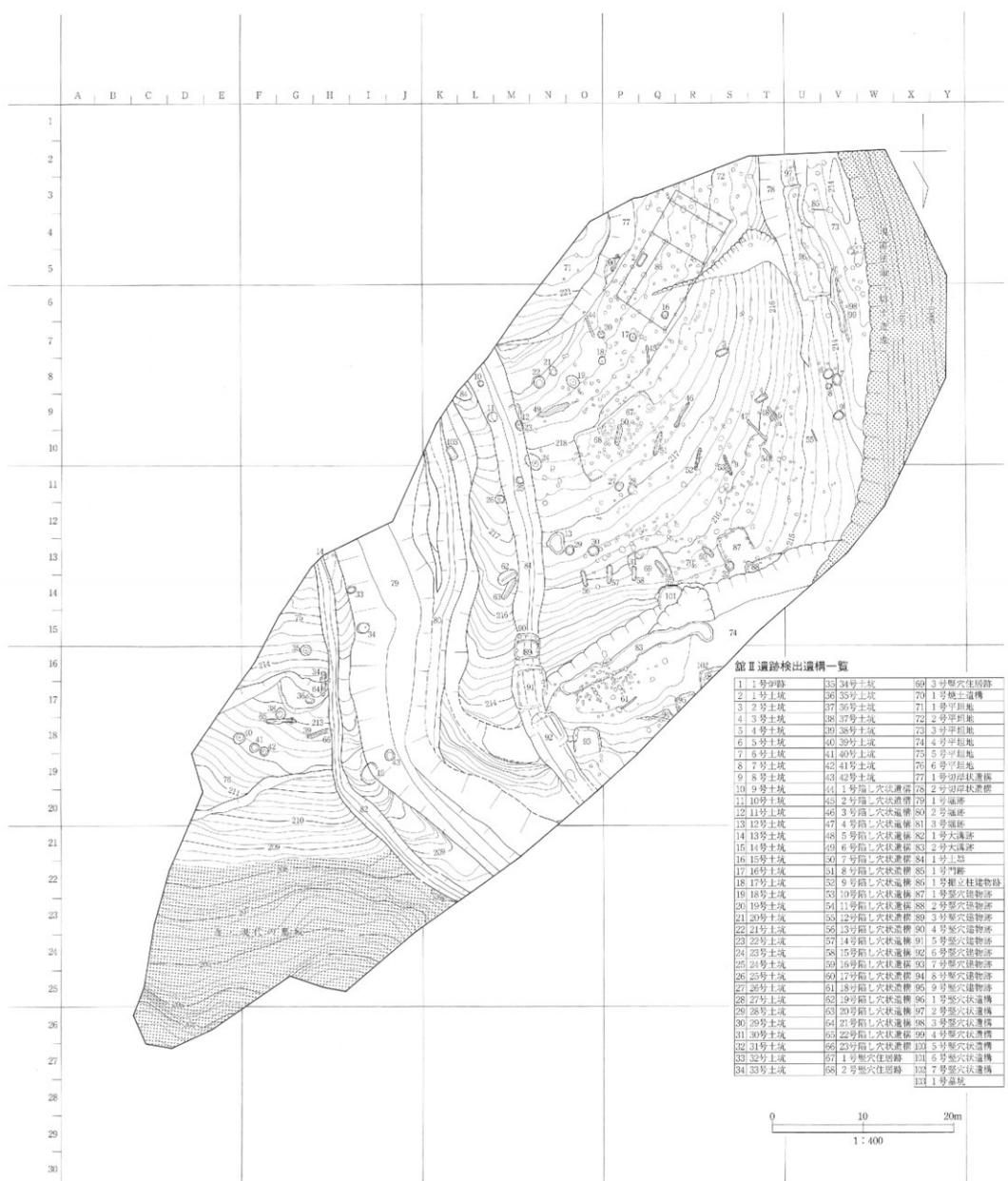
印 刷 平成18年11月20日

発 行 平成18年11月30日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印 刷 株式会社長内印刷
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ二丁目3-28
電話 (019) 643-5343

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006



館Ⅱ遺跡 遺構配置図

